謎手本忠臣蔵



加藤廣

下

新潮文庫

新潮文庫

謎手本忠臣蔵

下巻

加藤　廣著



新潮社

新潮文庫

謎手本忠臣蔵

下　巻

加藤　廣著



新潮社版

9329

下巻　目次

第十一章　討入り劇事始め　元禄十五年春～初秋　7
第十二章　戦わんかな時到る　元禄十五年秋　81
第十三章　暁の急襲　元禄十五年極月　155
第十四章　終わりの始まり　元禄十六年初春　233
終　章　民に知らしむべからず　元禄十六年如月　297
あとがき　316
文庫版によせて　324
参考文献　329
解説　雨宮由希夫

謎手本忠臣蔵 下巻

第十一章　討入り劇事始め　元禄十五年春～初秋

1

元禄十五年三月末日。

内蔵助は『吉良邸討入り策』の趣旨とその準備書を書き終え、自邸に祀る主君の位牌に捧げた。

巻紙にして一本分ほどの分量となった。

「やはり書いてみるものだな」

書面にまとめてみて、自分でも、すっきりと主君の刃傷事件の発端から、これまで

の経緯が呑み込めた。

要は桂昌院の従一位授与を巡る朝幕間の紛争に、主君内匠頭が、何らかの理由で口を挟んだ。

これを吉良が咎めたのだ。

これまで聞き集めた諜報では、そう断定せざるを得ない。

その時の吉良の態度と不用意な言葉遣いが招いた報いである。

しかし――、

ご主君に対しても一言いいたいことがあった。

「手前、内蔵助なら『そりゃ聞こえませぬ上野介殿』と、芝居もどきに笑い飛ばして済ませたものを」

吉良の言葉一つに、目くじらたてることもないではありませぬか。

そんなことでは、遊里遊びもできませぬぞ――。

現に遊里での内蔵助は「田舎大名の阿呆家老」で通っている。

悪口には耳にタコができていた。

これを笑って聞き流すための自戒にと、内蔵助は、自分の使う朱塗りの盃に自己流

の掟を書いている。

今に残る「掟の盃」。

その戒に、

喧嘩口論堅く無用

とあるのは、主君の轍は踏まぬという秘かな決意の表れである。

他人に仕えたことがなく、遊びを知らぬ世間知らずの殿様のこと。加えて、その生来の潔癖性が、吉良の軽率な言葉を許せなかったのであろう。元々忍耐の糸が弱かったせいである。

（だが――、なぜ、もう一度、息を大きく吸って、家臣のために耐えてくだされなかったのか）

その意味では、内蔵助の亡君への共感は薄かった。刃傷に到る複雑な背景を知った今も、この想いは引きずったままである。

しかし、刃傷事件の後、幕府の厳しい吟味を受けた時のご主君は、男らしく諍いの内容を一切口に出されなかった。

さすがである。

（語れば朝廷のお気の毒な立場を世間にさらすことになる。併せて幕府の位階簒奪の

専横も露出する）

これを避けられたのだろう。

せめて、《神君の密書》でも盗まれずに残っていれば――、朝廷は、幕府との力関係が逆転できたかもしれぬのに――。この思いのすべてを、ご自分の胸三寸に呑み込まれたまま、殿はあの世に行かれてしまった。

殿の、朝廷を思う、けなげな心情が、家来として、たまらなく悲しく、またせつなかった。

（幕府の役人共め、殿の無言の死は、幕府のためでもあったのだぞ。それを、士庶人のように、殿を庭先で切腹させおって……）

心ない幕府の仕打ちが憎い。

吉良を討つことは、同時に、いやそれ以上に、幕府の驕慢（きょうまん）への警鐘のためなのだ。

この結論に到達した時、内蔵助の心は決まった。復讐（ふくしゅう）の趣旨が自分でも心底納得できたのである。

後は、時期と手段との戦いであった。

決意の覚書は無記名の個人覚書とし、警戒のため四つ切りとした。

その第一部と第三部、第二部と第四部を、自分と主税が、各々薄い油紙に包んで胴に巻いた。

覚書を纏め終えると、内蔵助は、四月を期して実践に入った。

まず四月七日。

綿屋善右衛門を伴って、伊勢参りに出かけた。善右衛門は例月の参詣。内蔵助にとっては復讐計画の祈願状の奉納のためである。

祈願状には次のように認めた。

八百万神、乞御照覧

祈必殺怨敵仙野卜一（吉良上野介の暗号―中巻一三九頁参照）

願人　垣見左内

右助人

池田久右衛門

親の敵討ちに繕ってある。

伊勢神宮では、この奉納だけに話をとどめた。善右衛門から、密書に関与した宮司の紹介を受けたが、あくまで近衛家の者という接見であったため、深く話題に立ち入ることはなかった。

二人は、この数日の旅で肝胆相照らす仲になっている。

周囲の誰もが、この不思議な組み合わせの旅に首をかしげたが、内蔵助は笑って答えない。

しつこく訊ねる者には、

「お伊勢さんの町の古市遊郭には、京に劣らぬいい女がいると聞いた。一見ではもてぬゆえ、お顔の広い善右衛門殿にご紹介願っただけだ。今から、ぞくぞくするほど楽しみじゃで」

軽薄な笑いで煙に巻いた。

十四日、帰京。

自邸に祀る亡君の位牌に伊勢参りの報告を済ますと、早速覚書に掲げた身辺整理策の第一、

「妻子との離別」

から始めた。
七ヶ月の身重の妻だが、三月中に、離別を予告してある。
覚悟はすでにできている筈。
事実、気丈な理久は、
「どうか、ご本懐を」
眉一つ動かすことなく言った後、
「心残りは、お腹の子をお見せできないこと……」
と、この時だけ涙を見せた。
翌朝（十五日）、長女くうを連れての出立でも、気丈な姿勢は変わらなかった。
「長いこと、お世話にあいなりました。くれぐれも、くれぐれも、お身体、おいとい遊ばされますように」
最後の言葉を残して、身重の身体をゆっくりと翻し、そのまま女駕籠へ――。
しかし、この時、理久の背と肩が激しく震えていた。
それが、理久の気持ちのすべてを物語っていた。

なお、この他の子は――、

次男吉千代（十二歳）は石束家に養子に出した。その後、吉千代は出家している。
次女るりは母方の親族である進藤源四郎の養女とした。
但馬に帰った理久は、七月五日、三男大三郎を生むのだが、これは、この後の物語である。

次の第二の身辺整理策は「親族との義絶」である。
親族は、叔父三、叔母一、従兄弟、従姉妹が九人。その他の分枝を含めれば、二十人を超える。
一挙後に罪累を彼らに及ぼさないための工夫は、考えてきた以上に困難だった。
「何故の義絶でござろう」
と、問い詰められれば、下手をすれば、江戸の高田郡兵衛の二の舞になりかねない。
一番の妙案は、義絶するより、義絶されること。
言うなれば親族一同に「愛想尽かし」されることであった。
このための手段が女道楽である。それも一方的に愛想尽かしされるような、顰蹙を買うものでなければならない。

まず手始めに親族の小山源五右衛門（内蔵助の叔父）と進藤源四郎に若い女捜しを求めた。

「妻が居なくなって、せいせいした。余生の楽しみに、なるべく若くて小柄な、胸乳の大きい女を抱きたい。もう年増の大女は御免蒙るでな」

聞き捨てならぬ妻への悪態を放って、二人を唖然とさせた。

当然、この話は他の親族や妻に伝わる。それも計算済みである。

こうして選ばれたのが「可留」である。二条通り寺町二文字屋次郎左衛門の養女という触れ込みだが、実は若い身体を元手に、一ヶ月一両から五両で、四、五人の旦那を掛け持ちして生きてきた「月囲い」と称される女である。

華奢な、ぬけるような白い身体。胴廻りは、内蔵助の短い腕でめぐらせるほど、きゅっと細い。そのくせ、胸は朝顔型に隆起して豊かであった。

すべてが内蔵助の言う条件にかなっていた。

しかし、親族二人には、そのような女を選び出す才覚はない。

そこで動いたのは、ただの「口入れ屋」か。それとも別な第三者か。

ともかく、二人が考えたのは、

「復讐など、とんでもない。女の魔力で内蔵助の曲がった気持ちをくたくたに溶かし

てくれ。そして災いが我等親族に及ばないようにして貰いたい」

そんな気持ちだったろう。

しかし、内蔵助にとっては誰の選択だろうと、どんな女だろうと、関係なかった。

女遊びは、可留だけにとどめる積もりはない。

それに――、

会ってみると、可留は、賤しい「月囲い」にしては、日常の居ずまいから食事時の箸や椀を扱う動作、食べる仕草に到るまで、そつがなかった。

誰かに調練された女。

それでなければこうはなれない。

自身は読み書きができないと言うが、内蔵助が手紙を書いていると、側に控えていて、じっと筆の運びを追う目に、明らかに文字を読む動きがあった。

数日の同棲だけで、内蔵助は、可留が、女忍びではないか、との疑惑を深めた。

だが、誰が放った忍びか？

幕府、甲州、上杉、あるいは吉良か。その可能性は色々ある。

問いつめては自害されるだけ。

死なれては、「見えざる敵」が推測できないばかりか、こちらの自堕落ぶりを伝達

することもかなわなくなる。

（敵を安心させるためには、最後まで放っておくに限る）

女道楽もまた、内蔵助にとっては、裸の〈男をかけた戦い〉であった。

こうして内蔵助は、地元撞木町（しゅもくまち）は元より、夜な夜な京の色町に出て、これ見よがしな放蕩（ほうとう）を開始するのである。

2

京の遊郭は、桃山期の天正十七年（一五八九）、秀吉によって、戦乱に明け暮れる武士らの鎮撫（ちんぶ）にと二条柳町に開設が許可されたのが始まりである。江戸期になると、慶長七年（一六〇二）、二条城造営のため遊郭は六条に移された。ここを六条柳町、または六条三筋町と呼んだ。三筋とは、三味線の別名からそう呼ばれたとも言われるが、実は郭（くるわ）内に小路（筋）が三本あったことによる命名である。その後、三筋町遊郭は寛永十七年（一六四〇）、島原に移されている。

島原が京の公許の遊郭である。

町全体が「島原の乱」の時の砦（とりで）に似ていたところから、〈男の戦い〉の皮肉と可笑（おか）

しさを込めて、この名が付いた。

なお、祇園は、京の非公許の遊郭が発祥である。当時は、島原が男の上位の遊び場であった。

内蔵助は、島原に出向いては、せっせと馴染みの女を作った。

新しい女は、島原の「枡屋」抱えの夕顔、「一文字屋」の浮舟。

いずれも「太夫」ではなく、一段下の「天神」。さらにその下の「鹿恋」辺りである。それでなければ金が続かなかった。

ちなみに、「太夫」の一晩の揚代は、銀七十六匁であった。

銀六十匁（公式には五十匁）が一両（約十万円）だから、現在の十二万七千円相当になる。

「天神」なら銀三十匁。太夫の半分以下で済む。さらにその、も一つ下の遊女は「鹿恋」。こちらは、さらに半分以下の十四匁。

「鹿恋」とは奇妙な名だが、これには粋な由来がある。

当時の博打カルタは札をめくるのが十四枚まで。そこで勝負をつけた。これを「囲う」と言った。

この「囲う」をもじって銀十四匁で買う遊女を「鹿恋」。

なんとも美しい当て字にしたものである。よほど練達の粋人の考えたことであろう。現代でも愛人を「囲う」というのは、ここに由来する。「鹿恋う」と書いた方が美しかろうに……。

といったわけで、内蔵助は主に天神や鹿恋程度の遊女を相手に、徹底して遊びまくった。

最初は親族に愛想を尽かせるための作戦だった。結果は大成功で、短時日のうちに内蔵助の叔父を始め、そのほとんどが先方から義絶してきた。

大石の親族が、後の討入りに加わらなかったのはこの成果である。

だが、一旦始めた遊びは止められなかった。やがて「見えざる敵」を油断させ、世間の目を欺くとの理屈をつけて、ずるずると続ける羽目になった。

元来、遊びは嫌いではない。いや、とことん好きである。それだからこそ続いたのである。

この頃の内蔵助の心の真底にあったのは、「武士の一分」でも「復讐」でもなかった。むしろ、武士という身分の馬鹿ばかしさ、それを超えられない己れの情けなさ。これを冷笑する第三者としての自分の眼。

それがやりきれなかったのである。
酒と女との忘我の境だけが、自分の眼から逃れる唯一の憩いの場であった。

そんな、或る夜の撞木町での遊びの最中であった。
後から駆けつけてきた悪所仲間の進藤筑後守が、そっと耳打ちした。
「大石氏。中々申し上げる機会がなくて遅れ申したが、朗報がある」
「なんでござろうや」
内蔵助は酔眼朦朧のうちに訊ねた。
「あの成り上がり者の柳沢の屋敷が灰燼に帰しましてな」
「えっ、それはまた」
「誰かが放火したに違いない。いやはや愉快、今夜の酒はうまいぞ。なあ、そうであろうが」

3

四月六日の朝方のことであった。柳沢吉保の屋敷下の家屋より突然出火。火はたち

まち燃え拡がり、吉保、吉里の居宅を始め、将軍御成り用の行殿なども全焼した。
併設した綱吉の小姓たちの家は三分の一が焼失した。
町子の『松蔭日記』も吉保の『楽只堂年録』も、その原因に触れないが、明らかに放火である。
その原因は嫉妬であろう。

将軍綱吉の母桂昌院が七十六歳の高齢で従一位に叙せられた。この功績により吉保は食禄二万石を加えられた。都合十一万二千三十石。
これで吉保は念願の十万石大名となった。
昨年十一月末の松平姓の授与といい、今回の加増といい、将軍家からの褒賞があまりに目立ち過ぎた。
それに――、
桂昌院の従一位昇叙に、吉保がどのような形で貢献したのか。
誰も、その経緯を知らない。
一応、表向きは、町子の父・正親町実豊を通じて「強力に工作した結果」ということになっている。

しかし、正親町家は公家の地位は「権大納言」程度で、政治力は到って弱い。しかも実豊は老人である。

また、町子は才知ある女ではあったが、母は霊元院中宮であった新上西門院房子の侍女。それに父正親町の正妻の娘でもない。

親子ともに、朝廷に大きな影響力を及ぼせる存在ではなかった。

この発表には、誰もが納得しなかった。

柳沢への嫉妬と疑惑は将軍以外の国中のすべての人々共通の感情でもあったのである。

吉保自身、この火事の復旧に伴う評判を気にしていたのであろう。

火事の後、火附盗賊改の与力三人が、同心十人ほどを引き連れてやってきたが、吉保は早々に調べの中止を申し出ている。

「原因は、当方の失火かもしれぬ。なによりも他家への類焼がなくて幸いであった。残念なのは重宝、什物もさることながら、我が家の先祖の地、武川（甲斐国巨摩郡武川）以来の旧記、珍書、そして上様から戴いた刀剣類の喪失じゃ。建屋は再建できても、これらは二度と手に戻らぬものゆえな」

それだけを悲しむにとどめた。

ちなみに、珍書の中には天福本『伊勢物語』を筆頭に、冷泉為相卿、定家卿、紀貫之、九条関白卿らの歌集、短冊、写本。佩刀には、信国、則重、伯耆安綱らの銘刀など。

現在なら国宝級のものばかりであった。そのすべてが灰燼に帰したのである。

火事が収まると、吉保は、家族を駒籠の中屋敷などに分散させた。

しかし、自分と直属の部下だけは、屋敷の南に焼け残った空舎にこもった。

町子の『松蔭日記』は、このくだりを以下のように記している。

賤しく粗末な場所に、ある限りの者が集まり、所狭げに座っているので、何の見極めもつかない状態である。しかし、江戸城の綱吉公から遠く離れた場所に行くことは何といってもできることではないと思い、辛さに強いて耐えていらっしゃる。

（十三、山さくら戸・六段）

出火を聞きつけて、どっと火事見舞客が多額の「見舞金」持参でやってきたのは言うまでもない。

人々のやっかみはさらにふくらみ、誰言うとなく「柳沢は焼け太り」と囁かれた。

事実、焼失した柳沢邸は、わずか一ヶ月で、再建されている。

それも――、これまでの屋敷が、吉保の出世の度に増築してきた継ぎ足し家屋であったのが、今度は初期から全体設計されて『源氏物語』の六条院を想起させるほどの壮大なものとなっていた。

続いて綱吉の「御成り御殿」も、その鶴の一声と、下賜された高級材木で、たちどころに再建された。

さすがに、この豪邸には気が引けたのか、町子の『松蔭日記』は、このくだりを、次のように記述して、吉保を擁護している。

そうはいっても、自慢げになさることは好まれないお生まれつきなので、ただ同じ様に見える一間一間なども、それぞれ相応しい趣で、新鮮味のある様子は、かえって感じがよく理想的でさえある。

（十四、玉かしは・一段）

しかし、嫉妬は正義の仮面を付けてやってくる。

吉保の新邸が、一段と憎しみを買ったのは事実であろう。
この悪評が意外なところに影響を及ぼした。
この年、五月下旬。
新居完成祝いでごったがえす柳沢邸の訪問客の中に、ぽつんと浮かぬ顔の男がいた。
細井広沢である。
型どおりの祝いの挨拶の済んだ後も、なにか曰くありげに残っているのに気付いた吉保。こちらから、
「弁庵先生、なにか特別な御用がおありか？」
と、声を掛けた。
広沢は、小さな声で、
「ちと、お話ししたき儀がござって」
だが妙におじおじしている。
「では、こちらで」
黒書院に人を遠ざけて二人きりになると、広沢は、ようやく、ぎごちなさが消えた。
「実は、このような祝いの場で申し上げるのは、心苦しゅうござるが――」
と、前置きして、懐から出したのは、思いがけぬ「致仕（辞任）願い」であった。

吉保は、はっとなった。
自分が二万石の加増に与ったのに、忙しさに紛れて、朝廷攻めの重要な手がかりを与えてくれた広沢に、礼をしていなかった。
そのせいか――。
だが、広沢の口から出たのは意外な言葉であった。
「他意はござりませぬ。他家に仕官する積もりもござらぬ。まして頂いている禄に不満など毛頭ございませぬ」
「では、なぜ？」
「ちと、心苦しい事情が松平右京大夫さまとの間にできましてな」
「まさか、あの件で――」
「さよう。そのまさかでござる」

会話は短いが、ここに到るまでの話は、かなりややこしい。
広沢の知人に、太田左兵衛という、元越前松平家に仕え、禄高三千石を得ていた武士がいた。
貞享三年（一六八六）。松平綱昌が改易となり浪人となったのを機に、親族の一

柳土佐守を頼って江戸に出た。

江戸で旗本になるのが望みだった。ところが、一柳家では話が進まないところから、広沢の願いで吉保が口を利き、太田を老中に「五百石程度の旗本」ということで推挙した。

ところが老中は、「大名の兄弟、叔父甥ならともかく……」と、うんといわない。吉保も、無理強いはしなかった。「それでは、自分の所で召し抱えましょう」と、太田に伝えたが、「旗本以外は嫌」という、可愛げない返事で話は頓挫した。

ところが、この間――吉保は知らなかったが――、もう一人、太田の知己に、忠右衛門という人物（苗字不明）が登場していた。

この人物は、松平右京大夫に仕える者を自称し、

「太田殿の家宝である『獅子王の剣』を松平右京大夫さまに差し上げれば、貴殿の旗本への道が拓かれよう」

と提案し、右京大夫に剣を献じさせたという。

『獅子王の剣』とは、平家物語で有名な源三位頼政が、近衛天皇を悩ませた鵺を退治したとき、天皇から褒美に遣わされたという伝説の剣である。

本物なら何千両もするだろう。

ところが、これがこじれた。

広沢の願いで、この話を耳に挟んだ吉保――、おかしなことがあるものだなとは思ったが、縁戚の気軽さもあって、城中で右京大夫に耳打ちした。

ところが話は全く相違していた。

「拙者、剣の話などは存じませぬぞ。第一、仕官の頼み事でしたら、そのような土産物を頂戴することはできませぬ。きっぱりお断り申しておりまする」

との返事。

「ごもっとも、ごもっとも」

吉保は、こんな話を持ち込んだ非礼を詫びた。

右京大夫は嘘の言える人物ではない。

ところが、広沢に、この件を再度戻すと、間違いなく剣は右京大夫に渡したという。

それに、右京大夫には「能の見物と馳走の接待をし、料理は肴を三度迄取り替えるようなたいそうなご馳走」をした、というのである。

「しかし、今では、事実を確認しようにも、肝心の仲介者である忠右衛門が死亡しており確認ができませぬ」

と広沢。

ここまで聞いて吉保は読めた。

当時よくあった、仕官を巡る「駕籠抜けの騙り」であった。

忠右衛門も、右京大夫もすべて騙り者。忠右衛門が死んだというのも嘘で、どこかで生きているに違いない。

ところが、田舎者の太田と、世間知らずで真面目一方の広沢は、怒りにまかせて、右京大夫の家に怒鳴り込んでしまったのである。

「致仕願い」は、怒鳴り込んだ後で書かれたものであった。

浮かぬ顔をしていたのは、こんな経緯が原因だった。

「右京大夫さまの所に行かれる前に一言、小職に言ってくだされればよかったものを」

吉保はぼやいたが、後の祭りだった。

怒鳴り込まれた松平右京大夫は、カンカンに怒っているという。

「この上は、殿と松平さまとのご関係（親戚同士）もござれば、拙者、致仕せざるをえませぬ」

広沢は、額に冷や汗を浮かべて平身低頭した。

「いや、事情さえ解れば、小職から再度、右京大夫さまには、よくよくお詫び致す。

なに、小職と右京殿との間のこと。話せば、お互いに、とんだ災難だったと笑って済ますことはできましょう。致仕の件は、どうかご撤回願いたい」

だが、広沢は強情だった。

「すべては拙者の無知と不徳の致すところ。今さら取り返しはつきませぬ。平に平に、この願い、お納め頂きたい」

断固として引き下がらない。

吉保も諦めざるを得なかった。

4

この広沢の柳沢家を去った事情について、細井家の家譜には、

「太田左兵衛事に付、松平右京大夫之意に忤い浪人となる」

としか記載がない。

柳沢家の記録には、あれほど広沢を重用していたのに、その退任については、一言の記述もない。

この頃を境に、月見や歌会などで広沢の名が消えていた。

ところが、この後、吉保が再度右京大夫に詫びを入れると、またまた妙なことが判明した。

「いや、拙者がカンカンに怒ったなど、とんでもござらぬ。世間でよくある騙りでござれば、細井殿の丁重な詫びを頂き、かえって恐縮している次第。ご懸念無用に願いたい」

右京大夫の返事に、狐につままれた気持ちで城を退出すると、吉保は、この疑惑を調べさせようと、将監を呼んで、ありのままをぶつけてみた。

将監は待っていたかのように答えた。

「細井さまに関しては、これまで柳沢家のお仲間うちのことゆえ、申し上げにくく存じて参りましたが……、実は、昨年来の赤穂浪士の身辺調査の中で、時々細井さまのお名が浮かんでは消えておりました」

「ほう、それは知らなんだ。そういえば弁庵殿は、学問一辺倒のお方ではなかったな」

「御意。細井殿は、かつては、念流の剣客堀内源左衛門道場で、中山安兵衛と申す者

と同門でござれば……」
「中山安兵衛？　どこかで聞いたような名じゃが」
「高田馬場の仇討ちで有名な男でござる」
「ああ、あの男か」
「あの仇討ちは、八年ほど前でございました。堀内道場の同門、菅野某の助太刀として高田馬場に駆けつけ、一人で十八人の敵を相手に戦い、勇名をはせました。この男が浅野家の堀部弥兵衛の娘婿となり、今は江戸の過激派の一方の頭領でござる」
「ほう、巡りまわって不思議なことじゃな。その男と弁庵先生との関係が再開したというのか？」
「御意。細井先生は近頃、と言っても昨年霜月（十一月）あたりからでござるが、堀部と急接近されておりまする」
「そうか。それで読めたな。堀部から、なにかと相談を受けるのだろう。その時、柳沢家の肩書きが煩わしかったのだな」
「どうもそうらしゅうございますな。で、どうなされます。この後」
「うむ」
吉保はじっと腕を組んだ。

元々は、「桂一計画」のために積極的に採用した男だった。
その意味では今、大役が終わって「お役御免」があってもいいかもしれない。
（だが、例の長崎の築島［出島］の探索がまだ未解決だ。家禄の返上はともかく、なんらかの接点だけは今後も持ちたいもの――）
そんな後ろ髪引かれる思いがあった。
「しばらく考えさせてくれぬか」
禄を離れても、なにか援助だけは続けたい。それに、死んだ広沢の兄の妻と子供を支えているために生活に余裕はない筈だ。
そんな思いが、吉保の答えを曖昧なものにした。

この時、結果的には広沢を手放すことになるのだが――。
これは、やや大袈裟に言えば、日本にとって、国家的損失だったかもしれない。
というのは、広沢は当時、吉保の命令で日本の金の欠乏原因の核心に迫っていたからである。

綱吉政権は、柳沢吉保と荻原重秀の英断で、新貨幣を発行し、貨幣の「脱金作戦」

を敢行した。

以後、貨幣は、幕府の権威と強制によって、金の含有量と関係なく、新旧貨幣とも、「十両」は「十両」で通用させてきた。

ところが、ここに盲点があった。

国内の金持商人が旧貨を使わず、退蔵しただけではなかった。

貿易窓口のオランダが、商決済に当たって、秘(ひそ)かに金の含有量の多い日本の旧貨を選好し、旧貨決済の場合は、金の含有量の多い分だけ割増の交換率で取引した形跡が濃厚だからである。

ちなみに、当時の日本の金と銀の交換比率は、十七世紀初頭（慶長十四年）に定めた金一両＝銀貨五十匁(もんめ)が固定レートである。

が、実勢は、一両が六十匁となり、幕末にかけて百匁以上になっていく。

この背景には、徳川中期以降、南米で大量の銀鉱脈が発見され、世界的に銀の相場が急落していたという事情がある。

「鎖国ぼけ」していた日本人だけが知らなかったのである。

築島のオランダ人は、交換率を割り増ししても十分お釣りがでた。にも拘(かかわ)らず、彼らは、この銀相場の変化を、この頃も、そしてこれ以後も——相当長期間に亘(わた)って

――日本に知らせなかった。

値下がりした銀を大量に長崎に持ち込んでは、昔のままの交換比率で日本の金を持ち出していた疑惑がある。

このため《黄金の国ジパング》は、またたく間に金を流失していったのである。

オランダが、「島原の乱」で、徳川側について艦砲射撃までしてくれたのも、ケンペル（オランダ東インド会社船医）のような謹厳実直な学者が、元禄初期、二度にわたって江戸城に登り、綱吉の前で、学者らしからぬ次のような愛想を振りまきまくったのも、みな、この儲けのためではなかったか。

厳粛なる儀式の跡は、全く茶番狂言の姿となり了った。

皇帝（綱吉）は、（我等）近く進み、我らが身体の全部を見んが為に、真っ直に立て、立ち止まれ、相互の挨拶を交換せよ、踊れ、飛べ、泥酔者の真似をせよ、片言の日本語を咄せ、蘭語を読め、画を描け、歌え、外衣を著けよ、又脱げよと、あらゆる註文をした。

我らは能う限り、巧みに皇帝の命のままに、これを行うた。予は踊りながら、独逸高地の恋歌を謡うた。

（ケンペルの日記抜粋――徳富蘇峰『近世日本国民史　赤穂義士』より）

この外国人らしからぬ卑屈の裏に途方もない利権があったのだろう。
この疑惑の尻尾を摑んだところまでで、細井広沢が幕府の用務から去った。
そして柳沢の金銀に関する知識も、中途半端なところで切れてしまったのである。

5

吉保と将監の話し合いは、この後もまだ続いた。
「ところで、ひょんなことで弁庵先生の話が、赤穂浪人の話になってしまったが……」
吉保は苦笑いして将監との会話を浅野問題に転じた。
「そなたに命じた浅野が事で二つまだ聞き漏らしていることがある」
「存じております。赤穂塩のことと赤穂に派した女忍びのことでございますな」
将監も居ずまいを正す。
「そうだ。事のついでに、ここで聞かせてもらおうか」

「では、まず赤穂塩でござるが」
将監は、持参した風呂敷包みから分厚い書類を出して並べた。
「残念ながら製塩法に関しては、詳細に他所の製塩図と比較いたしましたが、いずれも同じ《入浜塩田》と称するもので大同小異。特に変わった工夫は見られませぬ」
「では、どうして赤穂塩だけが傑出して珍重されるのか」
「さて、それは……」
将監は、苦しそうに顔をゆがめたが、吉保は、
（これはいつもの将監の癖）
と見破り、
「もったいぶらずに申してみよ」
からかうように言った。
将監は、にやりと笑って、
「いや、もったいぶるわけではござりませぬ。ただ、我等が推測に過ぎませぬゆえ……。殿は、日頃、部下の者には、意見でなく事実だけを申せ、後は余が判断する、と言われますので、なかなか言い出しにくうござる」
皮肉たっぷりに答える。

吉保は、思わず噴き出した。
「たしかにそう下僚には申しておる。だが、そなたは別じゃ。それに製法に違いがなければやむを得ぬではないか。構わぬ、そなたの意見を許す」
「しからば申し上げます。結論としては、海水の違いしかございませぬな」
「愚かなことを申すな。赤穂の海だけが特殊なわけではあるまいが」
「それがあるのでございます」
将監は、あくまで冷静だった。
持参した包みの中から引き出した赤穂の地図と塩田の所在を書いた箇所を指で示しながら続けた。
「この塩田をご覧下されませ。塩田は赤穂の中心を流れる熊見川に、ごく接近して展開しております。塩田が取水する海水は、間違いなく熊見川から海に流れ込む大量の川水の良質な養分を含んでおります。塩のうまさの秘密は、この水にあるのではなかろうか。それが、目下の拙者の推論でござる」
「ほう」
吉保は、思わず唸った。
改めて、この男のすごさを見た気がした。

「証拠はございませぬ。が、傍証になるものが、これでござる」
将監は、油紙に包んだ小さな白い紙袋を出した。
「ご覧くだされ。ここに天・地・人の符号を附した三つの塩がござる。開いて是非お味見を」
「余を塩の試験台にするのか」
吉保は、また苦笑した。
「はい、昨年、拙者も殿の試験台となりました。此度は殿にも……」
「よし、やってみよう」
吉保は腹を決めた。
将監がまず毒味した後、吉保は、袋を一つずつ開き、その少量を舌に載せた。
味がわかったら、さっと吐く。
舌を丁寧に紙で拭いて次の塩に挑戦した。
しばし考えた末、やおら将監に向き直った。
「判った」
「では、殿のご判断をお聞かせくださいませ」
「天と地の袋は赤穂塩、人の袋は普通の塩と考えるが、どうじゃ」

「ご正解は半分。人の袋は確かに一般の塩でござる。しかし、天と地はいずれかが赤穂塩。も一つは別の塩でございます。さてどちらでございましょうか」
「では、もう一度、その二つだけで試みよう」
「お願いいたしまする」
再度挑戦したが、どちらも、区別できないほど、舌の上で溶けると、なんともふくよかな甘みがあった。
「わからぬな。勘弁せい」
吉保は兜を脱いだ。
「失礼いたしました。天が赤穂塩、地が古来からの藻塩でござる」
「ほう、藻塩か。区別できぬな」
「料理の玄人ならいざ知らず、我々では区別できませぬ。それほど赤穂塩が美味ということでござる。この理由は熊見川の良水が海に流れ込む。この養分が塩田の海水に混入している。これ以外に考えられませぬ」
「そうか」
吉保は膝を打った。
「ということは、残念だが赤穂の製塩の技は、いくら真似たとしても、他所では無駄

ということになるな」

「御意」

「一つ利口になったわい。では、次の女忍びの件に参ろう。今どうなっておる」

「予定どおり、撞木町の遊女浮橋として大石と馴染みにさせました。この浮橋、ちと商売を忘れて大石に惚れ過ぎているところが気になりまするが、お役目の報告だけは、なんとか果たしております」

やはり自分の娘なのだ。それでなければ、この男、役目を忘れて相手に惚れ込むような女忍びは、とっくのうちに殺していよう。

「で、大石のその後はどうじゃ」

「今年の前半は上方を動きませぬな。今は、もっぱら家族の整理と親族の義絶を画策しておりまする」

「義絶か。ということは、それが一通り終われば、本気で復讐する気になるということだな」

「御意。すでにその気満々でござる。一枚摺でご覧になってのことと存じますが、世間は、大石の悪口で満ちております。ところが本人は馬耳東風。これは、あやつの戦術と心得まするが」

「余もそう思う。かつて加賀前田家の殿も、幕府に警戒されぬために、わざと鼻毛を伸ばして馬鹿面を装ったそうじゃ。これは老中の語りぐさだ。そういう男ほど恐いのじゃ」

「で、幕府としては、この大石をどうなさる御所存で」

「なにもせぬわ」

吉保は、さらりと言ってのけた。

桂昌院の従一位昇叙が許された今は、どのような事件が起きようと関心はない。

「では、吉良殿が殺されてもよろしいのでございますか」

「構わぬ。かえってその方がすっきりするかもしれぬ」

「えっ」

「驚くことはない。高家などという家柄は、わが徳川家には掃いて捨てるほどある。吉良同様、どれもこれも気位ばかり高い、鼻持ちならぬ輩だ。それも、そろそろ新旧交代の時期に来ている。吉良家がどうなろうと別に困らぬわ。それに、これからの幕朝間の使いは、もそっと穏健な使者でなければならぬ。吉良上野介は若い頃から、後西天皇始め何人もの天子さまを退位に追い込んできた幾多の前科がある。今の時代には困りものなのだ」

「なるほど。しかし、吉良の背後には養子に出した上杉家当主綱憲公がついておられまするな。養子の身とはいえ、実父を見殺しにすることはなされぬと思われまするが如何か」

「さてどうであろう。親子の情はどうあれ、大名は私事での争いは出来ぬ。まして家老以下は、家の存亡にかかわるような私事の争いには巻き込まれたくあるまい。できれば避けたいと思うであろう。とするとどうなる」

「一番手っ取り早いのは、吉良殿を赤穂浪士の手の届かぬよう米沢にでもお連れすることかと……」

「そうであろうな。綱憲からも父の隠居願いと並行して米沢へ引き取りたき旨の願い出が再三出ておる」

「やはりそうですか」

「だが、米沢行きは、どうも上野介が嫌がっておるようだ。遠く離れては、嗣子義周に諸式・典礼の仕来りについて、細部まで口伝できぬからであろう。それを理由に、幕府としては、隠居は許したが、米沢行きは保留としてある。吉良としては、子は愛しいが、さればと言って大石は恐し。複雑な心境であろうな」

「で、殿としては、いつまでこのまま吉良を江戸にとどめ置かれるお積もりでござろ

う」

「さてそこよ。難しいのは」

正直、答えに詰まっていた。

「しかし、大石が今年の後半に江戸へ来るとなると――」

（なんとか、そこまで吉良を江戸に引き留めねば）

口から出かかった言葉を、吉保は、かろうじて呑み込んだ。

幕臣としては赤穂の浪士に吉良を討たせよ、とまでは言えない。言ってはならないことであった。

「それより――」

吉保は、ここで、さらりと話をすり替えた。

「捨ておけぬは、赤穂事件に対する江戸町民の無知よ」

「無知と言われますと……」

将監は、吉保の激しい言葉にすっと乗せられたようだ。

「江戸町民は、京朝廷のなんたるかを知らぬ。お伊勢参りはしても伊勢神宮と朝廷とが結びつかぬのじゃな。それゆえ朝使への不敬を罰した上さまのご判断が理解できぬ。だから、ただの〈判官びいき〉で赤穂事件を考えてしまう。とは言っても、町衆の気

持ちは〈たき火〉のようなもの。たかが、たき火、されどたき火。消えればなんでもないが、誰かに下手に煽られれば、その風によって、ふらふらとどちらにもなびく。それが恐い。馬鹿にしていればその風と火は、やがて幕府に向かって襲って来るやも知れぬ。それをどうかわすかじゃな。まあ、これについては後でゆっくり話そう」

（そろそろ放置してきた一枚摺の連中を、逆にこちらで操ってでも、幕府を守らねば――）

言いかけて、吉保は、再び言葉を胸の内にしまい込んだ。

（しかし、まだすこし早いか――）

6

七月十八日。

この日の朝、江戸木挽町屋敷に謹慎中の浅野大学の許に「切紙（召喚状）」が送達された。

若年寄加藤越中守明英（下野壬生二万五千石）の発したものである。

大学が即刻参上すると、若年寄同役衆列席の上、以下の公命が下った。

大学事亡内匠頭存命中世嗣に相成りおり候者にこれあり、内匠頭公儀に対し奉り、不届き相働き切腹仰せ付けられ候上は、そのまま擱かれ難く、今般閉門差し免され、知行召し上げられ候に付、安芸守本家へ引き取り申すべし。

閉門は許すが、兄から分与されてきた家禄三千石は召し上げる。
身柄は本家に預けられる、とするものであった。
唯一の温情は、家族と家来の帯同を許されたことだけである。

同二十九日。大学は妻子、少数の部下と共に広島・浅野家の家士の厳重な監視の下、広島に下っている。

内蔵助が、以上の幕府の処分を、江戸からの急報によって知ったのは七月二十四日である。
監視付のまま広島に向かうのでは、内蔵助が秘かに期待した「討入りの同志」にお迎えする可能性はない。

護送の途中を奪ってまで大学さまを復讐に取り込む気はなかった。
内蔵助は、この時点で大学を見限ったのである。
翌二十五日。
内蔵助は、何事もなかったように、別れた妻理久に、子供の出生を祝う次のような手紙（現代語抄訳）を書いているだけである。

十九日付の手紙拝見しました。いまだ暑さも格別ですが、出産後、血の道も起こさず無事に過ごしているとのこと、なによりと喜んでおります。
子供は大三郎と名付けた由、たいへんうれしく、逢いたいと存じます。
大三郎は、どこかに養子に出すつもりもあるかと、先日左六をそちらにやったので、一両日には着くでしょう。左六がこちらへ帰れば、そちらの仔細もわかるかと思います。こちらは変わりなく、私も主税も無事でおります。
いつかも話したように、ちょうど今、八坂祇園踊りの最中で、主税と見物に行ってきました。そなたにも見せたいものだと、つくづく思っております。
江戸からも報せが来ました。特別よくも悪くもないというのが、何とも残念です。
これも、いわば因果なのかと思う次第です。

いけだ久右衛門

七月二十五日
おりくどの　まいる

末尾にある、

「江戸からの報告はよくも悪くもないというのが残念」

これが大学の処分に対する内蔵助の、そっけない感想であった。

一方、堀部安兵衛が、同じ大学処分の報に接したのも二十五日。

場所は京都である。

実は十八日に、上方の急進派の要請によって江戸を発ち、偶々この二十五日、京に着いたばかりであった。

京の大高源五、大坂の原惣右衛門は、依然分派行動の意思を捨てきれず、江戸の堀部を呼び出して〈大石はずし〉を画策していたのである。

安兵衛は、あやうく、この二人に加担させられるところだった。

そこに、内蔵助から呼集がかかり、作戦は中断。急遽、三人は、予定を変更して京

円山の安養寺塔頭重阿弥で開かれる同志会議に向かった。

これが世に言う「円山会議」である。

二十八日辰の刻（午前八時）開始。出席者は総員十九名。

以下がその氏名である。

大石内蔵助　同主税
原惣右衛門
小野寺十内　同幸右衛門
間瀬久太夫　同孫九郎
堀部安兵衛
潮田又之丞
大高源五
武林唯七
中村勘助
不破数右衛門
貝賀弥左衛門

大石孫四郎　同瀬左衛門
矢頭右衛門七
岡本次郎左衛門
三村次郎左衛門

内蔵助は、会議に先だっていち早く原、大高らの分派行動を感知していた。その諜報提供者は吉田忠左衛門と近松勘六である。

忠左衛門と勘六は、江戸急進派と内蔵助の対立を憂い、その中で終始内蔵助の側に立って働いた。

この大事な「円山会議」に二人が顔を見せていないのは、当時、すでに内蔵助の意を体して江戸に下っていたためである。

堀部安兵衛が、原、大高に呼び出されて上方にいくことを知った忠左衛門は、出立直前、安兵衛宅を訪ね、

「行かれると申されるなら、お止めは致さぬ。しかし、事既にここに到れば、要は時期の問題である。方々にも、どうか分派行動を止め、枉げて大石殿と行を共にしていただきたい」

と言い含めて送り出している。

その上で、「堀部殿、上方行き」の急報を内蔵助に入れた。

円山会議は、この吉田の江戸報告に基づく、内蔵助の打った分派行動阻止のための最後の機会だったと言うことができる。

そうでなければ、この程度の中途半端な人数で会議は開かない。

ここで内蔵助は、とっておきの妙手を打った。

会議の直前——。

安兵衛を呼びつけ、さきの東下りの折の宿泊所が、幕府の黒鍬組の巣窟だったことを明らかにして牽制したのである。

安兵衛は、あまりのことに二の句が継げず、ひたすら自分の軽率を詫びるしかなかった。

真っ青な顔で戻った安兵衛から、この話を聞かされた原、大高の二人も同様であった。

初めて幕府の諜報組織の恐ろしさを自覚した二人は、安兵衛同様、分派行動の軽率さを恥じた。

以後、三人は、ひたすら大石への忠誠を誓う立場に変わるのである。

そんな裏の動きを知らない間瀬久太夫（六十二歳）、小野寺十内（六十歳）といった老人組だけが意気軒昂だった。

久しぶりの会合に暴走した。

会議の冒頭、内蔵助の制止も聞かず叫んだ。

「各々方に申し上げたい。我等は余命のほども測り難い。もしもこのまま枯れ果てなどいたさば、泉下の亡君に対し奉らん面目もおざらねば、無分別かは存ぜねど、老後の思い出に一人にても吉良殿館に突き入っての決心で、ここに参った」

だが、三人の急進組が老人組に同調しない。しないばかりか、「まあまあ、まずは大石殿の話をききましょうぞ」と、宥める側にまわって、老人組を落胆させた。

（いよいよこの機が最後）

内蔵助は、これまでの煮え切らなかった姿勢を捨てた。そして胸中の苦悩を積極的に披瀝し、参加者に訴える戦術に出たのである。

「拙者が、今日まで、皆様の復讐の動きを牽制して参ったのは何故か」

内蔵助は、問いかけるように語ると、ゆっくりと参加者一同を眺め回し、

「大学さまが、もしや、我等の決起に、参加したいのでは、あるいは、して下さるのでは……、そんな淡い望みを持っていたためでござる。愚かなことであった。大学さまは、そのような期待をかけるに足るようなお方ではなかった。どうやら拙者が甘かったようじゃな。詫びる。これこの通りじゃ」

内蔵助は、深々と頭を下げた後、さらに、

「しかし、此度の幕府の処断によって、拙者もまた、復讐になんの障碍もなくなった。この上は、再び同志と共に江戸に下り、まずは敵状を見極めた上で、必ずや怨敵吉良の首を亡君の墓前に捧げたい。ご老体方の、お急ぎになりたい気持ちも重々存じておる。だが、もうすこしのご辛抱じゃ。先の楽しみと思うて身をいとい、長生きしてくだされ。拙者、必ず、必ず、ご老体方の期待に応えて見せまするゆえ」

言い終わると、内蔵助は、老人たち一人一人の前に行って、手をさしのべ、肩を抱いた。

この率直な告白と決意表明に、昨日まで分派行動を考えていた急進派も、余命を考えて決行を急ぎたがった老人たちも感激した。

赤穂浪士は、この時、初めて一切のわだかまりを超えて、団結を誓ったのである。

多くの参加者が万感胸に迫り、嗚咽の涙を拳で拭ったと記録されている。

ここで出席者の心を一挙に掌握した内蔵助。

以後、見違えるように雄弁になった。次々に繰り出す指針も的確だった。覚書に纏めた事件の準備知識が冴えわたったのである。

「まず、お手前方に、以後の討入りまでの拙者の考えた手順を申し上げる。まず第一に……」

出席者の注目が一身に集まるのが痛いように感じられた。

「まず家族、親族の身辺整理を始められよ。理由は二つある。一つは、我等の復讐行動の罪を彼らに及ぼさないためである」

「罪と申されると？」

参加者は意外な、という顔で訊ねてきた。復讐は正義の発露という頭で固まっている連中である。驚いたに違いない。

「いや、我等の行動は、天下晴れての仇討ちではござらぬ。天下晴れての仇なれば、敵は、吉良にあらず。ご主君に腹を召させた将軍でなければなりませぬ」

「なるほど、そう言われればそうじゃな」

と、一同は顔を見合わせ首を縮めた。それではおおごとになる。

「だが、これは出来ぬ相談じゃ。となれば、我等の行動は、あくまで亡君の意を体しての喧嘩。喧嘩両成敗を迫る私闘と心得よ。しかし、そうなると幕府治下の江戸を騒がせる騒乱の罪は免れぬ。それゆえ、罪の範囲は事前に極力限定しておかねばならぬ。親族の縁切りはそのためだ」

一同は黙って頷いた。

「それともう一つ。この身辺整理は、今後の我等の行動が外部に漏れぬためにも必要じゃ。これからは機密にもっと敏になって貰いたい」

と、軽く安兵衛を睨んだ。

この時、参加者の中から手を挙げて発言した者がいる。

不破数右衛門である。

「では、ま一度密約の血書を大石殿に提出いたしましょうか」

不破は、最初の誓書提出の時は、浪人の身で赤穂に居なかった。

後から、誓書血判を隠居や部屋住みと一緒に提出したことが悔しかったのであろう。

内蔵助は、頭を横に振り、

「有り難いお申し出だが、むしろその前に、これまで皆様から頂いた血書類を、一旦

お返ししたい。その上で改めてお願い申す」

と、出た。

これも事前に考えてきたことだった。

内蔵助は、これまで二度、部下から誓書、血書類を徴している。

最初は刃傷直後の昨年三月。

これは籠城自決と幕府への歎願の誓書と血書であった。

総数ざっと百二十余に上った。

二度目は昨年四月の開城直前。

これは一方的な幕府の開城命令への死の抗議の神文血書である。

こちらは当初の二十九名が、その後増えて総数七十余。

両者には名前の重複があった。すでに消えた者もいる。

それだけではない。

最初の誓書の数が多いのは、なにか判らぬが、出せと言われたから出した、程度のものが混じっていたからである。

江戸で、最初の誓書集めを担当した堀部弥兵衛が残した内蔵助への手紙の下書きに、この時の心理状態が、残っている。

志をおなじくしない者たちでも、この節急進的挙に出んとする者どももおるにつき、今のところ神妙に振る舞っているから、ざっとご吟味の上、捨てずに取り上げ願います。

内蔵助が新たに提案したのは、このような不徹底な誓書、血書の整理と再吟味である。そして同心の者を精選し、連帯を強固にするために、再度の誓書・血判の必要を感じていたのである。

一同の頷くのを確かめると、内蔵助は、持参した包みを開いてこれまでの誓書、血書の束を示した。

「これを一旦お返ししたい」

内蔵助は、もう一度淡々と述べた後、次のように続けている。

「これらは、幕府への歎願、抗議のためのもので、今は過去の遺物じゃ。ここに改めて復讐のための義盟にご参加下さる方々から神文の血判書を頂きたい。ただし、無理強いはせぬ。そのための工夫が要る」

「どのような工夫でござろうや」

「それは、今は申し上げられぬ」
「なぜでござる」
「此度は三度目の正直。真に我等の義盟にご参加頂ける方かどうかを確かめる作業が必要と存ずる。この選別の手段として、昨年の誓書、血書を使うつもりでござる。だが、その方法は拙者に任せてもらいたい。そして、拙者の片腕としてこの任に当られる方として、江戸では、堀部安兵衛殿」
「はい」
安兵衛が手を挙げて立った。
「そして、もう一方は潮田又之丞殿」
「おう」
又之丞も、きびきびと続いた。
「このお二人に大役をお願いいたす。そして肝心の上方の担当だが――」
もったいぶって言ったが、すでに『討入り策』の準備書には、四人の名前は腹案として列記していた。
「こちらは大高源五殿と貝賀弥左衛門殿にお願いしようか。以上四名の方とは、後ほど別室にて協議いたす。よろしゅうござるな」

「心得ました」
四人は立ったまま神妙に答えた。
「では、次の策じゃ」
「まだ次がござるのか」
参加者は、きびきびと指令を打ち出す内蔵助を頼もしげに見上げた。
「次の策は、皆様の江戸でのご商売に関してじゃが……」
「なに？　ご商売？　なんのことでござるや」
怪訝な顔、顔、顔。
内蔵助は、努めて微笑を装って答えた。
「江戸で吉良の所在をつきとめ、復讐を遂げるまで、我等は浪人のままでいるわけには参らぬ。それでは不穏な素浪人と疑われましょう。そこで、この商売の一助にと是非ご紹介したきお方が隣室に居られる。みなの者、控えませい」
やがて主税の案内で、しずしずと現れたのは寺井玄渓。
赤穂浅野家お抱えの医師で、前三百石五人扶持。
元禄十三年、京都の町医をしていた時、浅野内匠頭に見いだされ、高禄で召し出された男である。

昨年三月、内匠頭が刃傷に及んだ日の朝は、江戸にあってお側近くに侍っていた。直前まで痞の薬湯をお勧めし、無事のご帰館を祈っていた男である。だが、その甲斐もなく浅野家は断絶した。

二年にも満たない新参者だが、この時の内匠頭とのやり取りから胸中深く期するものがあったのであろう。その後、赤穂に駆けつけ、内蔵助と出処進退を共にすることを誓った。内蔵助もまた、昨年三月十四日、ご主君が、

早朝すでに吉良への怒りを抱えていたこと、

それを薬湯によって抑えていた事実――、

を玄渓から聞き、瑤泉院との面談の裏付けとしてきた。

その後、玄渓は京で町医を再開。来るべき復讐の日を待っていたのである。

玄渓は、自ら志願して復讐に加わりたいと申し出た。

だが、内蔵助はこれを押しとどめ、代わって自分の部下に医術の特訓を授けて、〈俄薬師〉に仕立ててくれるようにと頼んだ。

この時代は、現代と違って、それらしい本の数冊も読めば、その日から医者で通用した。また「葛根湯医者」と呼ばれて、どんな症状でも、葛根湯を呑ませるだけの藪

医者に事欠かなかった時代であった。

事実、この時の玄渓との引き合わせで、以下の八名が、その後、俄薬師になっている。

小野寺十内（偽名・仙北十庵）
原惣右衛門（同・和田元真）
間瀬久太夫（同・三橋浄貞）
間喜兵衛（同・杣荘喜斎）
村松喜兵衛（同・荻野隆円）
奥田貞右衛門（同・西村丹下）
奥田孫太夫（同・西村清右衛門）
田中貞四郎（同・田中玄昌）

内蔵助に江戸行きを許されなかった玄渓は、この後、自分に代わって倅（せがれ）の玄達（げんたつ）を江戸に送って、以上の八人の指導に当たらせている。

なお、当時の薬師は、二、三人の内弟子や下僕――これも変身した浪士たちである

――を置いたから、八人が薬師の看板を出すだけで、三十人前後の者が江戸で職にありつけた勘定になる。中には禄高の低かった武士が薬師の先生となり、位の高かった武士がその内弟子になるという奇妙な逆転現象もあったと思われる。

いずれにせよ、内蔵助の指示と玄渓の協力が如何に大きかったかが、これで判る。

なお、堀部安兵衛（偽名・長江長左衛門）、杉野十平次（同・杉野九一右衛門）の二人は、各々が数人の浪士を引き連れて、剣術指南所を開いた。

薬師になるのを嫌ったのか。それとも特訓に落第したのか。このあたりも面白い逸話がありそうだが、残念ながら不明である。

すでに身につけた剣術の技だから安直といえば安直な商売だが、実は剣術指南所には先例があった。

すでに、内蔵助の意を体して江戸に潜伏した吉田忠左衛門と近松勘六の二人が、作州浪人田口一真、同三助と変称して兵法指南の門戸を張っていたのである。

武林唯七は、明国出身の祖父が薬師だったが、この時は医者には扮せず剣術指南所・杉野十平次の家に同居し、父の旧姓渡辺七郎右衛門と称して、吉良家の偵察に当たった。

大高源五は江戸では上方商人になり、時には按摩医者になった。俳諧師として、江戸でも食えなかったわけではないだろう。だが「子葉」の俳名があまりにも有名で、それなりに顔も知られていたせいか、化けの皮が剝がれるのを恐れて俳諧の道に入らなかったのだろう。

この他、前原伊助が米屋五兵衛または古着屋権次郎、神崎与五郎が小豆屋善兵衛となって江戸の庶民生活の中に沈潜して吉良を狙うようになるのは、この後日談である。

この日の会合を、内蔵助は次のような言葉で締めくくっている。

「長月（九月）下旬までには上方の用を果たし、神無月（十月）上旬には必ず江戸に下向すると、お約束する。各々方は我に先立って出府し、仇の動静を窺うて我が到着を待たれよ。それまでは、くれぐれも軽挙妄動を慎まれよ」

終わって、ささやかな宴を張った。

出席者の中で、小野寺十内が、手鼓をうって『羅生門』を謡い、続いて原惣右衛門が『小袖曾我』を舞ったという。

わだかまりは消えていた。

一同は心から二人の余興に喝采し、それぞれに、来るべき吉良邸討入りの日を思って意気軒昂の一夜を過ごしたのであった。

円山会議は、こうして熱気に包まれたまま、江戸での再会を誓って散会となった。

7

八月に入ると、円山会議中、内蔵助に指名された大高、貝賀の二人が、各々の割り当てられた地域の誓文血書提出者を精力的に廻り始めた。

以下は内蔵助が教えた口上の趣旨である。

幕府の大学さまご処分が決まり、家禄お召し上げの上、ご本家預けとあいなりました。

これにて我等は再度のご奉公の道を絶たれました。

しかるに、筆頭家老大石殿には、亡君の恩顧を忘却し、重ね重ねの屈辱的処分に対しても、反発はおろか復讐のお気持ちすら見せませぬ。ただただ女遊びにうつつをぬかす有様。

我等二人、悔しさのあまり、以前大石殿にお預けした神文血書を奪い返して参りました。

万一、これが幕府の手にでも渡れば大事。とんだ謀反の濡れ衣を着ることになりかねませぬ。ここに持参したのは、その束の中から探し出した貴殿のご署名分でござる。お納めくだされ。

しかるべく破棄するなりして始末をされるがよろしかろうと存ずる。

この口上で、相手が神文を喜んで受け取れば、そのまま置いて帰る。受け取らず、大石を「武士の風上にも置けぬ奴」などと怒り狂う者にだけ、「討入り決定」を明かし、江戸集結の指令を待つように告げた。

この二面作戦の結果、署名者総数百二十余名のうち、半数以上が無理なく脱落していった。

こうして、同志は五十人余へと絞られていったのである。

この間、内蔵助は山科を引き払い、京四条金蓮寺塔頭梅林庵に移り、ここに籠っている。

一つには、遊び金を使い果たし、三百両以上かけて作った山科の屋敷を換金しなくてはならなくなったためである。

この売却には、養子の大西坊覚運（おおにしぼうかくうん）の口ききで、従弟（いとこ）の大西坊証讃（しょうさん）の世話になった。金額は不明。

二つには、京の中央の方が、〈市中の隠〉で、人の出入りが、かえって目立たないためであった。

この塔頭に、可留と少人数の使用人だけで籠ると、内蔵助は、『吉良邸討入り策』の第二部・実行編の執筆に精出した。筆は、

吉良の監視体制の取り方
吉良の所在の確認手段
決行当日の集合場所
その時刻の決め方
当日の衣装と武防具

等々に及んだ。

滑り出しは快調だった。

江戸在住の吉田忠左衛門から送られてきた吉良邸付近の地図を穴の開くほど眺めながら、想定される吉良の通行の道順から監視点を割り出した。

この時、赤丸を付けた箇所は十カ所以上に及んだ。これを折り返し忠左衛門に送り、然るべき指示を与えている。

もしかすると、用心のため、空駕籠を移動させ、本人は別の場所に寝起きする可能性もある。

この空襲撃が一番恐い。

それを防ぐために、駕籠に人が乗っている場合と、空駕籠の時とで、担ぎ手の肩や姿勢にどのような違いがあるのか——、その実地検証を、昔の自分の駕籠の担ぎ手を招いて何度も観察し、留意点を指示書に加えた。

しかし、内蔵助の快調な筆は、最後の「衣装と武防具」の所で、はたと止まった。

（さて、どうしたものか）

と、自問自答し始めたのである。

吉良襲撃はもちろん夜襲の積もりである。月明かりのある日を選ぶ予定だが、万一、

雨天ということもある。となると、真っ暗闇の中、敵味方の識別が難しくなる。乱闘になったときの同士討ちだけは避けたい。

しかし、提灯や龕燈の持参は、乱入時の不測の失火を防ぐため、極力すくなくしたい。江戸では出火は重犯罪である。だが、それでは味方の識別が難しくなる。

この矛盾を解決するには、同じ衣装が好ましい。

しかし、金がかかる。

討入りのための費用は瑤泉院さまから頂いたお金しかない。

浪士たちの東西の往復旅費、討入りまでの住居・食事費用などの雑支出を考えれば、果たして衣装代まで捻出できるかどうか。

あれこれ考えると頭が痛くなる。

さらに武防具。

刀剣は原則として各自の物を用いると考えたが、家禄の低かった者は、良刀を所持していなかろう。

幸い、先々代長直さまは銘刀の蒐集家であった。今も多数の浅野家所蔵の刀を、内蔵助はお預かりしている。これを貸し与えることにしよう。だが、どうやって多数の

刀を江戸に持ち込むか。これが難題だった。

次に浅野家所蔵の槍。刀以上にさらに江戸持ち込みは関所で目立つ。それに屋内の乱闘ともなると、長さを九尺柄（二百七十センチ）以下に截り縮めなければならない。この加工をどうするか。

最大の問題は防具だった。

泉岳寺の亡君の墓にご報告にあがるまで、一人として犠牲者を出したくなかった。そのためには、全員に、上士、下士の関係なく、胴に脇楯（鎧の一種）、頭に鉢金入りの頭巾、手に籠手、足に臑当を付けさせたい。

だが、五十人もの同志のための調達となると、調達資金と江戸への輸送が更に問題だった。

そんなことをあれこれ考えていると、じりじりしてくる。

「老後の思い出に一人にても吉良殿館に突き入っての決心で、ここに参った」

などと円山会議で叫んでいた老人たちの、脳天気な姿勢にまで腹が立ってきた。

（やれやれ）

なんでこのような苦労を一人で背負わねばならぬのか。

時々、討入り策の思案に余ると、
「出かけてくる」
ぷいと外にでた。
そういう時の内蔵助の足は決まって京の繁華街に向いていた。
だが、真昼間から、島原というわけにはいかない。
もっぱら夕刻までの時を潰したのは、当時古本屋街であった河原町である。
懐手しながら、一軒一軒のぞき込む。最近は堅い本は読めない。
ついつい、手がのびるのは恥ずかしながら春画の類であった。
（ひとつ主税に買うてやろうか）
そんな気がした。
主税を〈男の通過儀式〉として遊郭に連れて行く約束は、まだ果たしていない。
その予備知識のためにも――、と手にしたのは、当時人気の（菱川）師宣の春画『恋の楽』である。
若衆と年増の交情構図から、できるだけ、〈その部分〉の見えない、無難なものだけを数点選んで買い求めた。
「このような下卑たものを」

などと主税に言われては元も子もない。かといって、男女関係の真実だけは知ってほしかった。

父親の辛いところである。

購入を決めると、内蔵助は、懐から銭入れを出し、店の主人に預けた。銭には触れない。

店主はその中から代金分だけ取り出して買い主に戻す。

これが当時の金銭を卑しむ上級武士の物の買い方である。

内蔵助は、しばらくの間、主人が内蔵助から預かった銭入れを横に置き、春画の裏を見ながら、しきりに算盤を入れるのを眺めていた。

「なにが書いてあるのだ」

ほんの興味本位で聞いた。

「符丁どす」

主人は当惑げに答えた。

「符丁？　なんの符丁だ」

「仕入れ値どす。旦那さまのように、お値段通りにお買い上げ戴ける時はよろしゅうおすが、お客様の中には、ご無理な値引きを仰るお方がようけおましてな。その場合、

どこまで引けるかを符丁と相談させていただきますので」
「余は値引けとは言わぬぞ。それなのに符丁を見たのは？」
「つい癖で」
主人は頭を叩いた。
「いや、大方、儲けの算用であろうな。これでいくら儲かるかと」
「いえいえ、とんでもございませぬ」
言いながら、主人はぺろりと舌を出した。どうやら図星のようだ。
「まあよかろう」
内蔵助は笑いながら、この符丁という言葉に興味を持った。
「ほかにも符丁はあるのか」
「仰山おます。どの店からいつ頃仕入れたのかも、挟んだ薄紙の種類や色で判ります」
「そうか。商売は道によって賢しと申すが、一つ利口になったわい」
符丁と目印さえあれば、討入りで同じ衣装を調達することはない。
いいことを聞いたと思った。

気分を良くしたところで、またぞろ女の顔が見たくなった。
この日は、島原の枡屋に揚がり、夕顔を呼んだ。
「これを見てくれ」
と、買ってきた春画を見せる。
「うきさまらしゅもない、いけずなものを見せられしゃんすな」
夕顔は顔をしかめた。
「いけずか、しかし、よく見ろ。この年増の相手。よい若衆であろうが」
「あい、それはもう」
ため息のでそうな顔をする。
「これは拙者の息じゃ」
「ほんまどすか」
夕顔は驚きの声を上げた。
「いやほんまではないが、よう似ておる。それで買う気になった」
「ほんに美しいお小姓さんどすな」
「そうじゃろう。だが、我が息には欠けているところがある」
「なんどすか」

「おなごを知らぬ」
「ほんにでっか」
「間違いない。そこで相談だが、誰か教えてやってくれまいか」
「まさか……」
「そなたは駄目じゃ。親子で同じ釜の飯は食えぬ」
「釜どすか、わてが」
「悪く思うな。たとえじゃ、たとえじゃ」
「たとえにしても悪おす」
きゅっと手を抓られた。
「痛い、痛い」
夕顔はようやく抓るのを止めた。
「で、どないしまひょ」
「そなたの朋輩に頼んで、息に女のよさを教えてやって欲しい」
「初物なら、ただでもよろし、いいますえ」
「ただは困る。後が恐い」
「ご祝儀だしてでも初物はいただきたいと、朋輩が申しましたらどないしまひょ」

「益々困る。祝儀ぐらいで大事な息を女嫌いにさせたくはない。あくまで祝儀は拙者が出す」

「よろしゅおす。ではお任せを。で、今宵は？　おや、もうお帰りどすか」

「今夜は伏見で野暮用があってな」

不意に執筆を続けたかっただけである。

だが、

「撞木町どすな、野暮用は」

と、夕顔に絡まれた。

「違う、違う」

内蔵助は、かまわず席を立つ。

「それこそいけずどすえ。近頃のうきさまは、ほんに、心ここにあらずやおへんか」

また抓られた。

8

八月中旬。

内蔵助は『吉良邸討入り策』の実行編を完結させた。しかし、「衣装と武防具」だけは具体策に到らぬまま時日だけがずるずると経過した。

やむなく江戸の吉田忠左衛門に密書を送り、この点を相談すると、意外な名前が浮かんできた。

綿屋善右衛門。

忠左衛門は、今年一月に三木町から京に出た折、人を介して知り合い、綿屋邸に一泊した。その折りの感触として善右衛門の人柄を激賞し、必ずや我等にお味方下さるに相違ないと言って寄越した。

（そうか、やむを得ぬ。綿屋さまに無心するしかないか）

窮余の一策だった。

しかし、頼む以上嘘は言えない。これから、拙者、再度東下りし、機を見て吉良邸を襲い、上野介殿の御首を頂戴致す。ついては、その時の衣装、武防具の調達と、その江戸送りにつき、特段にお力を貸して頂きたい。そう言わざるを得ない。

だが、明らかな〈天下の狼藉〉への加担である。露見すれば、罪の連座はまぬかれない。

他者に口外はしないまでも、果たして承知してくれるだろうか。

京に出向き、例の茶室で善右衛門との対面までこぎ着けると、内蔵助は、意を決して浪士たちの決意を告白した。

「……といった次第で、この内蔵助としても一世一代の願いでござる。枉げてご承知願いたい。これこの通り」

思わず平伏する気持ちになった。

「なにをなされます。お武家さまらしゅうもない」

善右衛門は、そうは言ってくれたものの、肝心の返事は、なかった。

後は黙って茶器の手入れを続けるだけであった。

薄暗い茶室だった。明らかに善右衛門の顔は苦痛にゆがんで見えた。

命と身代を賭ける決断である。

無理もない、と思った。

長い沈黙の後、善右衛門は、ようやく口を開いた。

「よろしゅうございます」

と一言言った後、
「ただし」と付けた。
「なにか？」
内蔵助が、恐る恐る訊ねる。
すると、こんな言葉がかえってきた。
「その荷、箱根越えまでは、責任もってお受けいたしましょう。しかし、江戸内までは持ち込めませぬ。白昼では目立ちまする。かといって夜間はもっと難しゅうございます」
昼間なぜ持ち込めぬのかは口を濁した。
夜間が難しいことは知っている。夜四つ（十時）ともなれば、町の自身番、武家辻番によって犬猫以外は厳しい吟味を受けるからである。
当時、自身番、辻番の数は、合計千八百カ所を超えていた。
この頃の江戸は広さでは現在の東京の七分の一程度だから、現在の交番の数と比べると、自身番、辻番の密度は、ほぼ十六倍になる。
江戸は、世界一の治安のいい町であった。それだけに不審な荷は絶対に移動できない。

「では、如何にすればよろしゅうござろうか」
内蔵助は、こわごわ訊ねるしかなかった。
「江戸近郷にどこか鄙びた場所を荷受け地としてご指定いただきたい。そこまでお運びいたします。大石さまも、そこで荷を浪士たちに配分されるのが、後々のためによろしかろうと存ずる。それともう一つ。武防具の種類、形状と数を、お教え下され。出来る限りご要望の線で調達いたしましょうほどに」
「承知しました。後ほど早速にご連絡いたしまする」
「いや、こちらから藤兵衛と申す番頭を、この件の連絡係として差し向けまする。もっぱらご用件は、以後この者に命じてくだされませ。大石さまは、京ではお顔が知られすぎておりますれば……」
「わははは、これはしたり。ともかくよろしゅうに、よろしゅうに、お頼申しまする」
最後は目頭が熱くなった。
善右衛門は、にっこり笑った。
「この綿屋、赤穂さまには、三代に亘ってご愛顧を賜った身でございます。いつかご恩に報いねばと思っておりましたが、このような願ってもない機会をお与え下され、

むしろ光栄にございます。お受けしたからには、この命と身代、惜しくはございませぬ。そのすべてを賭けまする。商人とはいえ、綿屋善右衛門も男でござれば――」

善右衛門の、この言葉に、思わずじんときた内蔵助――、

「有り難きおことばに……」

最後は言葉にならなかった。

不覚にも、頬をつたう熱い水滴の中で善右衛門の顔が、朦朧（もうろう）となって消えていった。

第十二章　戦わんかな時到る　元禄十五年秋

1

元禄十五年十月五日。

内蔵助は夜陰に乗じ、四条の梅林庵を出た。目的地は三条の、とある旅宿である。

直進すれば目と鼻の先だが、大きく迂回して、人知れず宿に転がり込んでいる。

ここで二日の間、身を潜め、江戸に同行する同志の集合を待った。

迂回を余儀なくされたのは、交代で、しつこく内蔵助の翻意を迫る進藤源四郎、小

山源五右衛門といった親族を避けるためであった。内妾の可留も、親族とは別に内蔵助の追跡側にまわった。

こちらは内蔵助の子を宿したのが原因のようだった。

本当に俺の子か？　疑惑がないわけではない。だが、懐胎と知った途端に、人が変わったように内蔵助にまつわりつき、嫉妬深くなった。

（すこし女をめぐる〈愛想尽かしの薬〉が効きすぎたか）

と、苦笑いするしかなかった。

事実、この年の九月は、今生の思い出にとばかり、大坂新町にまで繰り出しては遊びまくってきた。

最後は、遊びの席に京四条で人気の高い役者・瀬川竹之丞や野郎陰間まで呼び寄せ、寝所を共にしては、女たちを呆れさせた。

馴染みの女との縁切りに新しい女を見せつけるわけにはいかない。男色趣味はないが、「男狂い」して見せるしかなかったのである。

ただ、撞木町の浮橋にだけは別離の理由を創って聞かせた。

なぜか一番しっくりと気のあう女だっただけに、黙って去るに忍びなかったのであ

る。

「さる西国の大名に仕官することとなり任地に参る。これでそなたとも別れとなろう。世話になったな」

と、手切れ金十両を包んだ。

しかし浮橋は、金には見向きもせず、内蔵助の顔を穴の開くほど見つめたまま、

「そな……」と、ただ一言。

そなこと嘘や、嘘やおへんかと、見透かしたのであろう。続く言葉のないまま、浮橋は三味線を手にした。

この後の浮橋のつま弾きは、一際婀々とやるせなく、内蔵助の心を冬寒のように切なく切り裂いた。

ところが、《里げしき》が終わり、《狐火》の唄半ばにきて、

何を思ひにこがれてもゆる

と、浮橋が口ずさんだ時、三味の糸が、ぴちっと音を立てて飛んだ。

もしかすると――、いや、あれは間違いなく撥で切ったものだ。

浮橋は、そのまま、三味線を放り出し、内蔵助の懐に飛び込んできた。

「連れて行っておくれなんし、連れて行って……」

後は、細い肩を、さざ波のようにふるわせて、いつ果てるともなく泣き崩れた。

一方、町中の内蔵助は、酔狂の限りを演じてみせた。

坊主の衣をまとい、大酒を食らっては泥まみれになって道に臥せた。

「あほう浪士のなれの果てか、こうしてくれるわ」

道行く者に痰唾を浴びせられ、時に殴打されもした。京童までが、

赤穂でのうて、あほう浪人

大石軽うて、張りぬき石

と、囃したてた。

それでも内蔵助は耐えた。

自分を傷つけ、苛み、追われることでしか、愛する京と京の女たちとの決別の道が見つからなかった。

涙とは無縁だった。

それに、

（妻の理久ですら、別れの涙を見せずに去ったではないか、なんで男の俺が涙できよう――）

胸に秘めた意地もあった。

内蔵助の潜伏する宿に、三々五々と集まったのは、以下の同志と家僕ら九人である。

潮田又之丞
近松勘六
早水藤左衛門
菅谷半之丞
三村次郎左衛門
室井左六（大石内蔵助家僕）
加瀬村幸七（同）
他仲間二名

このうち、潮田は、円山会議の後、堀部と共に内蔵助の特命を受けて一旦江戸に下った。同志に円山会議の報告をした（「隅田川舟中会議」という）後、反転して再上洛したものである。

近松は、この潮田と上洛行を共にしてきた。

潮田は、赤穂・河西郡の出身。近松は近江国野洲の出身。

共に、故郷での「今生の別れ」に来た。そして無事帰郷と決別を果たしての合流であった。

一行が三条の旅籠を出立したのは十月七日。昨年の東下りより十三日早い。それもあって、前後の追っ手の有無に気をつけながらも、ゆっくりした足取りで江戸を目指した。

途中何事も起きなかった。

箱根では、曾我兄弟の墓に詣で、仇討ち祈願を込めて墓石の苔を削り、これを懐中のお守りとしている。

十月二十一日。

鎌倉雪ノ下の「大石陣屋」到着。

当時、内蔵助の一族であった大石平左衛門が営んでいた旅宿である。

ここで迎えに出てきた吉田忠左衛門との再会を果たしている。

二人は、この後、一両日かけて、鶴岡八幡宮に仇討ち成就の祈願に詣でた。

参詣が終わると、忠左衛門は、周囲を気にしながら声をひそめ、

「いやいや、参りましたぞ。大石殿」
と、頭を掻いた。
「なんでござろうや」
「例の前川忠太夫の屋敷のことじゃ。まさか、まさか、あれが幕府の隠密の巣窟だったとは――」
「吉田氏もあそこにお泊まりとは、つい文月（七月）まで存じなかったもので、お知らせが遅れました。申し訳ござらぬ」
内蔵助は虚心に詫びた。
「いや、大石殿の咎ではござらぬ。ひとえに、あんな場所を選んだ堀部安兵衛のせいでござる。いかにも安すぎるので、おかしいとは思ったが、先立つ銭の乏しい悲しさ、ついつい、長逗留してしまった。貴殿からの警告を受けて、あわてて帰郷と偽って旅装を整え、飛び出しましてな。そのまま今の新麹町に一戸を借り受けた次第。目下は近松殿とご一緒に作州浪人を称し兵法指南の身でござる」
「近松殿を甥御になされたとか」
「さよう。拙者は田口一真、近松殿は田口三助を名乗っております」
「三助はよかった。明るい剽軽なお方ゆえ、その名、ここだけの話だが、なかなかに

お似合いでござるな」

「全く」

二人は屈託なく笑った。

だが、それも一瞬で終わる。

「しかし、我等が江戸集合が事、悉く元隠密の前川に握られていたとなると、事は重大でござるな」

忠左衛門は、眉を顰めた。

「そこよ、問題は――、昨年、我等江戸入りの時の前川邸の滞在費もそうだった。あれだけの大人数の長期滞在にもかかわらず、わずかな謝礼（二両一分）で済んだ。ここでおかしいと気付くべきだったのだが……。貧すれば鈍するとはこのことかの」

思わず、内蔵助らしくもない愚痴となった。

「しかし、前川は、我等の行動を逐一幕閣に伝え、おそらく柳沢周辺からは百両以上の褒美をせしめたに相違ござらぬな」

忠左衛門は憎々しげに叫んだ。

「そうかもしれぬ。しかし、これほどの諜報が我等から漏れていながら、昨年、今年と、いずれの東下りにも幕府の妨害がない。拙者としては、かえって不気味なのだが

「……」

「幕府は、もしや、我々を敵視していないのではござるまいか」

「軽々には信じがたいが、今のところは傍観しているとしか見えませぬな。だが、これからは判りませぬ」

「と申されると、大石殿、なにか、ここから事件でも？」

忠左衛門の顔に不安がよぎる。

「さよう。起きるかもしれぬ。起きぬかもしれぬ」

内蔵助は、そっと微笑んで、

「まずは、貴殿にお頼みしてご準備願った次の平間村へ参りましょう。実は、そこに京から、ある荷が届くことになっておりますれば――、まずは、あちらに着いてからのお楽しみということで――。では」

と、会話を切った。

二十五日。

吉田忠左衛門らを加えた十余名は、夜陰、鎌倉を発った。

翌二十六日。

川崎平間村に早朝到着。

平間村には旧浅野家出入りの農民、軽部五兵衛の家があり、その庭に富森助右衛門（馬廻兼使番、二百石、三十三歳）が建てた仮宅が用意されていた。

内蔵助が、この夏、討入り計画の一環として吉田忠左衛門に指示した江戸への中継基地であった。

以後数日――、内蔵助は、ここ平間村で過ごした。月末に一旦江戸に入り、同志と会合を持った後、また反転して平間村に戻っている。

到着した二十六日から月末（二十九日）まで四日。その後、一日ほどを江戸で過ごしたと計算しても、再び戻ってから内蔵助が正式に江戸入りする十一月五日まで、延べ六日から七日ある。

この間を、内蔵助は、なぜこのような辺鄙（へんぴ）な場所で過ごしたのか。

その謎（なぞ）は、やがて西からやってくる集団と、その荷が明らかにしてくれるのである。

2

翌二十七日のことであった。

一見して朝廷関係の御用とわかる二十数人の一行が、突然、場違いな平間村に姿を現した。

持参した荷は、いずれも十六弁の菊の紋章のついた紫の布帛に覆われ、一見衣装箪笥風であった。

荷に大書された立札には、麗々しく「東叡山寛永寺御用達」。

綿屋善右衛門苦心の偽装であった。

荷の先頭と後方には立烏帽子に狩衣姿の男が四名。僧侶四名。

荷の担ぎ手は萎烏帽子に白張（白丁）の男十五人。衣装箪笥の担ぎ手としては人数が、やや多い。だが、そこまで気付く者はなかった。

菊の御紋と物々しい警護の輸送の効果は絶大だった。

どの関所でも、一切の吟味を受けず、素通りしてきたのである。

五つの荷は、冨森仮宅に到着すると、直ちに広い納屋に運び込まれ、その扉は堅く閉ざされた。

後は、何事もなかったような静寂に戻った。

半刻ほど後のことである。

内蔵助は、三人の来客と仮宅の茶の間で談笑していた。
一人は綿屋側の荷の輸送責任者である番頭藤兵衛。
二人目は大塚屋小右衛門。
伏見本陣の織物問屋で、綿屋とは昵懇の仲である。かつては浅野家より五人扶持を受けていた家臣の一人で、此度の輸送の浅野側の責任者を自ら買って出た義商であった。
この二人が腹心の部下を荷の担ぎ手に仕立てて引率してきたのであった。
「いやはや、お公家さまの格好をしたのは、若い頃、京の葵祭にかり出されて以来でございます。一生の思い出となりましょう」
と、番頭の藤兵衛。
ここまでの苦労を一言も語らず、ひたすら感激の面持ちで輸送の無事を喜んでいた。
小右衛門は、藤兵衛の言葉に無言で頷くだけである。
三人目は――、
「ほう、これはこれは、良雪殿か。ここでお目にかかれようとは……」
内蔵助が、思わず目を見張った珍客であった。
良雪和尚。

赤穂新浜正福寺三世住職で、赤穂浅野家菩提寺華嶽寺四世恵光和尚の高弟である。出家前は新浜の日光屋安左衛門の次男で、俗世では、結構内蔵助と茶屋遊びした仲である。

「実は恵光和尚のご命令で、このご一行に、無理やり、お加えいただきましてな」

と、良雪は、にこやかに述べ、藤兵衛と小右衛門に軽く一礼した。

この後、恵光和尚からの、次の伝言を伝えた。

「実は恵光和尚さまは、浅野家が赤穂の浜方（塩田業者）に貸していた大金が、大方焦げ付いてしまったことを、地元側総代の一人として大変苦慮しておられました。しかし、浜方の者に言わしむれば『返せぬわけではない。が、我等が無理にお返ししたところで、どうせ赤穂の腰抜け侍の去り金（退職金）になるだけのこと。下手すれば大石の遊び金になるかもしれぬ』などと申して、この秋まで、和尚の説得を聞きませなんだ」

（おやおや、貸し金を返さなかったのは俺のせいか）

内蔵助は、思わぬ地元事情を聞いて、一瞬、絶句した。

回収金で私腹を肥やした覚えはない。一言弁明したかった。

だが、良雪は、そんな内蔵助を押しとどめ、

「いやいや、大石殿の言わんとすることは解っております。しかし、ここにきて、大石殿始め心ある者だけで、秘かに復讐を果たされる企てありと知り、浜方の態度が改まりました。今すぐとは言わぬが、間違いなくご返済は続けると申す者が出て参りましたでな。そこで、和尚は拙僧に命じて、この地元事情の好転を大石殿に伝え、併せて大石殿の様子を見て参れ。もしお金にお困りの様子なら、寺にて、一時、お立て替えしてでも大石殿のご壮図に協力したい。かく申し付かって参った次第でございます。如何でござろうや」

内蔵助は無性に嬉しかった。

金は喉から手が出るほど欲しい。

出立前の九月には、本家筋や近衛家の進藤筑後守にまで、恥を忍んで金の無心をして断られている。

今は浪士の生活資金の援助にまで事欠いていた。

それというのも、折角学んだ俄医者商売が、さっぱりだったことが大きな誤算だった。

医者を開業してはみたものの、地元が新開地のせいで、金持ちの老人や病人が少ない。居るのは若い元気な貧乏人ばかりで、風邪などの治療をしても、治療代の取りは

ぐれが多かった。治療薬の在庫資金がかさむのも馬鹿にならなかった。

金回りがよかったのは、本所二ツ目の吉良邸の目の前で古着の外商を営む前原伊助ぐらいのものである。

だが――、ここで華嶽寺に立て替えてもらうには、これまでの回収金の明細を語らねばならない。そうなると、ほとんどの回収金が瑤泉院さまの持参金の返済に優先して充当したことが露見する。まして、それを全額仇討ち費用に使わせて戴いているとは、口が裂けても言えなかった。

それでは、瑤泉院さまを復讐の連座の罪に巻き込むことになる。

痛し痒し。結局、内蔵助は諦めるしかなかった。

「お言葉は有り難く頂戴いたす。さはさりながら、これまで回収できた範囲でなんとか一同間に合わせてきておりますれば、我等が事、これ以上はご放念くだされ。むしろ我等亡き後、雑多な費用も生じましょうほどに、和尚さまには、くれぐれもよろしゅうにと、お伝えくだされ」

そう言って申し出を断った。

やがて、ひとしきり歓談を楽しむと、三人の客人は、着てきた公家姿の衣類や冠な

ど一切を、証拠隠滅のために裏背戸の穴に放り込み、焼き捨てた。その上で、口々に、

「立派にご本懐を」

「吉報をお待ち申し上げます」

の声を残して、元の道を上方へと去っていったのである。

二十八日以降――。入れ替わるように、東から同志の面々が三、四人と、一組になって現れた。

内蔵助は、数組まとまる度に、討入りに対する次の訓令を、嚙んで含めるように語った。

一　指揮命令は内蔵助が行う。全員これを遵守のこと

一　諸事に油断なく必要な道具はいつでも使えるよう、また、駆けつけられるよう準備のこと

　無用なことは喋らないよう一家家族の付け届け、往来も無用のこと

一　もし吉良の行列に道で出会い、切り込み可能と見ても、一人の仇ではないゆえ抜け駆け無用のこと

一　討入りは、相手の不在が判明した場合は、急遽見合わせることもあり得る。よって潜伏期間中は行動を自粛し、平素から無駄な金をかけないよう心掛けよ
一　同志の寄合の雑談や言行には注意が肝要。これを疎かにすれば先方に無用な警戒心を招く
一　目指す相手は吉良上野介と義周のみ。しかし、二人が他の者に紛れこみ討ち漏らすこともあり得る。よって討入りの際は、男女の別なくすべてを討つべし
一　相手方は恐らく百人以上であろう。一人が二ないし三人を倒す覚悟が必要

しかし、この時、最後まで平間村に姿を見せなかった者が、すでに三人いた。
新麹町四丁目で千馬三郎兵衛（馬廻兼宗門改役、百石、五十歳）と同じ店に住んでいる中田理平次。
本所林町の堀部安兵衛と同居していた中村清右衛門と鈴田重八。
先の江戸入りの時は、三人とも同志として振る舞っていたのだが、どうしたことか――。
内蔵助は気になって仕方なかったが、慌ただしさにまぎれ、そのまま放置するしかなかった。

次に、内蔵助と吉田忠左衛門の二人は、同志の武器調べを順次行った。

同志は、「晴れて討入りの節はこれを使いまする。ご覧下され」と自信満々、佩刀を見せる者。恥ずかしそうに、なまくら刀を差し出す者。

色々だった。

内蔵助は、慎重吟味の上、鈍刀と判断すると、持ち手の誇りを傷つけないように言葉を選びながら、

「別室に浅野家家宝の刀が陳列してござる。きたるべき討入りでは、刃こぼれもできましょうほどに、そちらを使われることをお勧めしたい。お身体にあった、お好みの刀を選ばれるがよかろう。遠慮はご無用」

と、京から運ばせた銘刀を選ばせた。

「大石殿、これは！　いつの間に、ここに御家宝をお集めに？」

驚愕する面々。だが、内蔵助は笑って答えなかった。

内蔵助は、浪士の過去の禄高に関係なく、各々の体力と身長に適した刀を選んで貸し与えることを約した。

特に、良い刀を持っていなかった下級武士の感激は一入であった。

槍を使う者には、屋内戦を想定して、九尺柄（二百七十センチ）以下の短尺に加工することを勧めた。加工費用を貸し与えることまで約した。

さらに集まった浪士たちを驚かせたのは、全員に用意された新品の防具であった。

各人に揃いの、
　脇楯
　鉢金入り頭巾
　鎖入り縮緬しごきの襷
　籠手一組
　臑当一組
　陣草鞋、陣足袋

まで付いている。

まさに至れり尽くせり。

しかし、内蔵助は、刀剣も防具も、この場では口約束だけで本人に渡さなかった。

全員に、こう告げている。

「お貸しするこの刀剣と防具は江戸にてしかるべき会議を開き、血判神文の誓約を提

出して頂いた後、順次お渡しする。さよう心得られたい」

武防具は、仲間に命じて、ここからすこしずつ江戸に担ぎ込ませる方法を選んだのである。

浪士たちが去った後、内蔵助は忠左衛門に、この本音を語った。

「この場で貸し与えるべきだったかもしれぬ。最初はその積もりで、この中継地を造った。その方が手間も省ける。だが、討入りまでには、なにがあるか判らぬ。生活のために刀剣類を処分してしまう不心得者もでるかもしれぬでな……」

頭に、姿を見せない中田、中村、鈴田の三人の同志への不信がある。

だが、忠左衛門は、脇楯や鎖入りの襷などは、すでに支給されたものと思っていたから愕然とした。

「大石殿は、ここまできて、まだ同志たちを信じられぬのですか。不参の三人も、なんらかの連絡の手違いでござろう。必ず参られように」

と、おかんむりである。

内蔵助は、やむなく、もう一度忠左衛門に告げるしかなかった。

「すまぬな、吉田氏。だが、そう、お怒りめされるな。部下を使う者は、部下を信じ切ってはいけぬのじゃ。〈信じて疑う〉。心を鬼にして、この姿勢を貫かねばなりませ

ぬ」

3

十一月五日夕刻。

内蔵助は江戸に姿を現し、忠左衛門の用意した日本橋石町の公事宿小山屋弥兵衛の裏手の空店に入っている。

公事宿とは、当時、公事（訴訟など）の用のある者が地方からやってきて泊まる宿である。

小山屋は、同業の長崎屋と共に、オランダのカピタンが参府した際にも旅宿となったという中々繁盛した宿であったらしい。

前回に懲りて、こういう出入りの激しい所のほうが、かえって人目につかないと考えたのである。

特に公事宿は、一般の旅籠と違って長屋式で客同士が顔を合わせることがない。内風呂がなかったのも、かえって秘密を守るのに好都合だったろう。

内蔵助は、ここでは垣見左内を名乗って滞在中の主税の叔父、垣見五郎兵衛を称し

た。主税の訴訟の応援のために近江から駆けつけたという触れ込みであった。

部屋に落ち着くと、早急に同志の配置図の再点検に着手した。

平間村不参の中田、中村、鈴田の三人のうち、中村については、直接内蔵助宛てに、鈴田は、原惣右衛門宛てに、次のような手紙が届いたことで、脱落の事実が確実となった。

〈中村清右衛門　口上之覚〉

このたびの儀、義の重いところを一途に思い詰め、……老母をも捨て置いて下向しましたが、こちらへ来て思いついたことがございますれば、仲間であることをお断り申し上げます。……とりわけ残念にも思いますが、心底は筆紙に申し上げ難く、不届きな仕儀となりました。この一件は日本の神々の御心に誓い一言たりとも他言いたしません。あらまし〈有増〉は原惣右衛門方へも申し置きいたしました。以上

十一月二日　　中村清右衛門

池田久右衛門様

〈鈴田重八　口上之覚〉

私儀、このたび同志として江戸へ同道いたしましたところ、……（兵庫へ預けた）母より先月九日付の書状が届き、兵庫へ落ち着くことが出来ず難儀している旨の申し越しがあり、私も何とも当惑いたしております。この母を捨てないことには私の一分を捨てる他ないので、色々思案をめぐらしましたが、母のこと、今こうした様子を聞いた上は黙視することも出来ず、それに少々思うところもあり、このたび帰郷いたすことにしました。どうかそのようにご承知下さい。この趣を、おついでの時、しかるべく久右衛門殿へお伝え頂きたくお願いいたします。……申すまでもございませんが、帰郷しましても、このたびのことは毛頭、日本の神かけて他言いたしはしません。どうぞそのように思し召し下さい。……このたびの帰郷、誠に残念至極に存じます。以上

十一月二日　　鈴田重八こと玉野平八

原惣右衛門様

いずれも堀部安兵衛の道場の同居人であり、書いた日にちと脱落原因が「老母への情義」という点で一致している。両者話し合いの結果であろう。

「けしからぬ。手分けして追い打ちをかけ、場合によっては切り捨てましょうか」
と、手紙持参で現われた堀部と原に、内蔵助は一言、「捨ておけ」とだけ言った。
多額の費用をかけて江戸下りまでして、今更「忠義より親への情義」を言えた義理ではあるまい。
親を泣かせている者は、他にも大勢いる。皆、心を鬼にして忠義を取り、情義を捨てたのだ。
それを、こっそり自分だけ抜けるとはなにごとぞ。忠義どころか仲間の仁義にもとるではないか。
そう怒鳴ってやりたい。
だが、去る者は追わずだ。
まして、内部抗争は惨めだ。
内蔵助の美意識にも反した。
「それより我等は、目的の完遂ぞ。ここでは一切の雑念を捨てよ」
この一言で原と堀部を追い返した。

以下は、この中田、中村、鈴田の脱落組三人を含む、この時点までに決めた同志の

江戸の居所である。

配置と、その人数の選定は、内蔵助の指示に従って吉田忠左衛門が決めたものである。

日本橋石町三丁目
　小山屋弥兵衛裏店
　大石内蔵助父子以下八名
新麹町六丁目
　大屋喜左衛門裏店
　吉田忠左衛門以下五名
新麹町四丁目
　和泉屋五郎兵衛店
　中村勘助以下六名
新麹町四丁目裏町
　大屋七右衛門店
　千馬三郎兵衛以下五名

新麹町五丁目
秋田屋権左衛門店
冨森助右衛門
芝浜松町
檜物屋惣兵衛店
赤埴源蔵（馬廻、二百石）以下二名
芝源助町
磯貝十郎左衛門以下三名
南八丁堀
村松喜兵衛（扶持奉行、二十石五人扶持。俄医者開業）
深川黒江町
春米屋清右衛門店
奥田貞右衛門（加東郡勘定方、九石三人扶持。俄医者開業）以下二名
南八丁堀湊町
平野屋十左衛門裏店
片岡源五右衛門以下五名

本所林町五丁目
　紀伊国屋店
　堀部安兵衛以下七名
本所三ツ目横町
　紀伊国屋店
　杉野十平次以下三名
本所二ツ目相生町
　前原伊助以下三名
両国矢ノ倉米沢町
　堀部弥兵衛
谷中・長福寺
　菅谷半之丞

大別すれば、
〈吉良邸の監視〉
　本所、深川、両国（五箇所）十六名

〈吉良邸と上杉家上・下屋敷を結ぶ街道監視〉
麹町（四箇所）十七名
〈幕府役人などの警戒〉
芝、八丁堀、谷中（五箇所）十二名
〈中央本部〉
日本橋（一箇所）八名

以上、十五箇所、五十三人。
すでに、この内、三人が消えており、実質五十人である。
全体に、かなり考えた人員配置であったことは確かである。
それでも内蔵助は慎重だった。
配置図を眺めながらまだ散々首を傾げた。
「なにか、ご不満がおありかな」
忠左衛門が、不安げにのぞき込んだ。
「いや、よくお考えになられた人の割り振りだが、ちと、人の組み合わせが気になりましてな」

内蔵助は、できるだけ差し障りのないように言葉を選んだ。
「ほう、どこでござろう」
「南八丁堀の片岡の所に急進派の大高や田中（貞四郎）が固まって同居している。これがどうかだ……」
「やはり大石殿もお目につかれたか。いや拙者も気になっておりましてな。この三人をなんとか切り離そうと思ったが、どうしても一緒に居たいといって聞かぬ。やむを得ず、因果を含めて右衛門七（矢頭、部屋住み、十七歳）を監視役に配しましたが」
「右衛門七ではすこし荷が勝ちすぎませぬかな。それが心配じゃ。特に田中は、最初に片岡らに煽られて訾まで切って見せた熱血漢だが、どうも熱しやすく醒めやすい質と見受けた。暴走したくてたまらぬ片岡の悪い影響を受けねばよいがと、それだけが心配じゃ。それともう一人」
「まだ、ござるのか」
忠左衛門は苦笑いした。
「堀部安兵衛の所に、大納戸あがりで、剣術の心得の浅い毛利（小平太、二十石五人扶持）がおる。この男は堀部のきつい剣術指南で苦労してはいないか。そんな太刀さばきでは、到底仇は討てぬなどと、どやしつけられてはおるまいな」

「これもご慧眼でござるな。それもあってか、毛利は剣術を嫌って毎日、吉良邸の探索に、そと歩きばかりしておりましてな。しかし、そちらでは、なかなかな成果を上げておりまするぞ。近々、行商人を装って吉良邸に潜り込んで得た知識を元に吉良邸の見取り図ができるとのことで」

「ほう、それは心強い。それにしても人の才とは、いざとならねば解らぬものじゃな」

「全くもってさようでござるな」

小平太の意外な活躍の話から、二人の話題は、自然な形で吉良の諜報集めへと進んだ。

「で、吉良邸内部の防衛態勢の調べは如何あいなっておろう」

一番の気がかりな点であった。

「それが、まだまだ、不十分でござって。吉良という男、実に用心深いようでござるな。例えば……」

忠左衛門は縷々これまでの調べの結果を語り始めた。

本所に移ってからの上野介は、一段と内外の警戒を厳にした。

渡り奉公人には全員暇を出した。

すべての奉公人は三河の知行地から呼び寄せた者に限ったらしい。

商人も三河出身の剣士清水一学が地元まで出向いて、一々身元を確認した上でなければ、たとえ当用買いの日用品雑貨といえど、商人の邸内への出入りを許さなかった。

従って、呉服商の前原伊助、同手代倉橋伝助（扶持奉行、二十石五人扶持、三十三歳）、小間物屋を営む神崎与五郎。新たに酒屋を開いた礒貝十郎左衛門。

いずれも吉良邸への出入りはできなかったのである。

そんな厳戒態勢の中、毛利小平太だけが行商人としてよく潜り込めたものだ。よほど、なにか特殊な手を使ったとしか考えられないが――。

ちらり感嘆と同時に疑惑が浮かんで消えた。

「しかし吉報もござる。井戸掘り職人から得た噂では、万一の場合の脱出用の抜け穴造りは、湧き水が多くて諦めたとのことで」

と忠左衛門。

「それは、なによりだな。では土蔵はどうじゃ。頑丈な土蔵に逃げ込まれでもしたら手に負えぬが……」

「土蔵造りは、これも資金が足りなくて無理のようでござるな。それに上杉家として

は、近々、米沢に連れて行く積もりの老人。余計な金を家にかけたくないのではござるまいか」

「なるほど。となると、残る屋敷の防御手段はなにかな？」

「後は、屋内の迷路造りと庭を仕切る頑丈な板塀囲いではござるまいか。こちらの方が、はるかに安上がりで済みますからな。我等が吉良邸に討入って、廊下を真っ直ぐ突進した積もりが、いつの間にか元いた所を堂々巡りしている。目指す吉良の寝所には、一向に行き当たらぬ、といったカラクリが出来ているやも知れませぬ」

「それよ、恐いのは」

「実際、武林殿が按摩に化けて、一度だけ、吉良邸の用人に呼ばれたそうでござる。が、この時も呼ばれた用人部屋以外、他の部屋は、入り口も出口も全く判らず、危うく方向を失うところだったと、こぼしておられました」

「それでも二度、三度と行けば、なんとかなりはせぬか」

「それが行けませぬな。武林按摩は二度と招かれそうにありませぬ」

「なにか手落ちがあったのか」

「手落ちどころか、手ダコで」

「手ダコ？」

「さよう。手が剣道ダコで、ごつごつだったとかで。一度に警戒されたらしく二度と招き入れられませぬ」

「迂闊なことをしてくれたものだな。武林氏も」

「全く。そこで急遽、同志の中で掌の柔らかい者を選び出し、毎日毎日、軽石でタコを削ったりして俄按摩の養成中でござるが、とても間に合いそうもござらぬ。いやはや、なんともお粗末な話で」

忠左衛門は苦笑するばかり。

「となると吉良邸の正確な図面は手に入らぬということか」

「目下のところは、小平太が唯一の頼みでござる。もっとも、前の住人であった旗本の松平登之助殿の図面の写しだけは、大金をはたいてなんとか手にいれました。だが、これとて、その後、吉良の手で、大改造されておりますれば、そのままでは使えませぬ」

「ではどうあっても事前に吉良邸の内部は察知できぬのか」

「いや、それがそうでもありませぬ。それこそ〈窮すれば通ず〉でござってな」

忠左衛門は、にやり、意味ありげに笑った。

「一体察知できるのか、できぬのか。どっちなのだ。吉田氏。頼むから俺をじらさん

でくれ」

内蔵助は、わざと大袈裟に悲鳴を上げてみせた。

「いやいや、これはご無礼仕った。大石殿。実は――」

忠左衛門は、ここでやっと本音を語った。

「実は、ついこの皐月（五月）までは、拙者、正直のところ、吉良邸のあまりの警戒ぶりに、ほとほと困惑いたしておりました。ところが、水無月（六月）のある日、拙者の居た前川屋敷が、恐ろしく臭気がするので、ひょいと外を見ると、雪隠の横に糞尿の肥桶がずらり並んでいるではござらぬか。そうか、糞尿の汲み取り屋なら吉良邸に潜入できるのでは、と拙者、ふと、閃いた次第で」

「なるほど。違いない」

内蔵助は、思わず膝を打った。

「この内蔵助、下情に通じている積もりが、とんと、肥汲み商売までは気付かなんだ。吉良も糞尿汲みまで三河者を連れてくるわけにもいかなかったのじゃな」

「抜かったようですな。しかも、糞尿は、その量によって住まっている者の数を察することができますでな。また、落とし紙に血でも付いていれば、若い女の住まうことも判りまする。糞尿の貰い下げ代を支払うためには、吉良の下男衆とも口をきくこと

になります。そこで煙草の一服も吸えば、余計な話も耳に入ろうというもの。いやはや、これは意外な諜報の穴でございましたな。もっとも、これとて限界はござるが」

「ほう、如何な」

「雪隠や下男の居場所は、通常北側。それゆえ、直接上野の南向きの部屋は望見できませぬ」

「なるほど。それでも雪隠に入る吉良を、ちらと見る機会ぐらいはありえよう。だが、同志の中で、誰がそこまで身を落としてくれるかだな」

「そこでござる。難題は」

忠左衛門は、ここで自分も煙管を取り出し、煙草を、ぷかりと一服、長々と吸った。

（なにも、俺の前で煙草を吸う実演までして見せることもないだろうに）

内蔵助は、苦笑いして、次の言葉を待った。

「残念ながら、同志に諮ったが、誰一人肥桶担ぎまでしてくださる者はおりませぬ。それに、あれは易しいようで、なかなかどうして、担ぐに要領の要るものでしてな。やむを得ず拙者が……、と思って一度は試みたものの、寄る年波、どうやっても前後の肥桶二つを、揺らさず、こぼさずに持ち上げられませぬ」

忠左衛門は、さらに脱線して肥桶を担ぐへっぴり腰の格好をして、げらげら笑って

見せた。

「吉田氏も拙者も、肥桶担ぎは到底無理じゃわな。で、最後はどなたが？」

内蔵助は思わず力が籠もった。

まさかそんな奇特な者が浪士の中に居るはずがないのでは――？

「誰か肥桶担ぎの経験者はいないかと、あれこれ物色しましてな――、最後に『ではやむを得ませぬ。拙者の方でお引き受け致しましょう』と応じてくださったのは、誰あろう、大石無人殿とそのご次男良穀殿でござった」

「良穀？　三平がことか」

「さようでござる」

内蔵助は、思いもかけぬ名前に、しばし声も出なかった。

大石三平。その父大石無人は四十七士大石瀬左衛門の伯父で、内蔵助の曾祖父良勝の分かれの血族である。名君といわれた浅野長直に仕えていたが、寛文六年（一六六六）浪人して、早くから江戸に出て柳島に住んでいた。

この年七十六歳。堀部弥兵衛と同年齢で、二人は昵懇であった。

無人は、これまで、内蔵助の討入り計画が悠長過ぎるといっては、弥兵衛を焚きつけ、一方では、片岡や安兵衛に、「つい目の前に居る上野介を看過されるとは何事ぞ。

時が経つほど敵の用心が厳しくなろう。じゃによって我等だけでも討入りの決行を」と、そそのかしては内蔵助を困らせてきた頑迷老人である。

長男良麿は津軽越中守信政に仕える小姓組頭。だが次男三平良穀が浪人中で、当時二十八歳。柳島で父無人と田畑を耕していた。そこで肥桶担ぎの経験があったのである。

忠左衛門は、三平を拝み倒すようにして吉良邸周辺の農家の季節雇いに潜り込ませ、専ら糞尿集めと下肥造りをやらせたという。

（誰が、どこで、どのように役に立つかは解らぬものよ）

内蔵助は感嘆しきりだった。

殊に、自分の親族は――こちらから仕掛けた義絶工作とはいえ――あまりにも討入り計画に冷淡すぎた。

病身あがりの大石瀬左衛門以外、誰一人内蔵助に付いて来る親族がいない。元筆頭家老としては肩身が狭かった。そんな矢先である。

三平の申し出は無性に嬉しかった。

内蔵助は、勢い込んで訊ねた。

「で、上野の寝所の所在は明らかになったのか」

「まだでござる。されど老人の寝所は雪隠からさして遠くないはず。いずれ見付かりましょう。我等、三平殿の、文字通りの孤軍糞闘に期待しましょうぞ」
「孤軍奮闘？」
「いや奮は奮でも、糞との闘いでござるよ」
「あははは、孤軍糞闘か。それは言い得て妙じゃな」
久しぶりの笑いとなった。
この夜。
内蔵助は、珍しく熟睡できた。

4

翌十一月六日から、内蔵助は小山屋の離れに籠もり、忠左衛門以外の面会を謝絶した。
忠左衛門から上野介の行動と在宅諜報を毎日入手する一方、次の書類を纏めるためである。

討入り起請文前書
討入り指図書
預置候金銀請払書

前の二つは、三月以来秘かに書き留めてきた「吉良邸討入り策」第一部・準備書と同第二部・実行編を基に忠左衛門と共同で作成した改訂版である。

〈討入り指図書〉は、

『人々心覚』

と、易しい命名にした。

同志全員が読みやすくするためである。

三つ目は、瑤泉院さまからお預かりした討入りの支度金六百九十両の出納帳である。

今後とも毎日記入を続け、討入り直前に締めて、瑤泉院さまに届ける積もりである。

この他、一番重要だったのは、討入り後の幕府への報告用の、

『浅野内匠家来口上』

の起草であった。

実はこれが一番慎重を要する、また厄介な作文だった。

ところが、伝え聞いた堀部弥兵衛が、この役を買って出てくれた。

「拙者、老骨にて討入りの実戦にはお役に立つこと覚束なく、できれば大石殿の文書の作成にて協力したい」

弥兵衛と安兵衛の文章の上手さは、昨年来の往復書簡で、散々いじめられてきた経験がある。

「ではお願いしようか。あのころ拙者に寄越した手紙のように、説得力のあるものを是非に」

と、にやにや笑って頼んだ。

「それはもうお任せくだされ」

弥兵衛が、あまりに自信ありそうなので、内蔵助は、

「しかし、提出される貴殿の草稿に、拙者が手直しする勝手は、あらかじめお許し願いたい」

と釘を刺すのを忘れなかった。

「もちろん。大石殿にどのような修正を受けようと、一切異論はさしはさみませぬ。先のお手紙とは違い、これは対外文書でござれば。以上お誓い申す」

という殊勝な約束の上の執筆委嘱となった。

内蔵助としては、いずれ出来上がった草案に手を加えればいい。そんな軽い気持ちがあった。

これで内蔵助は、かなり時間の余裕ができた。

昼間、討入り関係の書類の執筆に専念した内蔵助が、夕刻になると、ふらりと外出するようになったのは、この余裕ができた後である。

（またぞろ、大石殿は遊びの虫が付きなすったのか）

と、忠左衛門は苦虫を噛みつぶしたが――、実は、この内蔵助の遊びの復活こそ、討入り諜報の本命だったのである。

怪我の功名と言ってよい。

というのは――、この余裕から、内蔵助が接触を開始した人物が、京橋三十間堀の呉服商・中島五郎作であった。

内蔵助が江戸詰め家老だった祖父に連れられて江戸に学んだ若い頃の知人であり学友である。当然、昔は祖父に隠れて悪所通いまでした仲である。

最初、内蔵助は、漠然と、懐旧の気持ちで会いに行った。ところが、交友を再開して、意外な五郎作の交流関係の広さに驚いた。それに、五郎作は、言わず語らずのうちに内蔵助たちの江戸下りの意図を察し、内蔵助の壮図に好意的だったことも判った。

そんな五郎作の気持ちが、早速、一人の人物の紹介となって現れたのは、十一月も押し詰まったころのことである。

「私めの店子に、是非お引き合わせしたきご浪人さまがおられます。一度お会いになりませぬか」

五郎作は何気ない様子で誘った。

「さて、どのようなお方で……」

最初、内蔵助は、やや警戒気味だった。事情を聞きつけて、売名のために、討入りに加勢したいという浪人が、ひきも切らなかった。

「そんな気持ちはさらさらござらぬ」と断ると、今度は逆に「仇討ちもできぬ腰抜け侍め」と、悪口雑言されるのが落ちだった。ところが、五郎作に引き合わされた浪人は違った。

浪人とは到底思えない柔和な顔。思慮深そうな眼差し。

名を羽倉斎といった。この時、三十四歳。聞けば、二年前の元禄十三年。三代家光公の五十年祭の折の勅使・大炊御門経光に従って京からやって来て、そのまま浪人して五郎作の居候になったという変わり種であった。よくある浪人のように、世の中を斜めに見るでもない。さりとて、忠義一点張りで物事を考えるのでもなかった。いう

なれば、なにか面白いことがあれば、損得抜きでひたすらのめり込みたい。そんな遊び大好き型の人物だった。

内蔵助は、一目見て、この男に惚れた。早速、五郎作と三人で登楼した吉原の茶屋で、呑むほどに羽倉の本音を漏れ聞いた。

「いや、大きな声では言えぬが」

言いながら、本人は、かなり大声で、ひやひやするような事を平気で喋った。

「実は拙者、二年前に江戸にやってきて徳川の傲慢無礼に呆れましてな。かといって今の朝廷はあまりにも因循姑息。とても帰る気になれませなんだ。そこで本当の、この国のあるべき政事の姿を調べたくて浪人致した次第で」

聞いている五郎作が大きく頷いて内蔵助を見た。

（如何ですか、この人物）

面白いでしょうと、言いたげな顔であった。

特に内蔵助が注目したのは、羽倉の吉良家との接点にあった。

一つは、羽倉が、今も吉良の家老松原多仲らに、神道や歌道を教えているということ。

第二に、旧主大炊御門経光に経音という弟がおり、その妻女が、ほかならぬ吉良上

野の三女・菊だという事実だった。

菊は、酒井家の酒井忠平に嫁したが、夫の病死によって寡婦となり、一旦上杉の養女となって、改めて経音に再嫁したという。

そんな羽倉の、吉良家家老や経音との接触から、上野介の動向が、それとなく判るのではないか、それが羽倉を紹介した意図であった。

ちなみに羽倉斎とは、後に国学の大家となる荷田春満のことである。

もちろん、羽倉自身、喜んで——と言うより、持ち前の好奇心から——内蔵助に進んで協力したい気持ちがあったことも判った。

「有り難い。まさに江戸で百万人のお味方を得た心地でござる」

内蔵助は、場違いの吉原で、女ならぬ羽倉の手を握り、天にも昇る心地になった。

（これで道が開ける）

諜報は下の諜報と上の諜報の二つが合わねば本物とはいえない。

この夜、内蔵助が、喜びの余り、前後不覚になるまで泥酔し、留守居役を仰せつかった忠左衛門を、またまた嘆かせたのは言うまでもない。

5

ところが――、

この頃から、昼間の執筆の間も、思いがけぬ雑音が、次々に内蔵助の耳に飛び込んできた。

同じ十一月下旬。

先の江戸参集の命令にもかかわらず現れなかった上方の橋本平左衛門（馬廻役、百石、十九歳）の行方が判明した。

今月六日、大坂曾根崎新地で、淡路屋の初という遊女と心中していたのであった。

「とんだ浅野家中の恥さらしよ」

事件を扇情的に報じる上方の一枚摺には、当時江戸で禁句の「心中」（江戸では「相対死」）を堂々と使って、浅野の家臣の悲恋を報じていた。

忠左衛門は、苦虫を噛みつぶしたような顔で怒った。

しかし、内蔵助は、

「義は人によってそれぞれよ」

と、笑っていた。

「笑っている場合ではござるまいに。大石殿」と、真っ赤になって食い下がる忠左衛門に、仕方なく「義」という文字の講釈までしてみせた。

「忠左衛門殿。そうは仰るが、義とは、元々、ギザギザの角目の立った戈を描いた象形文字でござってな。角目がきちんとして格好いいこと。つまり、格好がいいと認められるやり方を〈義〉（宜＝よろしい）と申すだけのことでござる」

「だからどうだと言われるのじゃ」

忠左衛門には、最近夜ごと酩酊して帰る内蔵助の方が、よほど格好が悪いと言いたいのであろう。その面当てもあってか、突っかかってきた。

「まだわかりませぬかな」

「わからぬわ」

「では申し上げましょう。格好いい義にも色々あると言いたいのじゃ。我等のように頭に忠を戴く義（忠義）もあれば、渡世人のように盃を交わした仲間との仁を尊ぶ義（仁義）もある。親に対する情義もあれば、妻や妾に対する律義もあろうというもの。そう、かりかりなさらぬことですな」

「益々わからぬわ」

忠左衛門は、ぷりぷりして自分の書机に戻ってしまった。
この後、内蔵助は、ぼんやりと別れの時の浮橋の姿を思い出していた。
（浮橋は、あのとき俺と相対死したかったのではあるまいか）
ふと、そんな気がした。
あの時、そう浮橋に言われたら、俺はどうしたであろうか。
逃げたか、それとも遂げたか……、考えると橋本事件は、他人事とは思えなかったのである。

だが、同情すべき脱落組は、ここまでであった。続いて不届きな脱落者が相次いで内蔵助を困惑させた。
小山田庄左衛門
田中貞四郎
小山田は、遊女に入れあげて片岡の金を三両盗み出しての遁走。
俄医師・田中の場合は、自宅に簡単な脱退届の置き手紙を残しての逃亡であった。
「しかし真の話は、この浪人中に夜鷹から染された唐瘡（梅毒）が、ここにきて顔一帯にどっと出て、人前に出られぬ容貌になったためとのことでござる」

と、忠左衛門が解説した。

「さて、それはどうかな」

遊びと、その道の病気のことなら内蔵助の方がよほど詳しい。

田中が江戸へ来てから夜鷹遊びに身を持ち崩したというのが事実なら、わずか二年足らずで鼻が欠けるほど唐瘡の毒が身体に回ることはない。

「考えてもみよ、吉田氏」

内蔵助はにやにや笑った。

「片岡は風呂屋にも一緒に行った仲であろう。もし唐瘡が事実なら、もっと早くから田中の身体全体の発疹に気付いていなければならぬ。ここにきて、いきなり顔に出たなどというのは嘘よ。片岡が騙されているのではないか」

「では片岡を呼んで、もう一度確かめましょうか」

「要らぬ。去る者は我等にとって縁なき衆生よ。捨ておこう。しかし、近頃はどうも、脱落原因まで情けないものになってきたな。これではたまらぬわ」

さすがに内蔵助も、げんなりした。

一方、忠左衛門の方は、別のことで恐縮するばかりだった。

「やはり、大石殿の言われたように、堀部組と片岡組から脱落者が多く出ましたわ

い」と、頭を抱えた。

　確かに、これまでの脱落組の中村、鈴田、小山田の三人は、いずれも堀部の居た本所林町の同居人。田中は片岡が店主である南八丁堀の同居人であった。

「だからといって堀部や片岡を責めるわけにもいくまいが……。どちらにしてもこれ以上脱落者が出ないことを祈るばかりじゃ。不幸中の幸いは、彼らに刀剣や防具が渡らなかったこと。参加はしないが盟約に従い、他言はせぬという者が居ること。それだけじゃな」

「まったく。大石殿の〈信じて疑う〉は、けだし名言でござった。残る浪士たちも、さすが大石殿よ、部下をよく見ていなさると、大納得でござる」

「そんなことを褒められても嬉しくはない。俺も書き物ばかりしてもおられぬということかな」

「夜遊びも控えることですな」

　忠左衛門は、ちくり皮肉った。

「いや、そちらはそちらで、重要な諜報も入手できるゆえ、大目に見てくれぬか。近く皆の者に、あっと驚く諜報をご披露する積もりじゃ」

「当てにしないで、待っておりますわい」

「いやいや、当てにしてよいぞ。それはそうと、肝心の同志たちの吉良の内偵は、その後如何か」

「喜んでくだされ。諜報収集は着実に進んでおりまする。三平殿の糞闘ですっかり吉良邸の北側が読めるようになり、前原の店にある火の見櫓からの昼の物見で、吉良邸の南側の様子も、捉えられましてござる」

「ほう、火の見櫓か、考えたな。前からあったものか、その櫓は」

「ありました。だが、近頃は吉良邸の板塀囲いが一段と高くなって、よく見えなくなっておりましてな。そこで、こちらも西北の両国橋方面の火事が見えぬでは近所の用心に困ると、近くの自身番にお届けして、櫓を一間以上高くあげました。これで吉良邸内が以前よりずんと見通せるようになりました」

「なるほど」

「この他、前原氏の古着店の屋根上に広い物干し場を設け、年中、着物をほぐしては洗い張りし、ほぐしては洗い張りすることにしました。これで吉良邸の前後の人や駕籠の出入りが、しっかりと見届けられるようになりました。これも大収穫でござった」

「いやはや前原の才知には、ほとほと感嘆の他はないな」

前原伊助。三十九歳。江戸定府の一人で禄高わずか十石三人扶持。これが、討入りでこれほどの働きをするとは――。

「それも夜は吉良邸が見えぬゆえ、昼火事の半鐘が鳴るのを今か今かと待ち構え、鳴ると、そら火事だ、櫓に登れ登れと、先頭に立って登りましてな。火事そっちのけで吉良邸の方ばかり覗いているそうで。いつ文句がくるやらと、ひやひやしながら偵察を続けておりまする。しかし、このお陰で吉良邸南側の主人の寝所は、囲いを越えて間違いなく捉えました。近く、小平太の証言と合わせて、より正確な図面にしてお見せできまする」

「それは有り難い」

「それゆえ、大石殿にも、いよいよ決行のお覚悟をお願いしたい」

「承知した。吉良が在宅していそうな日を二、三、知らせてくれ。拙者は拙者で独自に在宅日を調べる。その両方から決行の日を決めようぞ」

羽倉からは、近く、吉良邸の内部情勢の知らせがある筈。

それと同志たちの実際の吉良邸の観察報告を合わせれば、「空討ち」には、絶対にならないだろう。

内蔵助は、ここにきて、ようやく成功を確信したのであった。

6

十一月二十九日。

内蔵助は、瑤泉院さまからお預かりした六百九十両の使途を、一旦、この日をもって締めている。

身辺を整理し、以後、臨機応変の臨戦態勢に入るためである。

お預かり金の使途は、明細表にして、一々領収書（証文、手形等）まで添付した。

算盤下手の内蔵助が、後々の公私混同を疑われたくないため、ねじり鉢巻きで作業したかと思うと、なんとなく微笑ましくなる。

この使途明細を見てみると――。

「瑞光院ニ建ル御墓」等、主君仏事費が計百四十両余。京－江戸旅費は各人毎に記載され、計二百八十両余。また江戸での家賃、同志の生活援助費が二百余両。「遠林寺用事」など祐海を江戸に派した費用は主家再興運動費で、計約四十両。他に武器調達に十両、雑費五両。そして明細表は、

「金都合六百九十七両一歩二朱
　請取金元ニ指引〆金七両一歩不足　自分より払」

と締められている。

一分（歩）二朱の端数（はすう）までついているのがご愛敬（あいきょう）である。

「自分より払」の七両余が箱根越えで使った七両で、内蔵助が負担したということになる。

どちらにしても、必要資金を瑤泉院に全面的に仰いでいたことは確かで、その分、内蔵助の自己資金に余裕が出た。それが遊び金になったわけである。

使途明細を見ると、総所要資金の六割強が江戸への往復旅費と江戸の住居費に費消されている。

反対に意外に武器調達費が少ない。こちらは綿屋善右衛門の好意に全面的に依存した結果である。

生活費補助・食費援助を受けた同志は、千馬、神崎、原、三村、矢頭、武林、間瀬親子、中村（勘）、小野寺（幸）、間父子ら十人余にのぼっている。

しかし、百石未満の小禄者（全体では二十四人が百石以下）は、神崎、矢頭、武林、

三村のわずか四人である。

小禄者は、独身だったり、妻帯していても子がないなど、身軽な者が多かったからであろう。

結局は、故郷に妻子と両親を残し、持ち金をギリギリに切りつめて江戸にやってきた百石から二百石層の同志が、生活に逼迫していたということのようである。

十二月二日。

内蔵助は、同志（四十八人）を深川富岡八幡前の料理茶屋に集めた。

茶屋の亭主には「頼母子講（無尽講＝仲間内での積み立てと、その相互金融）」という触れ込みで、全員に町人姿で来ることを命じている。

集会の冒頭、内蔵助は、忠左衛門と共同で起草した「起請文前書之事」を読み上げた。

一　冷光院（浅野内匠頭）様のために宿敵吉良を討つ者、これまでに変心脱落した大臆病者を選び捨てここに集まりました。

願わくば必死の気持ちで、ここまでに到った我等を殿の御霊もご照覧あれ。

一　吉良邸討入りにおいては、その功の深浅はない。吉良の首上げた者も警護に徹した者も功においては同等であると心得よ。
　よって組合わせや任務に好悪の感情をはさむべからず。
　また先陣争いなどしてはならぬ。

一　誰しもそれぞれの考えや感情はあろう。しかし、今は個人感情を乗り越えて勝利のみを目指して奮起すべきものと心得よ。

一　首尾よく吉良を討ち果たしたとしても、我等の命も助からないと覚悟せよ。負傷者あれば合い助け決められた場所に集合せよ。

　右の四箇条に背くとき、この一大事の成就はないと心せよ。もし背けば、その者は先の大臆病者と同じこととなる。

以上を、全員が納得の上、署名、血判が行われた。

次に内蔵助は、全員に用意した『人々心覚』を示した。その内容は、

決行日の集合地
出発時刻
表門・裏門の配置表
戦い方とその組み合わせ
照明の扱い
火の用心法
敵対の心得
吉良討取りの場合
　その相互の連絡
　首の処置
引上げの合図と場所
負傷者の処置
追っ手への対処法
　上杉の追っ手
　幕府の追っ手

近隣旗本への挨拶
泉岳寺への行進と報告

等々。その周到な指導は驚くほど、微に入り細をうがっていた。

最後に激論となったのは「万一、吉良を討ち損じた場合」の対応であった。大勢を占めたのは、各自が、その場から、ちりぢりとなって江戸市中に潜伏し、ひそかに捲土重来を期する。そして駕籠で移動中の吉良を発見次第、待ち伏せしてでも襲撃を敢行するというものであった。

だが、内蔵助は、がんとして、この説を認めなかった。

「それでは老人の、ただの暗殺に過ぎぬ。我等、此度の復讐は、我等の存念を通せば、それでよいというものではない。幕府はもとより、江戸町民に到るまで、『なるほど、武士とは、主君の受けた恥辱を、己れの恥と心得て生きるものか。そして、如何に対処するものか。だが、一旦挑戦に失敗したと知ったときは、恥を知って、かくもさわやかに散るものか』。その規範を示すものでなければならぬ」

「と、申されると？」

「復讐か死。その二者択一よ。中間はない。失敗と知ったときは、潔く全員吉良邸に

て切腹して果てましょうぞ。それ以外に冥土のご主君に対するお詫びの道はない。しかし、我等に義あるかぎり、天佑は我にある。それを信ずることぞ」

さらりと言ってのけて、全員を黙らせた。

7

翌三日から、内蔵助を含む全員が臨戦態勢に入った。

だが、肝心の吉良上野介は、本所の新邸が居心地が悪いのか、それとも警備に不安を感じているのか、最近は所在が不定である。

元々、隅田川の向こうは、道路が、天気の日は埃もうもう、雨でも降ればどうしようもないどろんこ道になる。

上野介の妻富子は、改築後も、この新邸と道路を嫌って、実家に籠もったきり。寄りつきもしない。

妻に引きずられるようにして上野介も、本所邸を留守がちであった。

侍女たちも同様である。

夏はヤブ蚊、冬は空っ風に悩まされる本所を嫌い、誰も本所に泊まりたがらない。

用事が済むと、富子の実家のある芝・白金に帰ってしまう有様であった。
　この状況は、糞尿を汲み取る三平の糞尿分析と伊助の火の見櫓からの観察からも、はっきりと読み取ることができたのである。

　いつ現れるか。
　四日。
　そんな緊張の中、大高源五の筋から「十二月六日、吉良邸で茶会が催される。ついては前日の五日には、上野介は本所に在宅するのでは」との直前諜報が飛び込んできた。
　大高は、大坂の呉服商脇屋新兵衛の変名で吉良家出入りの茶道宗匠・山田宗偏の弟子になりすましていたから、この諜報は、師筋からの、確かなものとして受け止められた。
「すわ」と、色めき立つ日本橋の面々。だが、当の五日。肝心の吉良邸には、なんの動きもなかった。
「吉良殿は本所ご不在の様子」
　との、前原の高所からの観察が、誤報の危機を救った。

やがて五日は、将軍綱吉が柳沢吉保邸に「御成り」の日だったことが判明した。この関係で一両日は、江戸周辺まで、交通の警備が厳しく、茶会のような集会は一切遠慮することになっていたことが判った。

「どうも、この話、出だしも結末も、なんとなくすっきりせぬな」

内蔵助は、拍子抜けに苦笑いするばかりだった。

「なぜでござる」という忠左衛門の問いに、こう答えている。

「そうではないか。六日に催される茶会に、吉良が前日から本所に詰めるという裏付けはない。当日早朝の上杉邸からの移動ということも考えねばなるまいに」

こうして、さらに一喜一憂の中で過ごした数日――。やがて、同志を地獄に突き落とすような諜報が、伝わってきたのである。

十一月末。幕府、吉良上野介の米沢隠棲願いをご裁可

ただの噂ではなかった。

大炊御門経光の弟・経音の妻菊から、夫、そして夫の兄経由で羽倉へと伝わってきた間違いない事実であった。

父思いの娘菊などは、この幕府の決定に、随喜の涙を流し、

「一日も早く父を安全な米沢へ」

と、父に冷たい兄・上杉綱憲の尻叩きをしている、との話まで、羽倉経由で伝わってきた。

米沢に行ってしまえば、永久に復讐の機会はなくなる。一転、内蔵助は、「それご覧じろ。だから、もっと早くに討入りを決行すべきだったのだ」という、同志たちの、ごうごうたる非難を浴びることになった。

内蔵助は一人居室に籠もり、亡君の位牌を前に、じっと、耐えるしかなかった。

同志などといっても、こうなると手のひらを返したように批判者にまわる部下たち。

これを目の当たりにして、内蔵助は唇を噛んだ。

つくづく指導者などになるものではないと思った。

心中では、

（たとえ米沢下りの裁可が事実としても、あれほど高家としての格式を誇った吉良が、このまま仲間の高家衆に別れの挨拶もなく、江戸を去ることはあり得ない。必ず、忘年を兼ねた茶会を催すはずだ）

そう信じた。いや、そう信じたかった。だが、こんなことを叫んでも、「引かれ者の小唄」と嘲笑されるのが落ちであろう。

だから誰にも弁明しなかった。

が、さすがに眠れなくなった。

（今頃、上杉藩邸で、吉良は最後の茶会をやっているのではないか。あるいは、いそいそと冬の旅支度でも、始めているのでは……）

そんな妄想が浮かんでは消える。

この冬の奥州路の豪雪では老人の旅は無理だ。春にならなければ動けまい。そうは思うが……、あれこれ想像する度に、胃の腑がきりきり痛んだ。

食欲が見る見る落ちて、押し込むようにしなければ粥も喉を通らなくなっていったのである。

こうして、吉良の動向を追って、三日、五日――、そして無為のうちに七日がたった。

十二月十三日早朝。

「十四日、吉良邸にて年忘れ茶会が開催さる」

との諜報が飛び込んできた。
しかも、二方からである。
一つは、やはり大高からである。
「師の宗匠が、先日、日延べとなった茶会に改めて、十四日夜、招かれている」
というのである。
此度は間違いなし、と源五は力説しているという。
二つ目は、堀部の剣術道場に住む三島小一郎こと横川勘平（徒目付、五両三人扶持、三十六歳）からの、意外な諜報である。
「拙者の近在に住む桑門（僧侶）が、十日、吉良から本所での茶会の案内を受けたそうで、その返事を認めるにつき拙者に代筆を、と頼まれましてござる。この開催日が十四日夜でござる」と勘平は言ってきた。
内蔵助と忠左衛門は、
「いやいや、よき事お伝え下された。確認を急ぎましょうほどに、暫時お待ちあれ」
と、勘平を一旦去らせたものの、いなくなると、二人は、「さて」と、小首を傾げざるを得なかった。
「坊主が勘平のような町の剣術道場の男に代筆を依頼するなどということがありえよ

うか。誰かの仕組んだ罠ではないか」

内蔵助はあくまで慎重だ。

「全くですな」

忠左衛門も、内蔵助に同調して、なお疑心暗鬼であった。

だが、大高源五と堀部安兵衛からは、矢のような決断の督促がきた。

内蔵助は、やむなく最後の判断を羽倉斎の線に求めるため、冨森助右衛門と大石三平の二人を羽倉への使者に起用した。

冨森は、その不偏の中立性と沈着冷静を買ったもの。三平の起用は、堀部と大高に親交のある父大石無人を、この最終判断に加えるための苦肉の策であった。

三平には、この数日、「匂い消し」のためと称して、毎日風呂屋に行かせて身を整えさせていた。これも使者に好都合だった。

「頼む。ご両所」

内蔵助は、神にも祈る気持ちで二人を送り出した。

それに、この日は雪である。いつもの火の見櫓からの吉良邸内部の望遠も、物干し台からの人の動きの観察もできなかった。

唯一、羽倉の探索諜報にかけるしかなかったのである。

やがて、首を長くして待つ内蔵助と忠左衛門の元に、同日夜半、羽倉からの伝言として、懐紙の端切れに書かれた「走り書き」が持ち込まれた。ただ一言、

彼方の儀は十四日の様にちらと承り候

とだけあった。

内蔵助は、これを手に握ってじっと考え込んだ。

恐らく、経音に確認した上の報告であろう。会った直後、手水にでも出て、何食わぬ顔で、さらりと書いて三平に渡るように手配したものではないか。

「そうか」

内蔵助は、ここで大きく呼吸した。

羽倉の判断にすべてをかけるしかないと思った。

「十四日決行」

の大号令が、内蔵助の元から出たのは、この十三日夜半、正確には十四日早朝。ぎりぎりの決断であった。

8

翌十四日。

うたた寝から飛び起きた内蔵助のはれぼったい目に飛び込んできたのは、思いがけない真っ青な空であった。

「これぞ天佑」

思わず叫びたい心境だ。

天に満月

地に残雪

この二つが揃っていれば、今夜は松明も提灯も要らない。

吉良邸の雨戸を蹴破れば、予定する寅の上刻（午前三時からの四十分間）なら、月光は、ほぼ真横から射し込むだろう。

索敵は容易に違いない。

前日までひっそりしていた吉良邸が、昼過ぎから、使用人の男女の出入りが増えて

いった。

夕暮れ近くになると、今度は格式ばった物々しい格好の連中が、駕籠で続々と到着した。

「……ということで、今夜は、仲間の高家衆をずらり招いた、忘年の茶会と、お見受けいたした」

散歩から帰ってきた忠左衛門が、嬉々として内蔵助の所に報告にやってきた。

この一ヶ月あまり、雨や雪の日を除いて毎日、杖をつき、腰が海老のように曲がった老人の格好を擬して、朝夕二度散歩してきた。

この成果である。

「もっとも今日は、集まった仲間共に、邪魔だ邪魔だと、犬のように追われましたがな」

それでも笑っていられるのは大望目前の喜びゆえであろう。

海老のように曲げてきた腰を、「やれやれ」とばかりに元に伸ばす格好が、なんとも愛嬌があった。

内蔵助は、駆け寄って、忠左衛門の背中をさすってやりながら、

「……となれば、今夜は茶会のお開きも遅くなろう。吉良は、ここに泊まることになろうな」

祈るような気持ちである。

元禄十五年十二月十四日は、現在の太陽暦では、翌年一月三十日に当たる。冬の真っ直中である。

それに、この年は異様な寒波に襲われていた。夜中近くに、老人が隅田川を渡って上杉邸に帰るとは思えない。

「十中八、九、間違いござるまい。もっとも、女房の富子は、相変わらず実家を離れぬようでござるが」

忠左衛門は答えた。

「そうか、亭主とも別れ別れか」

それも吉良の運命ではないか。

「で、賄いの女たちはどうだ？」

「こちらは、近所からの手伝いが多いようで、内部の侍女は、少ないようでござるな」

「それは有り難い」

逃げる女を、関所のように懐に手を差し込んで乳房を点検する「女改め」は、手間がかかって厄介である。

（もし、女が残っていれば、老人たちにやらせるしかあるまい）

用意万端指示してきた積もりでも、どこか、こんな抜けているところがあるものだ。

俺の準備も甘いなと、つくづく思った。

暗くなるのを待ちかねるように、内蔵助は小野寺十内とともに、両国矢ノ倉の堀部弥兵衛宅へと急いだ。この間、瑤泉院への預かり金の使途明細の送付も済ませている。

すでに弥兵衛の屋敷では、吉田、原、寺坂（吉右衛門）、大石無人、同良麿、同三平、間瀬（孫）らが酒を酌み交わして前祝いをやっていた。

それを横に見ながら、内蔵助は、まず、弥兵衛と二人だけで奥の部屋にこもった。

この数日、例の幕府の米沢隠居裁可問題で、くさくさしていたため、弥兵衛がせっかく書いてくれた『浅野内匠家来口上』の草稿を放り出したままでいた。

慌てて読み直したが、ちょっと気になるところがあったのである。

「実は、口上書のことだが」

相対で座ると、内蔵助は、若干躊躇しながら切り出した。

「なにか、ご不満でも」
弥兵衛は、にこにこ笑っている。
案文によほど自信があるのだろう。
「不満どころか……」
内蔵助は微笑まじりに言った。
「正直申して巧すぎますな」
「巧すぎてはいけませぬか」
「いかん。この内蔵助にも、これほど説得力のある名文は書けませぬ。それゆえ、弥兵衛殿、言われてお怒り召されるなよ。もしや貴殿は、どなたか特別な方に、この草稿の手直しをして戴いたのではないかと拙者、疑うておるのじゃが。今さら隠し立てしないで、正直に答えてくれぬか。拙者、決して怒っているわけではない。むしろ有り難いことと思うておるのじゃ」
弥兵衛は、しばらく天を仰いでいたが、「これは参りましたな」と、あっさり兜を脱いだ。
「お見受けの通り、最後に、信頼できる、さるお方に手直しをお願いしましてござる。他人に、我等の企てを漏らしたことは、重々お詫び申すが、実は、このお方、もはや

他人ではござらぬ」

「と、申されると？」

「我等がために、それまでの役職も放擲されて、我等とご同心下さった心の師でござれば、どうか、拙者の勝手を、お許し願いたい」

「ほう、で、そのお方とは？」

「細井広沢殿でござる」

「えっ、あの柳沢家のご家臣の？」

「さよう。今年皐月（五月）まではご家臣でござった。今は、我等の企てに協力したいと、自らの立場を鮮明にされるため、敢えて柳沢家を致仕（辞任）されました。此度の口上書については、ご本人からご執筆を買って出られたもの。それを隠して、拙者が、自ら書くかのように貴殿に申したは、手前の僭越でござる。平にお詫び申し上げます」

「そうか、それで口上書が巧すぎる訳が解ったわい。もそっと早ように言ってくれれば、挨拶ぐらいはしたものを」

「いや、今夜、ご本人が、大石殿のお許しがあれば、我等の激励に安兵衛の道場に参上したいとのこと。そこでお会い下さらぬか」

「もちろん喜んで。しかし、なんと手回しの早いことで」
疑問はすべて氷解した。

この後、内蔵助と弥兵衛は、別間の宴席に加わった。見ると、同志の数は二十人余りに膨らんでいた。

各人の前には、弥兵衛の妻が出陣の祝いとして用意した勝栗、昆布、さらに縁起物として敵吉良上野介の首を取って名をあげるようにと菜鳥（鴨）の吸物まで供されていた。あっぱれな心くばりであった。

内蔵助が座に着くと、老人たちが示し合わせて前にやってきた。

何事かと驚く内蔵助に、一同平伏して言った。

「これまでの一年九ヶ月。我等が大石殿に申し上げてきた悪口雑言、そして軽率な行動の数々。ここに改めてお詫び申し上げたい。お許し下されましょうや」

「なにを申される」

内蔵助は、不意に目頭が熱くなるのをじっと堪えながら続けた。

「拙者こそ、このような鈍牛ゆえに皆様に、多々ご迷惑をかけた。にもかかわらず、よくここまで耐えて随いてきて下された。詫びねばならぬは拙者の方でござる」

この挨拶の交換の後、代わる代わる抱き合って、男たちは、さわやかな涙に暮れたのである。

これで、ほっとしたのであろう。弥兵衛が珍しく酒を嗜み、

「武骨者の某でござるが」

と、前置きして発句した。

日頃は発句など「文弱者」のたしなみ、と見向きもしなかった老人の言葉に、一同啞然とする中、

雪晴れて心にかなふ朝かな

と見事に詠み、一同、やんやの喝采となった。

内蔵助は無性に嬉しかった。

「では」と言って、指名も待たず立ち上がると、手拍子を取りながら『羅生門』の一曲を謡いだした。

伴ひ語らふ諸人に、

御酒(みき)をすすめて
盃(さかずき)を、
とりどりなれや梓弓(あずさゆみ)
やたけ心のひとつなる
武士(つわもの)の交じはり
たのみあるなかの酒宴かな

興は尽きなかった。
やがて、かれこれ子(ね)の刻（午前零時）となり、内蔵助は、
「ご一同立ちませい」
と叫んだ。
「おう」
同志は、一瞬にして、必殺の集団と化したのであった。

第十三章　暁の急襲　元禄十五年極月

1

元禄十五年極月（十二月）十四日、子の中刻（十五日午前零時）。

内蔵助は、堀部弥兵衛宅（両国矢ノ倉）を後に、最後の集結予定地である安兵衛道場（本所林町）に向かっている。

この時、弥兵衛は、壮挙の嬉しさのあまりに、慣れぬ酒に酔い、前後不覚に寝入っていた。

恐縮して揺り起こそうとする弥兵衛の妻女を、内蔵助は笑顔で押しとどめた。

「大事ない、大事ない。決行の時まで、まだ二刻（四時間）余もござる。それに我等もあちら（安兵衛道場）にて、しばしの休息を取る所存なれば、いずれにて休むも同じこと。ご老体には、御妻女の元にてゆっくりされ、後から我等を追い参らせよ」

凍てつく深夜のことだ。大事の前に、酔った弥兵衛に辷って怪我でもされたら大変である。

実は、弥兵衛には、吉良邸襲撃後、本所から泉岳寺に凱旋する間道の案内役を頼んでいた。そちらの方で歩けなくなっては困るのである。

幸い、弥兵衛の親族の若者二人が、この夜の酒宴の手伝いにきていた。

内蔵助は、弥兵衛の身を、この二人に託して先発した。

別途、本所二ツ目相生町の米屋商店（前原伊助）と同所三ツ目横町の杉野十平次道場に待機していた二つの集団も、内蔵助と相前後して安兵衛道場に合流している。

全員が集まったところで、内蔵助は強制的に同志に仮眠を取らせた。

こんな時に寝ていられるかと、ぶつぶつ言う者には、吉田忠左衛門が内蔵助に代わって一喝した。

「かかる時に眠れる者こそ真の勇者でござるぞ」

その上で堀部道場の燈火を消してしまった。
雨戸を閉め切った真っ暗闇。
道場はやがて、男のいびきと熱気、そして体臭がむんむん立ちこめる異様な雰囲気に包まれていった。

「寝付きのいいのは頼もしいの。だが、いつ風呂に入ったのかな、この連中は」
寝入った同志の様子をそっと見回ってきた内蔵助は、道場の、あまりの男臭さに閉口して鼻をつまんだ。
忠左衛門は笑いながら、
「連中はあまり湯に入っておるまい。拙者も堀部氏（弥兵衛）も、この寒さの中、風邪を引いて日課の偵察ができぬようになってはと自戒し、この十日ほどは風呂など頂戴しておりませぬぞ。吉原の風呂などに、のうのうと浸かっておられたは、どこぞの御大将ぐらいのものじゃ」
最後まで減らず口を叩く老人であった。
「どこぞの御大将とは拙者がことか。しかし吉原は風呂に入る所ではないぞ」
内蔵助は、笑いの噴き出すのをこらえながら、大袈裟に頬を膨らませてみせた。

そんな、たわいもない雑談の中、時だけが飛ぶように過ぎていった。

丑の下刻（午前三時）。

忠左衛門は、頃合いを見て、真っ暗な道場にむかって叫んだ。

「各々方。お支度の時ぞ」

「うおう」

野獣のような声で同志は一斉に飛び起きた。

この時の着替えは、下着の確認から始まっている。

内蔵助の指示は徹底していた。

「各々方」神座の前に立った内蔵助は、大声で叫んだ。「褌の紐と股引の帯紐は必ず腰上で二重結びとされよ。結びがほどけては不覚の因ぞ」

同志は、げらげら笑ったが、内蔵助は、にこりともしない。

「笑うでない。これは仇討ちの経験のある道場主・堀部安兵衛殿の貴重なご忠告だ。それに、褌は必ず前垂れ付きのものをしてきたであろうな。これも、道場主殿のご意見で皆に伝えてあったはず……」

不幸にして死んだ時、褌の前垂れがないと醜態をさらすことになりかねない。

そんな忠告をしながら、ふと内蔵助は、肝心の道場主の姿が見えないのに気づいた。
（何処だ？　安兵衛）

やがて、「拙者なら、ここにござる」と、安兵衛がひょっこり顔を出した。
「なに、親爺殿を迎えに行っておりましたで、しばらく留守を致した。親爺殿は間もなく参るはずでござる。されど拙者、その前に、ちと大石殿と吉田殿に折り入ってご相談がござるが……」
なにやら憔悴した、浮かぬ顔であった。
内蔵助は、すこし考えた末、「では」と、忠左衛門を促して奥の間へと入った。
随いてきた安兵衛は、背後の襖を閉めきると突然居ずまいをただし、
「済まぬ、ご両人。安兵衛、これ、この通りでござる」
と、平伏した。
「何事ぞ」忠左衛門が一驚して、「まま、なにかは存ぜぬが、まず、お手を上げられよ」
その手を取った。
「いえ、こればかりは安兵衛が不始末。この手、上げられませぬ」

喉から絞り出すような声である。

内蔵助は、ゆっくりした口調で二人の間に入った。

「申されよ。まさか、吉良が消えたというのではあるまい」

「いえ、それはありえませぬ。大高氏のその後の報告では、山田宗偏殿が茶会の最後まで残り、上野介が今夜は邸内で休むことを、しかと耳にしておりますれば」

「それならよい。ここまできて今更じたばたはせぬ。何事かは知らぬが、申してみよ」

「では申し上げまする。実は――毛利小平太が昨夜……」

後は声にならなかった。

毛利小平太が十三日夜、突然、道場長屋から失踪した。安兵衛は翌十四日、一日かけて懸命に心当たりを探したが、杳として行方が知れないという。

何事にも動ぜぬ、と言ったばかりの内蔵助だが、不意に、がつんと後頭部を殴られた気がした。

これまでも小平太に疑惑がなかった訳ではない。他の同志が一歩も入れない吉良邸に、なぜ小平太だけが、行商人として出入りを許されるのか。

一度質(ただ)しておかねば、と思いながら、つい忙しさにかまけて機会がなかった。
完璧(かんぺき)を期して進めてきた討入り計画だったが……、頭が真っ白になったところを、
一瞬、稲妻のように、
二股諜者(ふたまたちょうじゃ)（二重スパイ）
という言葉が走り抜けた。
（そうか、そうかもしれぬ。そうとしか解釈できぬな。だが、それでは、これはどうなる）
思わず、懐(ふところ)の吉良邸の絵図面を握り締めた。
もしかすると、小平太が提出したこの吉良邸の絵図面は、真っ赤な偽図ではないのか。
「上杉家差し回しの武士は、ごく少数」との報告も、我等を安心させるための策略。
実は大事を、吉良上野介の寝所に近い南面の長屋にひそませているのでは――。
疑いだしたらきりがない。
それに、小平太が二股諜者なら、その集めた諜報と同程度のこちら側の諜報が、相手に流れていると考えなければならない。今夜襲撃する我等の企ても筒抜けなのでは？

内蔵助は戦慄した。

「しばし、待たれよ」

内蔵助は目を瞑り、義盟に参加した当時の小平太の姿を追った。

そこに救いはないか？

小平太の参加は、同志の中でも一番遅い。今年の春、脱落者の相次ぐ中での新加入であった。

当時、同志の参加を締め切っていたわけではない。だが、同志の意思統一に苦慮していた内蔵助は、新たな参加者を迎えることに、なんとなく気が進まなかった。

しかし、小平太は顔を真っ赤にして内蔵助に訴えた。

「忠義を果たすは、これからではございませぬか。何故、拙者だけに同志の門戸を閉ざされるや。家禄低きゆえ、忠義の資格すらなしとでも仰せられるや。大石殿」

にじり寄るその目には、大粒の涙が……あった。

あれが空涙だとは、到底信じられなかった。そのため、部下を「信じて疑う」という、おのれの自戒を緩めてしまった。

内蔵助は唇を噛んだ。

人は、己れの欲することしか見えぬもの。これを超えて真実を見つめる勇気を持たねば、本当の殿様にはなれませぬ。

赤穂の華嶽寺の二世住職・良扶和尚が、亡君の祖父長直公に与えた教訓と、父から教えられた。

内蔵助は、この「殿様」を家老の自分に置き換え、己れの自戒としてきたのである。部下を「信じて疑う」という内蔵助の物の考えは、ここから生まれた。

だが、それを、肝心要の今、自ら踏み外した。

我ながら悔しい。情けない。

だが、事ここに到っては、もはや、じたばたしても始まらない。

後は、吉良邸の南側に建てられている上杉家臣団の長屋からは、糞尿の汲み取りがほとんどない、多数の警備隊がひそんでいるとは到底信じ難い――、との大石三平の地道な諜報を信じるしかない。

（ままよ）

判らぬことは、詮索してみても始まらない。後は運を天に任すしかない。

内蔵助は黙考をやめた。
「小平太がこと、他言無用ぞ」
それだけを言い残すと、すっと身を翻すようにして道場に戻った。
この後、内蔵助は、道場の神前にぬかずき、禅定修行の結跏趺坐の姿勢を取った。
無念無想。そして不安を圧し殺す。
今はそれしかできない。

寅の中刻（午前四時）――。
一人頷いた内蔵助は、堀部道場の前庭に飛び出し、天を仰いだ。
皎々たる満月はさらに西北深く傾き、浅い仰角から注ぐ強い月光は、庭の積雪を滑るがごとく煌かせ、まさに道場の最深部に達しようとしていた。
（頃やよし）
たとえ上杉家臣団が何十人いようと、小平太の図面が偽であろうと、満月と残雪の反射光、そして上野介の在宅――、この三つの条件が揃う時は二度とないだろう。
今日をはずせば、上野介の米沢行きで、討入りの機会は永遠に失われるかもしれない。

ぐらついていた内蔵助の心が決まった。まっしぐらに突き進むのみ。
もし多勢に無勢なら、切って切って切り死にする。万一、吉良の逃亡を許した時は、吉良邸に火を放って全員自害する。
それしかない。
「ご一同」
道場に戻ると、内蔵助は、ぐっと腹に力を入れて呼びかけ、そして叫んだ。
「いざ、立ちませい。そして天佑は我にありと信じよ」
凛とした声。それは自分に言い聞かせる最後の言葉でもあった。
「おう」
全員が、力強く内蔵助に応じた。

2

同志一行は、安兵衛道場を揃って出、そのまま竪川沿いの「河岸通り」を西に六町と少し（七百メートル）ほど進んだ。
南は川、北側は小さな町屋が点在する小径で、川沿いに土を盛っただけの「掘上げ

道」ということもあって、この辺りには番屋（町民の夜間自衛警備所）がない。これも安兵衛道場を最終の集結地とした理由である。

しかも、刻は暁七つ（午前四時）――。

「犬にも吠えられませぬな。京・大坂ではこうはいきませぬぞ」

横に並んで歩く吉田忠左衛門が内蔵助の耳元で囁いた。

犬公方さまのお陰で、野犬に悩まされることがない、と言いたいのであろう。

「いや、野犬はともかく、番屋がないのは偏に貴殿の場所選びのお陰じゃ」

内蔵助は、軽く頭を下げて応じた。

「いやいや。大石殿の入念なご指示あったればこその拙者の場所選びでござった。しかし、お褒め頂けるとすれば、この後でござるぞ。次の、この道をご覧じませ」

忠左衛門が手にした地図を開き、指で示す。河岸通りを経て吉良邸にむかう北方向が、月明かりに照らし出された。

「この道には吉良邸の表門に到る二町（二百二十メートル）にわたり、辻番（大名・旗本の自衛警備所）がござらぬ。これまた警備にうるさい江戸では希有なことでござる」

忠左衛門は、得意そうに鼻をうごめかした。

「ほう、それは！　しかし、昨年江戸入りした時入手した周辺図には、たしか一箇所

あったと記憶するが」

それゆえ、見とがめられた時は「大名火消し」と偽ることにして、火事衣装を数人分用意させたものである。

「その必要はなかったようですな。幸い、今年になって早々に辻番がなくなりまして」

「ほう、何故かな」

「よくは解りませぬ。が、どうやら旗本たちが、吉良邸の付近に住むのを潔しとせず、引っ越す者が出て、辻番を維持できなくなったのではござるまいか。あるいは我等の討入りと遭遇し、かかわりあいになるのを恐れて廃止したか。まさか幕府が、我等のために撤去してくださったわけではござるまい」

くっくっと、小さく笑い、

「さて、無駄口を叩く間に、それ、その北への道に参りましたぞ。ではここで皆の者に指示せねばなりませぬ。しばし、お待ちくだされ」

そう言うと、忠左衛門は、くるっと後を向き、前列の者に告げた。

「静かに。ここより忍び足を取る。後続の者は、前を行く者の足跡を辿れ。よも、新しく雪を踏みなどして、無用な足音を立てまいぞ。さよう後方に伝達せよ。よいな」

この指示が口々に後へと伝達されていくのを待ちながら、内蔵助は、澄み渡った天空を仰いだ。

（殿、いよいよでござる。どうか、我等の戦いぶりをご照覧あれ。そして、戦う、この者たちの身を、どうかお守りくだされ）

まだ見ぬ上杉軍の数を思うと、祈らずにはいられない心境だった。

眼前の吉良邸は、総坪数二千五百六十坪（八千四百平米）。表門のある東側、裏門のある西側は、共に三十四間余（六十三メートル）の幅をもつ。北側の旗本・土屋主税（ちから）、本多孫太郎の両邸を除けば、三方が道路に面している。南面には、問題の上杉家家臣のための長屋がずらりと並んでいた。

同志は吉良邸のある本所松坂町二丁目の辻にさしかかった所で、内蔵助の指揮する「表門組」と忠左衛門が引率する「裏門組」の二手に分かれた。

「では、ご健闘を。吉田氏」

「晴れての再会を。大石氏」

万感込めて、二人は別れた。

表門組は、遅れていた堀部弥兵衛がやっと間に合い、予定どおり二十四人となった。分担は、以下の通りである。

総指揮　大石内蔵助
補佐役　原惣右衛門
同　　間瀬久太夫
新門（表門の北）担当　堀部弥兵衛以下五人
屋内突入組　片岡源五右衛門以下十人
屋外攻守組（庭組）　早水藤左衛門以下六人

第一次攻撃の武器は、内蔵助を含め十一人が槍、長刀。三人が弓または半弓とした。雨戸や障子、唐紙を引きずり剝がせば、月光が庭の雪に反射して屋内深く射し込むだろう。となれば長尺の槍や弓が緒戦では有利、との内蔵助と忠左衛門の判断であった。

裏門組は、総勢二十三人。その分担は、以下の通りである。

指揮官　大石主税
補佐役　吉田忠左衛門
同　小野寺十内
同　間喜兵衛
屋内突入組　杉野十平次以下九人
屋外攻守組　潮田又之丞以下十人

第一次攻撃の武器は、表門組同様、主税を含めて十人が槍、長刀。三人が弓または半弓である。

表門、裏門組を含めた屋外組十六人の内、五人に弓または半弓を持たせた。これは、南の長屋にひそむと見られた上杉家臣団からの弓、場合によっては鉄炮（てっぽう）による攻撃に対応するためであった。いずれも弓の名手揃いである。

内蔵助は表門に立って、かねて文箱に収めてきた『浅野内匠家来口上』を、高さ一丈（三メートル）ほどの青竹の先に結びつけて、門につるした。
討入りの儀式である。

それが済むと、
「一同、かかりませ！」
内蔵助の凛とした声が、雪夜を引き裂いた。
第一関門は表門の開門である。
仲間に担がせてきた梯子が二つ、さっと塀にかけられると、かねての手筈どおり、若い矢頭、間（十次郎。部屋住み、二十五歳。喜兵衛の長男）、吉田（沢右衛門。蔵奉行、十三両三人扶持、二十八歳）が、我先にかけ登る。
難なく門扉が内側から開いた。
「よし」
内蔵助は頷く。いよいよ、頭の中で何十回となく繰り返してきた「吉良邸攻撃作戦要務令」の開始である。
「次、庭組、中へ。南側の長屋の動きに注意せい」

「おう」
と叫んで、早水以下六人が駆け込み、玄関前を左に折れて、そのまま南側の庭へと消えた。
「次！　屋内組、表玄関へ」
片岡以下の十人が我先にと走り込み南向きの玄関前に立った。
全員が吉良邸内に立ち並ぶと、内蔵助はゆっくり門内に入り叫ぶ。
「一同、鬨の声ぞ」
号令一下、「えい、えい、おう」と同志は一斉に応じた。
次いで、口々に、
「浅野内匠頭家来、主君がご意趣を報ぜんがため推参。いざ吉良殿が御首級頂戴せむ」
と怒鳴る。
さらに、この後、堀部弥兵衛が庭にでて、持ち前の地声を張り上げた。
「一の組の五十人！　前庭にまわれ。二の組の五十人！　裏庭へ。残る三の組五十人は屋内突入！」
攻撃軍の数を三倍に膨らませる。

これも、まだ見ぬ上杉勢への牽制策として考えぬいてきたことである。

屋外組が、ここで「第一の作業」として命じられていた南面の雨戸の引き剝がしにかかった。

まず、げんのう、かなづちで雨戸を叩き割る。ついで、穴の空いた雨戸に細引きを結んだ「取りかぎ」を絡ませ、かけ声と共に一斉に引っ張る。

面白いように、雨戸が次々に庭に転げ落ちる。

途端に、庭に射し込んでいた月光が、計算どおりに残雪に反射して、そのまま屋内を明るく照らしだした。

屋内ではすでに乱闘が始まっていた。

「見える、見える。先が明るい。有り難や」

どうやら、屋内組の先頭に立ち、長刀を振るっていた片岡源五右衛門らしい大声がした。

抵抗する敵は、同志三人が整然と一組になって〈槍ぶすま〉を作って進む——これも内蔵助の指示である——赤穂側の攻撃に手も足も出ない。

あっという間に、ばたばたと吉良の侍が倒れていった。
屋外組、屋内組の協調は、すべて計算どおりに進んだ。

状況は裏門組も同じだった。
もっとも、浪人不破数右衛門だけが唯一(ゆいいつ)の命令違反者であった。
屋外組に配された不破は、最初から「雨戸はがし作業」が不満でならなかったのである。
途中、「こんなことは詰まらぬ」とばかり、庭先からのこのこ屋内に入り、得意の槍で三人、五人と、瞬(またた)く間に吉良勢を倒していった。
「そなたは庭組だ。外に戻れ」
裏門の屋内組総大将である杉野十平次が怒鳴ったが、
「頼む、見逃してくれ。これがしたくて加わったのじゃ」と、数右衛門は、最後まで命令を聞かなかった。

四半刻(しはんとき)（三十分）たたぬ間に、吉良邸は丸裸になった。
そこには、強固な砦も要塞(とりで)(ようさい)もなかった。迷路もなかった。

あったのは、庭にめぐらせた二重、三重の囲いや塀だけであった。

南側の長屋には、上杉家臣団は一人もいなかった。

同志たちは、長屋の一部屋一部屋を綿密に点検し、点検済みの部屋は、引き戸に、かすがいを打ち付けて、全室を封鎖した。

こうして彼我の攻防は、吉良邸の破壊、長屋の封鎖を含め半刻余（一時間余り）で、あっけなく終わりを告げた。

兵力は、討入り側の三に対して吉良側一であった。それも、こちらは鉢金入り頭巾、鎖帷子を着込んだ一騎当千の剣士揃い。相手は、袷一枚の着流しの文弱の徒。初めから戦闘にならなかった。

攻撃側には、吉良側の知識が全くなかったから、誰が誰なのか、相手の名前も地位も皆目不明のまま、一方的な殺戮戦となった。

後の『赤穂義士伝』などで奮戦したといわれる小林平八郎（隠居付家老、百五十石。元上杉家家臣だが、上野介の妻富子の入輿に従い吉良家に転属）は、実は、すでに四十三歳。ひたすら逃げようと門近くまで行ったところを、赤穂浪士に捕まった。

「上野介の居所に案内せよ」と言われて「拙者は下々の者ゆえ存じませぬ」と答える

と、絹の寝間着をつかまれて「下々の者が、このような高価な寝間着を着るわけがあるまい」と問い詰められて答えられず、そのままあっさりと切り捨てられた。

有名な吉良屋敷の池の石橋上の戦いを演じたのは、清水一学ではなく山吉新八郎（近習、三十石五人扶持）であった。嗣子義周を守って浪士と渡り合い、胸を突かれて深手を負ったが、最後は下男の格好で逃亡した。

唯一奮戦したのは、新貝弥七郎（近習、六両、四十歳）ぐらいのものであろう。弥七郎は、若い浪士・小野寺幸右衛門（部屋住み、二十七歳）と、しばし互角に渡り合った。だが、持久力に差があった。次第に身体がふらつき始めたところを、新手の赤穂方援軍に、真っ向幹竹割りに切りつけられ、頭を割られて即死した。

当時の吉良側の江戸屋敷在宅者は――後に判った「吉良家分限帳」によれば――四十三人。

浅野内匠頭の刃傷事件があった昨年春より十名ほど増員されていた。

そのうち何人かは、かつて米沢藩士だった可能性はある。だが、今は吉良家に転属となった吉良家の家臣である。

このうち料理人、足軽、坊主、厩別当などの非戦闘員を除けば三十六人になる。当

日の宿直員となると、さらに減って二十二人。

このうち初めから逃亡したものを除くと、実質戦闘に参加したのは十五人程度と推測される。兵力が三対一となる理屈がここにある。

この結果、吉良側の死傷者ばかりが累々と横たわることになった。

反対に赤穂側は死者なし。けが人は五人。それも対戦での怪我でない者が三人（残雪に足を滑らせて庭池に落ちた近松勘六、長屋塀を乗り越える際に足首をくじいた神崎与五郎、同じく手首を捻挫した原惣右衛門）。

相手との渡り合いで軽傷を負ったのは、横川勘平、武林唯七の、わずか二名に過ぎない。

この圧勝を喜ぶ赤穂浪士の輪の中で、（こんな筈ではなかった）と、憮然と考え込んでいた者が、二人いた。

一人は大石内蔵助。

武将として、なぜ上杉勢が全くいなかったのかを、一人、しきりに考え込んでいた。

もう一人が堀部安兵衛。

元来が古風な武士であったから、互角の敵と斬り合い、命を賭して相手を倒すこと

だけに無上の喜びを感じる男であった。それだけに不破数右衛門のように、臆病者(おくびょうもの)を相手に、大立ち回りを演じることを潔(いさぎよ)しとしなかった。

安兵衛は、討入りの途中から、すっかり不機嫌になり、最後は、戦闘にも加わらず傍観者に徹した。

安兵衛の不機嫌は、討入り当日ばかりではなかった。この後、お預けの身となった五十日の間も、一言も「討入りの時の実況」を語らなかった。

この安兵衛の姿勢こそ、〈討入り戦の実相〉を物語るものであった。

3

だが、肝心の上野介の姿はどこにも見あたらない。

寝所はいうに及ばず、居間、広間、台所、茶室、果ては厠(かわや)の糞壺(ふんつぼ)に到(いた)るまで、血眼になって探し回った。

いずれも無駄に終わった。

いらだつ吉田忠左衛門、堀部弥兵衛らをよそに、内蔵助は泰然自若としていた。

「上杉の援軍がいないということは、いざという時、吉良は、最初から隠れる、逃げ

る、それしか念頭になかったということであろう。ならば必ずどこかに忍んでいる。諦めるな」

叱咤激励を続けた。

だが、それでも発見の呼び子笛は鳴らない。むなしく時だけが過ぎていった。

まもなく東の空が明るくなるだろう。幕府の役人などが飛び込んできたら厄介なことになる。

ここで意を決した内蔵助は、再び忠左衛門と弥兵衛の二人を招き寄せると、あっと驚く〈奇策〉を授けたのである。

「よいか。全員を、今居る場所にとどめ、そのまま安座させよ」

「安座？　座ってどうしろと仰せで。そのまま吉良の出てくるのを待てと言われるのでござるか」

「そうだ。直に座しては腰が冷えるゆえ、雨戸などの板きれでも、筵でもよい。尻の下に敷いて、その上に座らせるがよい。しかし、以後、一切の物音を立ててはならぬ。咳払い一つすることも許さぬ。ひたすら己が呼吸と天空を渡る風、そして明けを告げる鳥の声だけを聴かせるのだ。全身を耳とせよ。さすれば座禅の時と同じ。異質な音は、針一本落ちる音も逃すことはない。コトリとでも人の動く音が聞こえてくるまで

耐え続けよ。今からは、隠れている〈老もぐら〉と我等の我慢比べの時ぞ」

だれもが半信半疑だった。

だが、他に方法はない。となれば言われたとおり、全員が息をひそめて待つしかなかった。

さらに四半刻（しはんとき）が流れた。

周囲が次第に明るさを増す中、吉良邸の裏門のすぐ横にある物置で、果たせるかな、かすかな物音がした。

若者が、よくよく耳を澄ませていなければ、聴き取れなかった音である。

最初に気付いたのは、間十次郎であった。

コトリという音に、思わず飛び上がりそうになった。しかし、

「ネズミかもしれぬ。しばし待て」

吉田忠左衛門の囁き（ささや）に、じっと我慢していると、やがて、ごそごそっ、という音に続き、引き戸が細く開かれたらしく、なにやら男のひそひそ話まで漏れてきた。

（ただのネズミではない。残敵だ）

十次郎は、父譲りの愛刀「政次」（二尺五寸）を握りしめると、忠左衛門の止める手

を払うようにして物置目がけて突進した。

十次郎は堀内源左衛門について学んだ直伝の剣士である。堀部安兵衛とは相弟子で、互角に戦ってきた男だ。腕に自信があった。

「なんだ、なんだ」

近くに座っていた武林唯七、矢田五郎右衛門（馬廻、百五十石、二十八歳）、さらには仏頂面（ぶっちょうづら）だった堀部安兵衛までが、無言の行に我慢できずに、のこのこ後を付いてきた。

物置の音は、ここでぴたりと止んだ。

だが、遅れをとっては〈先陣の功〉を奪われる。

十次郎は決心した。

先ほど使った細引き付の「取りかぎ」を持ってくると、いきなり、その引き戸に引っかけて、扉を引っぱがしにかかった。

仲間も一緒になって剝（は）がし作業を手伝うと、引き戸は難なく転がり落ちた。

だが、入り口が月光に対して逆光だった。奥が見にくい。

「龕燈（がんとう）を持ってこい」

十次郎が怒鳴る。

急ぎ届けられたその明かりを頼りに、さらに、物置の奥を照らした。
四畳半ほどの物置であった。
古い燭台や火鉢、あるいは炭俵などが雑然と置かれていた。
と――、その物陰から、黒い塊が三つ、いきなり飛び出してきた。
はっと思って一歩引き、身構えると、いずれも侍姿。すでに白刃を構えていた。
危うく、その切っ先を避けた十次郎と、続く武林、堀部の三人。期せずしてここに三対三の対決となった。
「面白い。こうこなくては」
と喜んだのは堀部安兵衛である。初めて刀を抜く気になったのだろう。だが、よくよく見ると、吉良の三人は、最初から剣先が震え、うわずっていた。身体が震えている証拠である。
雑魚と見た安兵衛、
「話にならぬ。おぬしらに任せるわ」
あっさり手を引いてしまった。
こうして、三対二の対決となったが、それでも相手は、十次郎と武林唯七の敵ではなかった。

ものの三、四合の斬り合いで、吉良方の三人は、あっけなく血煙となって消えた。
この相手の名前が判明するのは、後の公儀の検使でのことだが、ここで記載しておく。

清水一学（近習、七両三人扶持）
大須賀治部右衛門（同、六両）
榊原平右衛門（同、六両）

この一人清水一学は、三州三河から、出入り商人の吟味役として呼ばれた家臣に過ぎない。それでも、この一年、上野介の懇望によって懸命に剣の道を磨いた。
その唯一の報酬が、武林唯七に与えたかすり傷となった。

「しかし、もしかすると、誰か、まだ残っているのではないか？」
集まった浪士数人が、なお、薄暗い物置の奥を槍で突きまくった。
その中の一人、矢田五郎右衛門が槍で刺した菰の一突きに、ぶすっと人の肉の感触が残った。おやっと思って槍を引くと、槍先から、だらりと血が滴った。
「いたぞ、いたぞ」
矢田は、はいずりだした白い寝間着姿の相手の半身を、さらに二度、三度と、夢中

になって突いた。

遅れをとってはならじと、十次郎が、相手の顔も検めずに、その寝間着の肩を、さっと切り下ろした。

その後、槍で身体を突き刺し、そのまま表まで槍で引きずり出して相手の顔を見た。それは血しぶきを浴びてはいたが、まぎれもない老人の顔。衣類は高級な白綸子の寝間着だった。

「吉良だ！」

「間違いない」

「全員に知らせよ」

数人の鋭い合図の笛が、ここで一斉に鳴り響いた。

表門付近に座って、じっと吉良の発見を待っていた内蔵助は、笛の音が裏門あたりと知り、頬を緩めた。

立ち上がろうとしたが、寒さで膝が痺れて走りにくい。だが、そんなことは言っていられない。

内蔵助には秘かな願いがあった。しばしの間でいい。同志に頼み、生きている上野

介と二人だけで対面したい。

その上で、上野介が、亡君に、どのような軽率な言葉を浴びせたのか、上野介の口から直接聞き出したかった。だが、すべては水泡に帰した。

内蔵助が物置前に着いた時、すでに吉良上野介は事切れて、材木のように地面に転がっていた。

薄明かりに浮かぶ吉良の顔。

それは、しなびた、ただの貧相な老人に過ぎなかった。

眉間に亡君から受けたと思われる、かすかな弓形の外傷が見えた。

間違いはない。

それにしても――、

俺は、こんな老人一人を、二年近く追い回してきたのか。

なんともやりきれない、むなしさに襲われた。しかも、吉良の白綸子の寝間着の裾は乱れたまま。

前垂れのない褌をしていたのだろう。それがだらしなくはずれ、縮んだ吉良の一物が、壊れた土風鈴のように露出している。

内蔵助は、片膝ついて、そっと吉良の乱れた裾を整えた。その後、ひそかに両手を

合わせて黙礼すると、顔を上げ、ただ一言、
「御首級頂戴ぞ」
とだけ伝えた。
これ以上吉良の顔を見続けるに忍びない。
内蔵助は、後を部下にまかせ、一言も発せずに、表門へと取って返した。「えいえい、おう」という同志の勝鬨の声が上がるのを背に聞きながら、振り返りもしなかった。

だが、表門に戻ると、あたふたと堀部弥兵衛が、背の高い安兵衛を引きずるようにして追いかけてきた。
「あいや、大石氏」
なぜか、怒りの形相だ。
「なんじゃ、騒々しい」
内蔵助は、口をきくのも煩わしかったが、仕方なく堀部父子を顧みた。
「なんじゃではござらぬ。なにはともあれ……我等、まずは無事本懐を遂げたことを、素直に喜ばねばなりませぬぞ。この愚息めが、あまりにもあっけなかったの、やれ、

詰まらぬ戦いじゃったなどとぬかしおるので、なにを贅沢を申すか、二年近い、これまでの同志や残してきた妻女らの辛苦を考えてもみよと、今叱りとばしたところでござる。大石氏も大石氏じゃ。なにがご不満かは存ぜぬが、今の貴殿の態度はよくない」

「そうかな」

「痩せても枯れても、今の貴殿は勝ち戦の御大将じゃ。戦の内容などは、どうでもよいのじゃ。芝居でいえば、申し分のない千両役者じゃ」

「千両役者。この拙者がか？」

内蔵助は、弥兵衛の妙な喩えに、首をすくめた。

「さよう。千両役者じゃ。いや、そうでなくとも千両役者を演じなければなりませぬ。貴殿は、その自覚がなさ過ぎますぞ。千両役者というものはな、大石氏。その芝居の内容がどうあれ、幕引きこそが肝心じゃ。鮮やかに大見得を切って、芝居の最後を飾らねばなりませぬ」

「見得をきる？　この拙者がか」

俺には大見得は向かぬ。

内蔵助は、まだ躊躇していた。

だが、弥兵衛は許さない。

「さよう。将である貴殿までが、愚息のように、ふて腐れていてどうする。それでは、これまで苦労して随いてきた部下は立つ瀬がござらぬ。部下のことを思うて、さあ、立たっしゃれ。そして皆の前で、鮮やかな勝利宣言をなされよ。さあ、さあ。さあ、さあ」

内蔵助は、弥兵衛に促され、渋々吉良邸の南面の縁側にむかった。

すでに、けが人を含め全員が待っていた。

異様な喝采を浴びた。

弥兵衛と忠左衛門の二人の仕組んだ演出のようである。

内蔵助の姿を認めると、忠左衛門が厳かに宣言した。

「これより、大石殿から諸氏の奮闘とこれまでのご苦労に対し、一言お言葉を賜る。静粛になされよ」

内蔵助は、否応なく、即席の祝いの言葉を発する羽目になった。

「各々方」

語りかけながら、じっと同志を見回すと、全員が、固唾を呑んで自分を見つめてい

た。

どれも今は落ち着きをとりもどした素朴な目であった。自分たちの行動を、ひたすら〈忠義一筋〉と信じて疑わない。そして、そのことを、子供のように褒めて貰いたい目であった。

内蔵助は、物事を複雑に考え過ぎる自分を、少しばかり反省した。

（ならば、よし）

内蔵助は開き直った。

「我等この一年九ヶ月余。君父の讐敵と倶に天を戴かずの気概を以て心を一にし、ここに推参致した。幸い、一人の犠牲者を出すこともなく、本懐を遂げることができた。欣快これに優るものはない。各々方と共に、ここに素直に喜び合いたい。これで、泉下の亡君も、長かった我等の不忠を許して下されよう。殿の霊魂も、これにて浮かばれましょうぞ」

淡々と語った積もりだが、それでも号泣する者、さめざめと泣く者が続出した。そんな人それぞれの反応を前に、次第に内蔵助の舌もなめらかになっていく。

「顧みれば、拙者、鈍牛にして到らぬところ多き将であった。身の処し方にも清冽さを欠いていたかもしれぬ。いま改めて慚愧の念に耐えぬ思いがする。だが、そんな到

らぬ拙者を、諸氏は、よく我慢して随いてきてくれた。改めて、感謝したい。しかし、長い挨拶は疲れている諸氏に、お気の毒であろう。この位にとどめて、後は、今の拙者の心境を、ざれ歌に託して披露し、祝いの言葉に代えたい。よろしゅうござろうや」

再び拍手を受けて、内蔵助は、懐から懐紙を取り出した。

ふと、雲一つなかった満月を思い出し、即興で、さらさらと歌をしたためた。

「お聞き下され、各々方。これが拙者の今の、偽らざる心境でござる。

あら楽し　思いは晴るる身は捨つる　浮き世の月にかかる雲なし」

万雷の喝采だ。

「さすが千両役者！」

弥兵衛が、即座に半畳（からかいの言葉）を入れると、隣に立つ堀部安兵衛までが、初めて笑顔を見せた。

「さすがは粋人」

の野次も飛んだ。

「いやはや」

内蔵助は、恥ずかしさで顔が火照るのが判った。

ここで、弥兵衛が、踊るように飛び出してきた。
「武骨者の拙者にも、昨夜に続き、ざれ歌を披露させてくだされや」
こちらは、かねて用意してあったらしい。懐から懐紙を取り出すと、いきなり発句した。
「まず、上の句。品もなく」
全員がどっと笑う。
「品もなく？　でござるか」
内蔵助は、思わず訊ねた。
「さよう、品もなくじゃ」
弥兵衛は、平気だ。
「で、中句は？」
「生き過ぎたりと思いしに」
「なるほど、で、最後は？」
「今かちえたり老いの楽しみ」
「なるほど。いやはや拙者の歌より数段上じゃて。お見事！」
内蔵助は、心底からそう思った。

このあっけらかんとした素朴さがいいのだ。自分のように物事を斜め読みしてはいけないのだ。

そう思った。

ここで、さらに野次が飛んだ。

「さすが御両所」

「日本一」

同志の喝采は止まらない。

そこに、寺坂吉右衛門から、

「大石さまへ、お祝いの引き出物が参っておりまする」

との報が入った。

「何方(いずかた)からじゃ」

忠左衛門が質(ただ)すと、寺坂は浮き浮きした声で答えた。

「伏見の清酒三樽(たる)と全員のお着替え用の羽織でございます。下されたのは京の綿屋善右衛門さま」

「それはそれは、御厚志忝(かたじけ)なし」

内蔵助は、早速受納を命じた。

同志を、いつまでも返り血を浴びた薄汚れた姿のままでいさせたくない。善右衛門の差し入れは、まさに願ってもない到来物であった。

早速、桐の衣装箱を開くと、中は浅野家の紋付きの極上の羽織。それも全員の名入りである。

この中から、内蔵助は素早く毛利小平太の分を抜き去ると、笑顔で宣言した。

「各々方！　聞いてのとおりじゃ。これより我等、お色直しとしゃれた後、天下晴れて泉岳寺へのお江戸道中と参ろう」

「おう、おう」

「いざ、吉良の御首級を泉岳寺に持参し、亡君の墓前に手向けん」

「おう、おう、おう」

再び、歓声が上がった。

4

当初の計画では、ここで吉良邸の隣の無縁寺（現在の回向院）に移り小休止。頃合

いを見計らい一路泉岳寺へと向かう予定であった。
だが、無縁寺の院頭は「開門刻限にあらず」と、頑なに同志の休息を拒んだ。
「公儀のお咎めを恐れてのことでござろうか」
交渉に行った忠左衛門が、気落ちした顔で戻ってきた。
内蔵助は、少し考えた末、
「吉田氏。済まぬが、もう一度行ってお願いしてみてはくれぬか」
と、頼んだ。
「なぜ、二度までも？」
「しばし休むだけでよい。湯茶の接待などは一切ご無用に願いたい。それでも駄目かと念を押して戴きたい」
再び出掛けた忠左衛門。
「此度は、更にけんもほろろでござった」と、憤然と戻ってきた。
「そうか。やはりな」
内蔵助は、にやりと笑った。
「なんでござる。その、やはりとは？」
忠左衛門が、内蔵助の笑いを見とがめて訊いた。

「いやいや、済まぬ。実は、ふっとこう考えたのじゃ。邪推かもしれぬがな。寺の勤行は夜明け前からであろう。勤行で忙しいし、貧乏寺ゆえ我等の世話ができぬというなら話はわかる。だが開門刻限でないから困るというのは、ちとおかしくはござらぬか」

「なるほど」

「もしや、この無縁寺は、上野介が、あらかじめ、我等から襲撃を受けた時の〈駆け込み寺〉だったのではあるまいか」

上杉家が守ってくれないなら、戦い半ばで隣の寺に逃げ込むしかない。吉良はそう決めていたのではないか。これが内蔵助の考えついた推理であった。

「そう言われれば、吉良が隠れた物置は、裏門のすぐ横。そして無縁寺の入り口は、町屋一筋をへだててすぐ真向かい。それも目と鼻の先でござる。一瞬飛び込まれれば、我等とて、寺の中まで無下に追いかけることはできませぬな。そう考えると、実に危ういところでござったな」

忠左衛門は、ほっとした表情を見せた。

「全くだ。そうと知っていたら、あの物置が怪しいと最初から考えるべきだった。寒い中を、同志に長い間、安座させて済まぬことをした。まあ、これも鈍牛の後知恵と

思って勘弁してくれ」

内蔵助は、肩をすくめた。

すくめながら、戦い半ばで逃げることしか考えていなかった上野介を、むきになって探し出し、惨殺したことに、なんとなく滑稽と後ろめたさを禁じえなかった。

真新しい羽織に着替えた同志一行は、討入りに使用した弓槍、大工道具、そして京から届いた酒樽などを北側の土屋主税邸に持参し、一時預かりを依頼した。もっとも、内蔵助は、鎖帷子などの防具をはずすことは許さなかった。この後、泉岳寺までの行進中、なにが起きるかわからない。

土屋主税邸との話し合いの首尾はうまくついた。かねてから吉良を嫌い、赤穂側に好意を持っていてくれたらしい。主の主税以下全員が、喜んで品物を預かってくれたばかりでなく、酒樽は、おっつけ泉岳寺までお届け申す、とまでいってくれた。

丁重に礼を尽くして、一行は土屋邸を後にした。

次は、江戸入りのための大川渡りである。

当時、両国橋、新大橋、永代橋の三本があった。一番近いのは両国橋。しかし、こ

れは、本所方面から府内にむかう大名や旗本が主に利用する橋である。罪を犯した我等は避けなければいけない。

内蔵助は、敢えて遠い永代橋を選んだ。吉良邸からは、橋のたもとまで二十五町ほど（二千八百メートル）ある。急いで歩いても四半刻（三十分）を要する。

通常日は、永代橋の渡りぞめは六つ半（午前七時）である。一斉登城日の今日だけは、明け六つ（六時）から橋の往来が許されていた。

一行は、永代橋のたもとで朝食をとった。朝食の差し入れは、前原伊助商店と堀部道場が準備し、討入りに参加を認められなかった大石無人親子らが運んでくれたものである。

こうして橋が、朝の早い町人たちの往来でごった返すのを待った。

予想通り橋の混雑が始まった。

「有り難や。これで、あまり目立たずに永代を渡れる」と、内蔵助。

「そうですな。無縁寺に断られ、橋のたもとで様子を見ることができて、かえってよかったかもしれませぬ」

「違いない」

内蔵助と忠左衛門は負け惜しみを言って橋を渡り始めた。

この時――、堀部安兵衛が駆け寄ってきて、内蔵助に告げた。
「大石殿、ご覧下され。あれに細井広沢先生が我等を見送りに……」
「そうか、それはご丁寧なこと」
安兵衛が指さす方向をすかし見ると、およそ一町ほど先の橋の反対側に、一人の武士が、こちらにむかって丁寧に会釈していた。
（あれが細井殿か）
安兵衛の道場で会うことになっていたのに、その機会がなかったのが残念だった。
行って、例の『浅野内匠家来口上』の添削の礼をいうべきかと一瞬考えた。
だが、こちらは天下騒乱の大罪人。
ここで親しく話したことで、後々どのようなお咎めが広沢の身に及ぶか、わからない。
そう思った内蔵助は、あえて丁寧な会釈を返すにとどめた。
しかし、安兵衛には、
「そなたは構わぬ。行って厚くお礼申し上げてくれ。積もる話もあろう。ゆっくりしてくるがよい。そして後刻、泉岳寺の我等と合流せよ」
と、自由行動を許した。

さて橋を渡れば、後は御府内である。大名、旗本の屋敷が軒を連ねており、その数以上に辻番がある。

御府内では、浪人の集団行動は、たとえ平和行進であろうと一切禁じられている。事あれば、その行進のあった場所の大名、旗本に責任が及ぶ仕組みと聞いた。

辻番前を通るのは慎重を要する。

これを見越し、忠左衛門の指示が全員に飛んだ。

「この後は、かねて申し付けのとおりの組み合わせにて、三人ずつ十五組に分かれよ。組間の交流は禁ずる。お互いに知らぬ振りし、私語を慎め。各組は半町以上の間隔をあけ、ひそかに前方の集団に付いていくように」

一行は黙って頷いた。

（まだ戦いは終わっていないのだ）

再び全員に緊張が走る。

渡り終わった後の御府内の道案内は堀部弥兵衛の分担である。

忠左衛門同様、日頃から早朝散歩を心掛け、大名、旗本の屋敷前を避ける迂回路を

考えてきた。

「以後は、拙者にお任せあれ」

弥兵衛が自信満々選んだのは、永代橋を渡った後、箱崎、霊巌の二島を経て、そのまま鉄砲洲浜沿いを一路南下する迂回路であった。

日本橋、銀座などの主要な目抜き通りは一切通らない、また通れない。とすれば、当面の大名屋敷は、旧赤穂浅野家上屋敷（現在、聖路加病院など所在）だけである。浅野上屋敷は、代替わりした今も満更知らない間柄ではない。通過を黙認してくれるのではないか。

事実、この第一関門は何事もなく終わった。

続いて「寒さ橋」（明石橋）を経て築地を右折し本願寺前に到る。

本願寺前からは、本願寺橋、采女橋、木挽橋経由で新橋方向へと、ほぼ一本道である。

この途中、本願寺橋詰には広島浅野家蔵屋敷の辻番。次の采女橋詰には松平采女正屋敷の辻番がある。

内蔵助は、まず広島浅野家に、吉田忠左衛門を派して今朝の事件を口頭で伝え、

「これより浪士一同、うち揃って亡君の墓に討入り成功のご報告に参る所存。その後

は、別途幕閣にご報告を入れ、泉岳寺にて謹慎の上、すべて幕閣のご指示に従います」

との事前予告をさせた。隣地の松平采女正邸に対しても同様である。

この低姿勢が好感されたのであろう。待たされはしたものの、いずれも黙認のまま通過できた。

内蔵助はほっと胸をなで下ろす。

問題になりそうな上杉家の上屋敷（現・霞が関）、中屋敷（現・港区麻布台）、下屋敷（現・港区白金）からははるかに遠く、追手の気配もないまま、新橋に到ることができた。

新橋は、当時、塩留川（現・汐留川）に架かる橋で、下を流れる水は江戸城外濠のはけ水であった。慶長九年に、新たに架橋されたところから新橋と名付けられた。

この新橋を渡ると、そこからは東海道、つまり、天下の公道である。

いやでも目に付く。

ここで、吉田忠左衛門が、冨森助右衛門、そして自分の子飼いの寺坂吉右衛門を引き連れて、一行に別れを告げている。

吉良邸討入りの報告に、幕府大目付・仙石伯耆守（せんごくほうきのかみ）の屋敷に出頭するためである。報告と言うが、実際は犯罪の自首である。従って、出頭即捕縛され、以後、亡君の墓参はおろか、二度と同志に会えぬぐらいの悲壮な覚悟であったろう。

「この大役、余人に代え難い。すまぬが、そなたら二人しかないのだ」

内蔵助は、三拝九拝して忠左衛門らに因果を含めた。

もちろん、忠左衛門の老練、俳諧（はいかい）をよくする冨森の文才と能筆を買った、内蔵助一流の、かなり高度な政治判断であった。

この政治判断は、また寺坂の処置にも当てはまる。寺坂は、元々、忠左衛門の下僕で、忠左衛門の推薦により足軽（三両二分二人扶持（ぶち））にとりたてられた。

そうした低い身分ゆえ、討入りの直接の責めを負わせる必要はない、との暗黙の合意が、忠左衛門との間にできていた。

忠左衛門は、この後、あくまで同志と行動を共にしたい、と泣いて懇願する寺坂に因果を含め、故郷へと去らせている。

これが後世、誤解を生んで、「寺坂逃亡説」となったのは、気の毒というより他はない。

これで残った同志は四十三人（堀部安兵衛が遅れている）となった。

一行は、引き続き泉岳寺に向かって粛々と歩み続けた。

この後も弥兵衛の指導よろしく、本通りを避けて海側の脇道を選ぶ慎重な姿勢は変わらなかった。

だが脇道といっても、どうしても避けて通れない大名屋敷前が新橋から品川、そして最終の泉岳寺までの前途に、なおいくつか並んでいた。

第一が竜野脇坂家上屋敷である。

赤穂に隣接する家で、赤穂浅野家と同石高の五万三千石。隣同士のよしみで、元々は仲が良かった。

ところが、昨年の赤穂城明け渡しの際、幕府命令で、赤穂城に向け四千六百人の将兵を送り込んだ。

その時の〝進駐軍〟と〝被占領者〟のわだかまりが、両者にある。

果たして辻番は、一目、浅野の紋入りの羽織を見るなり、「待たれよ」との一言を残して奥へと消えた。

なかなか出てこなかった。

いらいらして待つ内蔵助ら一行の前に、やがて十数人の上級武士が、礼服を整えて

現れた。中には礼服を着ながら駆けてくる者もいた。
どうなることかと固唾を呑む浅野浪人たちの前で、家士たちは、突如、門前で整列した。
この間、一切無言である。
整列し終わると、一斉に頭を垂れ、手で進行方向を指し示したのである。
「お進みくだされ」
の合図であった。
呆気にとられる同志。
「嬉しゅうござるな、のう大石氏。持つべきものは、やはり良き隣人」
驚きと感激一入の弥兵衛は、すでに目を潤ませている。
「うむ」
内蔵助も感無量だ。だが、喜んでばかりもいられない。
「このあと主な大名家が二つある。次は仙台伊達家だ。こちらは、ちと難儀かもしれぬ。心しましょうぞ」
なお慎重だった。
内蔵助は、伊達家上屋敷前に来ると、口だけでなく、実際に隊列まで変えた。先頭

に三村次郎左衛門（三十六歳）、神崎与五郎（三十七歳）、茅野和助（三十六歳）の中堅組。次に、間十次郎（二十五歳）、岡嶋八十右衛門（三十七歳）、村松三太夫（二十六歳）。三組目に主税たち若者を置き、老人や怪我人を、ずっと後へと下げた。

万一の時の臨戦態勢であった。

実際、伊達家上屋敷前では、一触即発のやり取りがあった。

元々、伊達家は、幕府成立当初、独眼竜政宗が「徳川なにするものぞ」という傲岸な姿勢を取ったことから、反徳川の士風が強かった。

ところが、その後、幕府の相次ぐ弾圧を受けて屈服。晩年の政宗は、すっかり虎の牙を抜かれてしまった。

二代忠宗（政宗次男）、三代綱宗（忠宗の六男）は、父や祖父の抵抗の姿勢を、一旦は継承したものの、それも中途半端に終わり、当時の四代綱村は領国治世においては名君と言われたが、幕府への姿勢としては、将軍にひたすら媚びを売る存在でしかなかった。

それだけに、将軍への「点数稼ぎ」に何をしでかすか判らないという危険があった。

案の定、辻番は、同志一行を、ぎょろりと眺めると、いきなり、うさんくさそうに、

「その異様な風情、何事でござる。何処から来て、いずれに参られるや」
と、厳しく誰何してきた。
もう一人が、いきなり拍子木を叩いた。危険の合図である。
聞きつけた侍が十数人、ばらばらと邸内から飛び出してくる。
この時、綱村は、登城準備が整い、六十人ほどの供揃えで前庭に出たところであった。奥には、さらに三百人ほどの江戸詰め侍が、主君の見送りのために控えていた。即時戦闘に入ることが可能だった。
すわ衝突。
ここで鼻っぱしらの強い間十次郎が、予定外の行動に出た。
前に進み出ると大音声で叫んだのである。
「我等は赤穂浅野の元家臣でござる。昨夜、亡君の意趣を晴らすべく吉良邸に乗り込み本懐を遂げ、唯今、亡君の墓前に、報告のため急ぐ途中でござる。ここで留まるわけには参らぬ。事情ご賢察の上、枉げて通過すること、お許し戴きたい」
ここまでは、まだよかった。
だが、一言余計だった。
「場合によっては、たとえ少数とはいえ、刀にかけても通ってみせまするぞ」

この最後の一言で、仙台家士は、カチンときたのだろう。
「小癪な、その言いぐさ片腹痛し」とばかり、刀に手を掛けた。
そこに、屋敷内から、江戸家老と江戸留守居役が、血相変えて飛んできた。
「静まれ、愚か者。浪人相手に殿の通られる街道を汚す気か！」
と、まず家士を先に叱りつけると、間以下の浪士にむかっては、むっとした顔で、
「殿のお出ましじゃ。邪魔するな、一刻も早く立ち去れ。しっ、しっ」
まるで犬でも追うように言うと、ぷいと背を向けた。「浪人相手は、刀の汚れ」とでも言いたいらしい。
この心ない応対に、さらに、いきり立つ同志を、内蔵助は、大手を拡げて押しとどめた。
押しとどめただけではなかった。
部下に己れの両刀を預けて丸腰になると、屋敷の大門前に行き、腰を二つに折って、町人の姿勢で礼を述べたものである。
「平にご無礼仕った、仙台殿。お見逃し忝のうござる」
続く最後の屋敷は、会津保科家の中屋敷である。始祖保科正之は二代将軍秀忠の子

であり、また、かつて嗣子のないまま絶家する危機に陥った時、吉良上野介の息子を「末期養子」に仕立て、上杉家を救った過去を持っている。

その意味では、仙台伊達家とは違って、厄介な存在だった。

ここの辻番は、隣の伊達家の出来事を遠見していたから、対応は早かった。

それだけに最初から「こら待て」と大手を拡げ、一行を阻止する態度にでた。

これを望見した内蔵助は、嗣子主税に因果を含めて、挨拶に出向かせた。

主税は、内蔵助に倣って無腰となり、ゆっくり口上を述べた。

「我等、赤穂浅野の元家臣にござる。本朝、本所吉良邸に推参、吉良殿の御首級頂戴仕った。これより亡君への報告に泉岳寺に参りまする。ご隣人の仙台さまでも、ご家老さまに通行をお許し戴きました。尊家におかれても、是非、我等が意を汲まれ、通行にご理解賜らんことを、伏してお願い申し上げまする」

辻番は聞き終わると、一旦奥に消えた。再び顔を見せた時、連れ添う者は一人もなかった。

辻番は、ただ一言、

「去れ」

と言い捨てて横を向いた。

中屋敷には、殿様も江戸詰め家老もいない。責任ある回答が出来なかったのである。隣の伊達家も許したのだから、見過ごしても当家だけの罪にはならない。だから、

「辻番、おまえ一人で対応せよ」

そんな責任回避の会話が、中に居る下級武士と辻番との間で交わされたに違いない。

「忝のうござる」

うやうやしく、もう一度頭を下げて、主税が戻ってきた。

頷いた内蔵助。

「よくやった」と、抱きかかえるようにして主税を迎えた。

そこに駆けつけたのは、最後尾にいた弥兵衛である。

すでに息が切れていた。

「いやはや、仙台殿といい、保科さまといい、どうなることかと、刀の柄を握ったまま、ひやひやしておりましたぞ。それにしても、お二人とも、よくぞの我慢でござった。まさに、あっぱれの《韓信の股くぐり》。いや、嬉しや、ありがたや」

後は、滂沱の涙で言葉にならない。

内蔵助も、つい乗せられて、涙腺を熱くした。

弥兵衛の手をしっかと握りしめると、全員に聞こえるように叫んだ。

「堀部殿。よき道順を探してくれましたな。この道以外では、ここまで無事に到達することはできなかったでござろう。さればご老体。ま一度、皆の先頭に立たれよ。そして一刻も早く、亡君の御前に、吉良の御首級捧げ参らさん。さあ、さあ。さあ、さあ」

今度は、今朝方と違って、内蔵助が弥兵衛をせきたてる番であった。

内蔵助の一行は、弥兵衛を先頭に粛々たる行進を再開した。

高輪の高札場の手前半町ほどに来ると、弥兵衛は、再び全員に右折を指示した。この先にある高札場、そしてさらにその周辺の料亭や茶屋街のにぎわいを避けるためであった。

間道は狭く、およそ一町半ほど急な胸突き坂が続いた。この突き当たりが伊皿子坂につながっていた。

完全な裏道。そして伊皿子坂を左へ二町ほど下がると、その右が泉岳寺である。

「あれだ、あそこだ」

坂を下り始めたころから、同志一行は、そわそわし始め、行進の隊形が乱れた。泉岳寺の寺門が見えると、もう収拾がつかなくなった。

「それ急げや、急げ」
「殿、殿、ただ今参上仕る」
全員が口々に絶叫し、幼児のように泣き叫び、そして団子になって駆け下りて行った。

取り残されたのは内蔵助と弥兵衛の二人きりである。
内蔵助は歩みを止め、後をとぼとぼと付いてくる弥兵衛を、笑顔で待ち受けた。
（この老人が間道探ししてくれたお陰で、ここまで来られたのだ）
そんな地道な努力あったればこその今の歓喜である。
近づいてくる弥兵衛に、内蔵助の手が自然にのびた。
反射的に差し出された弥兵衛の手は、しなびて冷たかった。
「ありがたや。道案内人殿」
内蔵助は叫んだ。叫びながら、自分の胸に弥兵衛の手を差し込み、暖めようとした。
「もったいのうござる。大石氏（うじ）」
弥兵衛は、慌（あわ）てて手を引っ込めた。
「それより、大石氏の念のいったご指導と忍耐あればこその成功でござる。お礼申し

上げたきは拙者の方じゃ。恥ずかしながら、昨年までの拙者は、安兵衛共々、功を急ぐあまり、大石氏をせかせては駄々をこね、数々のご無礼を働き申した。しかし、この抜け道探しをしながら、拙者、つくづく考えましたな。なるほど、討入りは一朝一夕にできることではない。すべてを緻密に準備しなければならぬものだ、とな。改めて一同に代わり大石氏にお詫びとお礼を申す」

「いやいや、なにを申される。すべては、心を一つにしてこそできたこと。拙者一人の功ではござらぬ」

この一瞬、これまでの苦労がみな消し飛んだ。残ったのは甘美な思い出だけとなった。

「さささ、参ろう大石氏。亡君の元へ」

弥兵衛の手が、すっとのびて、内蔵助を摑んだ。

「忝ない」

内蔵助は、その手を素直に握り返す。

弥兵衛の手は、先ほどとは別人のように暖かく感じられた。

5

「赤穂浪士数十人、今暁七つ（午前四時）を期して吉良邸急襲致し候」

この第一報を知らせる堀田将監の密使が柳沢邸に走り込んだのは、十四日七つ半（十五日午前五時）過ぎである。

永代橋渡りは、明六つ（六時）からだが、幕府御用の特権で黒鍬組は通行の自由が保障されていた。

これを利用した速報である。

この時、吉保は、すでに床を離れ、髪形を整えている最中であった。

用人の佐瀬三太夫から密書を受け取り、急ぎ開いた。

当然予想された襲撃である。事件そのものに驚きはなかった。

問題は吉良が討ち果たされたかどうかであった。だが、そこまでの記述がない。

（まだ交戦中ということか。それにしても、吉良め、上杉家の援軍不在の屋敷から、よもや逃げおおせるとは思えぬが……）

一読、まず、そう思った。

吉保は知っていた。

上杉家の護衛は、今年八月、吉良上野介の実子綱憲が病に臥せると、これを機に、大潮が引くように吉良邸から去っていることを。

元々綱憲は病弱であった。

だが、この時、病に倒れたのは、父の護衛をめぐる江戸家老色部又四郎との衝突と、その苦悩の果てとの噂がある。

将監はこの噂をめぐって、次のような報告を吉保に提出していた。

「家老の色部は、かく主君に諫言なされたとのことでござる。殿が父君を想われる、ご子息としてのお気持ちは重々承知仕る。さはさりながら、ここは大江戸。将軍家御膝元にては、殿が私事で干戈をまじえる（武器をとって戦う）ことはできませぬ。孝養より幕令を最優先と心得なければなりませぬぞと」

また、こうも加えた。

「この色部の考えの背景には、元々米沢上杉家には曩祖（先祖）景勝以来の家訓として『社稷（家）を重しとし、君を軽しとする』伝統がござる。これが、私情を二の次とすべし、との家論統一につながったのではござるまいか」

また、吉良家の護衛に出されていた下級武士たちの感触についても、次のように報

告されていた。

「評判の悪い吉良のために働くことは御免蒙りたい。そんな気持ちが、当初から守護に出されていた家臣たちに充満しておりましてな。それゆえ、色部が、吉良邸詰めの要なしと、主君を押し切ると、全員が即時撤収致しました。誰一人主君の側に立つ者はなかったとのことで」

この撤収の代償が、一刻も早く吉良殿を米沢へという運動となった。

十一月、ようやく幕府の認可がおりて、来春、雪解けには、早々に吉良の米沢行きが内定していた。

まさに、この狭間を突かれた襲撃だったのである。

となると――、

吉保は考えた。

万一吉良が生き残っては、かえって煩わしい。昨年の城中の刃傷沙汰以上にやっかいになる。

（まさか大石ともあろう者が、弱体な家臣ぞろいの吉良邸を攻めあぐみ、打ち損じるとは思えぬが……）

思案しながら、吉保は、しきりに時刻を気にした。

今日は「一斉登城日」。

いつもより早めの用部屋入りをと考えていた。そのためには事件の結果を一刻も早く知りたい。

吉保は三太夫を捉まえて訊ねた。

「で、将監は、今いずれに？」

「十日ほど前から永代橋別邸にこもっており、今も配下の者共々、そこに留まっていると存じますが」

「ほう、例の遠めがね持参でな」

将監から、吉良邸の動きを探るため、永代橋に近い箱崎島にある柳沢別邸を拝借願いたいとの申し出を受けたのは、十二月始めである。

これを許すと、「併せて遠めがねをも、お貸し願いたい」と無心してきた。

「二度と手に入らぬ貴重な物ゆえ、丁重に扱え」と、もったいつけて貸し与えたのだが、まさか夜間の赤穂の討入りの状況が見えるわけはあるまい。

一体何を見たかったのか。

いずれやってきたら、真っ先に訊いてみなければと思いながら、吉保は、朝餉にむかった。

ゆっくり朝食を取る。

若いときから早飯はしない。

早飯を食うような者は大物になれない、と父に教わったせいもあるが、今日ばかりは、それでも時をもて余した。

仕方なく、庭を一周し、飼鳥に餌をやったりして時を潰した。

そろそろ待つのも限界か。

結果を待たずに登城せねばならぬが、やむを得ぬ、と覚悟を決めた時、計ったように第二報が入った。

「赤穂浪士、急襲に成功。浪士一行、吉良の首持参にて、亡君墓所、泉岳寺方面に向かいつつあり。当方は、これより双方の被害調べに入る所存にござ候」

密書を受け取った時刻は、六つ半（午前七時）。吉保の登城時刻ぎりぎりのことであった。

「あやつめ、余の登城刻限を見計らったように連絡を寄越しおるわ」

吉保は、苦笑いしながら、三太夫に申し付けた。

「次の報告は間に合わぬ。受け取り次第、そちが城中に持参せよ」

それでも、吉保が将軍の「御座之間」に隣接する「三之間」に着座したのは、朝五つ（午前八時）よりかなり前であった。

表（幕政執務所）の様子を窺ったが、老中御用部屋はもとより、溜之間（幕政の諮問機関の詰め所）、中之間（御留守居・三奉行の詰め所）は森閑として人の気配がない。

赤穂事件はまだ伝わっていないようである。それならここでじっくり構えて事件の対応を考えることができる。

「早起きは三両の得か」

吉保は、一人微笑した。

吉保の屋敷に御成りになった上さまが、女の絵草紙を読まれて、「三文」と「三両」を取り違えられたのは、一昨年のことである。

「文」などという貨幣を見たこともないのだから無理もない。

以来、吉保邸では、「早起きは三両の得」が定着している。

宿直の茶坊主が捧げ持つ薄茶をゆっくり飲むと、吉保は、「さて」と、呟いて、おもむろに筆を持った。

物をじっくり考えるときは、必ず筆を執る。そして箇条書きにするのが癖である。

もちろん考えがまとまれば、記憶にたたき込んで、後は箇条書きを破り捨てる。秘密にわたるときは火を付けて燃す。

一　上さまご報告時期の件

まず、そう書いた。

次に、その理由を思いつくまま書き連ね、その是非の検討を自問自答した。

この結論は、「今日を措いて他なし」との判断となった。

理由は、十九日から、一位さま（桂昌院）の護国寺「仏名会」の法会が始まる。そうなると、明日十六日あたりから、一位さまの大層なご準備の相談に、なにかと上さまは呼び出されるだろう。

（やはり今日中か――、それも、老中たちの先を越すには、大名の挨拶を受ける前でなければ）

決心すると、吉保は素早く先ほどの茶坊主を呼んだ。

「奥に、弥太郎めが、至急お伺いしたいと申し入れよ」

吉保が面談申し入れに「弥太郎めが」と断ったときは、「内々の重要相談」を意味

することになっている。

申し入れした後、吉保は再び筆を執って、上さまとのこれからの想定問答を書き留めた。

一　赤穂方の被害は？

二　赤穂の襲撃に対して吉良はどのように応戦したか？

三　上杉家の侍は、なぜ守護しなかったのか？

四　綱憲は、なぜ父を救いに行かなかったか？

これらを、上さまにどう説明すべきか。

親孝行第一の上さまのことである。

想定されるご下問は厳しいに違いない。これまでの諜報（ちょうほう）では、回答に自信が持てなかった。

（早くせい、将監！）

心で叫びながら、なお、ぐっと我慢して第三報を待つことさらに四半刻（しはんとき）。吉保の所に現れたのは、恐れていた中奥小姓からの伝言が先であった。

吉保は（しまった）と思った。

ところが、奥からの返事は思ってもいない内容だった。

「一位さまには、昨夜、お風邪を召された由にて、上さまは、今早朝より、三の丸にお詰めきりで、いまだお戻りでございませぬ。この分では、あるいは総登城のご挨拶開始ぎりぎりまで、中奥へのお戻りは難しいかと……」

肩の力が抜けた。

（ついている）と思った。

思わずほっと相好を崩しそうになるのを隠して吉保は返事した。

「それはそれは、上さまには、さぞかしご心痛のことでござろう。お察し申し上げますとお伝えくだされ。拙者、一刻も早くお耳にいれたき儀がござったが、それはそれ。後ほどにてよろしゅうござれば、上さまには、まずは御孝養第一に願わしゅう存じまする、と」

第三報が、駆けつけた三太夫の手から吉保に渡ったのは、中奥小姓が消えて更に四半刻後である。

報告は以下の通り。

「一つ。吉良方被害。死傷者二十数名。その他は逃亡せしものの如し。二つ。上杉方被害なし。そもそも不在であったことがこれにて裏付けられ候。三つ。赤穂方死亡者あるいは行方不明者、毛利小平太なる者一名……」

（ほう、一人いたか、まずいな）

そんな思いの所に、ひょっこり顔を出したのは、老中阿部豊後守と豊後守に伴われてやってきた大目付仙石伯耆守であった。

（来たな）

と、思った。

「一大事でござる。柳沢殿」

深刻な顔で、豊後守は吉保の顔を窺った。

吉保は、にっこり笑った。

「お待ち申し上げておりました。ささ、どうぞ奥へ」

何食わぬ顔で、自室へ請じ入れると、二人を交互に眺めながら、おもむろに言った。

「で、一大事とは如何なことで？」

6

同日夕刻。
吉保は常盤橋邸に戻ると、そのまま奥の黒書院に直行し、待たせてあった将監と懇談に入った。
「まずは楽にせい」
吉保は、将監に安座を勧めたあと、
「今朝ほどは、城中にて、そなたからの付け文（恋文）を一刻千秋の思いで待ったぞ」
と言って、にやり笑った。
「そなたの次の付け文はまだかまだかと、気が気ではなかったわい。幸いと言っては上さまに申し訳ないが、偶々一位さまご不快とのことで、早朝、上さまとの密談がかなわず、そなたの最後の付け文を入手した後の御前会議となった。これで、かろうじて面目を保った。だが、終わりよければそれでよしというものではない。付け文とい

うものは、まちっと早く寄越さねば意味がないぞ、将監」

怒ってはいない。苦笑いしながらの苦言である。

実際は、大名挨拶の儀式のあと、将軍への事件報告が老中をまじえて行われたのだが――、この時の、吉保の諜報と判断力は、自首してきた吉田忠左衛門を事情聴取した大目付報告に優るとも劣らないもので、上さまに大いに面目をほどこしたのである。

将監はそこまでは知らない。

「そうでございましたか。あれで精一杯急いだ積もりでござったが、いやいや、申し訳ござらぬ。以後、一層の迅速を心掛けまする」

と身を縮めた。

「まあ、よかろう。で、その後なにか新しい諜報があるか」

「数々ございます」

「申してみよ」

「第一に赤穂浪士の吉良邸から泉岳寺に到った道筋でござる」

「ほう、道筋がどうかしたか」

「どうかしたかではございませぬ。まっとうに歩いても、およそ三里の道。辻々の大名、旗本の屋敷前で、不審者として辻番に止めおかれれば、到底高輪までたどり着く

ことはかないませぬ。それを、見事なほど、すり抜けて無事泉岳寺へと到達しましてな。我等黒鍬者は、ここ江戸内では天下御免で表通りばかりを通行致す故、ここまでの裏道のあることを知り申さなんだ。今日は、お膝元の江戸の道を、赤穂浪士に教えられたという次第で。いやはや、大石という男、恐ろしいほど緻密な男でございましたな」

「昼あんどんは、夜と早朝は、煌々と輝くものじゃ」

「御意。殿は昨年春の事件前から、大石を買っておられましたな」

「そうじゃ。惜しい男じゃったがな」

「じゃったがな？　と申されると、大石は、即時極刑となるのでございますかな」

「いや、そうはまだ決めておらぬ」

「しかし、隠居とはいえ、幕府の要人を殺害して無罪というわけにもまいらぬと存じますが」

「そこが、こちらの苦しいところよ。実はな……近うよれ。ここからは極秘の話ゆえ」

吉保は、そっと耳打ちした。

この日の昼過ぎ――、事件報告を聞いた綱吉は、当初、怒り心頭だった。「即刻浪

士を引っ捕らえ、全員打ち首にせい」とまで激怒した。

ところが、吉良邸に差し向けた検使が吉良邸の表門から持ち帰った『浅野内匠家来口上』を手にとって読み始めると、途中から、がらりと様子が変わったのである。じっと書面を見つめたまま動かなくなり、やがて怒りも消え、言葉も失せた。

上さまの斜め下座にいた吉保は、不思議に思い、思いきって顔を上げ、そっと上さまの様子を窺った。

すると驚いたことに、上さまの玉顔から、まさかまさかの涙がこぼれていたのである。

「よくはわからぬ。だが、余には涙されているように見えたのじゃが」

「あり得ますな」

「というと、そちは、既に読んだのか？　あの口上を」

「はい。今朝、浪士の撤収を見計らって、素早く吉良邸に参上し、表門につるされていた文箱から、その口上書なる物を盗み見ましてござる」

「それで、余への付け文が遅くなったというわけか」

「いえ、違いますな。遅かったとすれば、それは、後ほど永代橋のたもとで、遠めがねで生き残った浪士の数を数えていたためでござる。それで毛利小平太なる浪士の直

前逃亡を割り出したわけで」
「直前逃亡？　討入りの犠牲者ではないのか。たしか報告ではそう書かれていたが」
「それはご訂正願います。吉良邸の死骸にそれらしき人物はなく、浪士も小平太の遺骸を泉岳寺に抱えて行った形跡はございませぬ。十三日までは確かに居りましたゆえ、直前逃亡と判断せざるを得ませぬ」
「解った。毛利なる浪士のことはそこまでよい。では、改めて訊くが、その口上書について、そちの意見はどうじゃ」
「ちらり、盗み見した程度でござる。判断はできかねまするが」
「ここに写しがある。改めて読むがいい」
「では、失礼して再度拝見仕る」

以下が、その『浅野内匠家来口上』（現代語訳）の写しである。

去年三月内匠頭儀
伝奏御馳走役を務めるに付き、吉良上野介殿への意趣を胸の内におさめておりましたところ、殿中において、その場で何としても看過できないことがあったゆえで

しょうか、刃傷に及ぶという挙に出てしまいました。時節と場所を弁えない行為は無調法極まりなく、切腹を仰せつけられ領地の赤穂城も召し上げられました。私ども家来にとっても恐れ多いことでございましたから、幕府のお使者の下知を請け入れて城と領地を差しだし、家中は早々に離散致しました。

先の喧嘩の節はご同席の中に内匠頭を抑え留めた御方があって、上野介殿を討ちとることはかないませんでした。

その内匠頭の最期の無念の心底を思うと、家来として我慢できる仕儀ではございませぬ。

高家のお歴々に対し、私ども家来が鬱憤を差し挟むことなど、憚りの多いことは存じますが、昔から申しますように、主君と父の讐は、たとえ命を捨てても討たねばならない、このことを捨て置くことはできませんので今日、上野介殿のお屋敷へ推参致しました。ひとえに亡君の意趣を継ぐ志までございます。

私どもの死後、もし御検分の方がおいでしたら、この書面を見ていただきたく、かくのごとく認めました。

以上

元禄十五年師走　日

浅野内匠頭長矩家来
大石内蔵助
（以下四十七名連名）

「どうじゃ、改めて読む感想は」
「多々ございますな。しかし、殿のように深読みできる方の前では、申し上げにくうございますな。申し上げられるのは、四十八人だったのが四十七人に減ったことぐらいで」
「それも、今はもう一人減ったぞ」
「えっ」
「寺坂なにがしという、小者のようじゃな。大方、故郷の縁者への報告要員かもしれぬ。細心な大石のこと。その位の芸当はするだろうよ」
「その者の後も追いましょうか」
「その必要はあるまい。見逃してもよかろう。では、そなたの、この口上に対する意見はそれだけか」
「そちらは殿にお任せしたく存じますが」

「遠慮は要らぬ。参考までに一つでも言ってみよ。間違ってもよい」
「では申します」
「うむ」
「第一に、冒頭の〈意趣を胸の内におさめておりましたところ〉という箇所でござる。これを読む限りでは、浅野は、やはり弥生十四日には、すでに吉良になんらかの意趣を持っていた。二人の対立は、当日のいざこざではなかったと読めますが如何で」
「そうだ、よく読んだな。意趣は以前からあったのだ。それが当日、何らかの理由で我慢できなくなった。これを読む限り、そうとしか考えられぬ。大石はそれを知っていた」
「御意」
「その意趣をろくに調べもせずに、勅使への不敬だけを理由に幕府は浅野を処断した。それなら、殿様の凶行は、ただの喧嘩にすり替えますぞ――、この口上の後段で、大石はこう我等に主張しているのだ。そして喧嘩なら両成敗が当然であり、これまでの幕府の片落ちの処断は、我々の行動で是正するしかない。去んぬる日の我等の刃は正義の刃だと言いたいのじゃろう。大石の考えにしては、ちと出来すぎのような気がするがな」

「ひょっとすると、これは細井広沢殿の執筆かもしれませぬぞ」
「なぜ、それが言える」
「拙者、細井殿が、今朝方、永代橋のたもとにて赤穂浪士の一行を見送っておられるのを、しかと目撃いたしたゆえでござる」
「そうか、さようなことがあったか。なれば話は解る。弁庵先生でなければ、仇討ちの〈父之讐〉を、何食わぬ顔で〈主君と父の讐〉などとさらりとすり替える芸当はできぬからな。ということは、やはり弁庵先生は、浪士に味方したいがために余の元を離れたということか。そして上さまは、この弁庵先生の巧みな仇討ちの拡大解釈に迷わされたのじゃな。いやはや、参ったな。これでは、余は、敵に塩を送ったどころの騒ぎではないぞ。しかし、上さまも、いくらなんでも、お涙を見せたのは余計じゃったな。大方、母上の病で気が弱くなっていたのであろうよ。あははは」
「で、どうなりましょうや。これから？」
「一騒動あろう。事は幕府の上の連中だけではない。朝廷も巻き込む大事件となろう。特に此度は、江戸の町衆が五月蠅かろうな。なにしろ退屈凌ぎにこれほど面白い事件はないからな」
「で、殿はどうなされますか」

「しばらくは様子を見る。一月か二月はかかろうな。余の仕事はその後じゃ。なにせ、そちも余も、終わりが始まりの仕事師じゃでな。うふふふふ」

「では、ご指示を待ちます」

「うむ。それまで、そちは、この事件について、江戸、大坂の一枚摺（いちまいずり）の内容を熟読しておいてくれ。そして、摺り師たちとも親しくし、よくよく手なずけておくのだ。おっと、その連中との付き合いに銭を惜しむなよ。そちらの手当は、三太夫によく申し付けておくゆえな。では、後の連絡を待っておれ。よいな」

第十四章　終わりの始まり　元禄十六年初春

1

十二月十五日巳の中刻（午前十時）。

赤穂浪士一行は、泉岳寺の浅野内匠頭の墓前に集合した。遅れていた堀部安兵衛が加わり、総員四十四名である。

この時、泉岳寺第九代酬山住持は、討入り事件報告のため寺社奉行に呼び出されて不在である。だが、内蔵助の判断で、法要は、住持の帰りを待つことなく挙行された。

いつ何時、幕府の捕縛命令が来ないとも限らない。その前に、なんとしても亡君の鎮魂だけは済ませておきたい。そんな、せっぱ詰まった気持ちが、住持の帰りを待てなくさせたのである。

また、寺の後難を考え、寺僧の読経、和讃の申し出も辞退した。

だから――、鎮魂式そのものは静かなものであった。墓前の供え物は、泉岳寺の庭の隅に咲いていた寒菊の献花に添えた吉良の首、ただ一つ。

首は血を寺の湧き水ですすぎ、白絹布に包んで三方に載せて墓石に置くと、香を焚いた。

それだけで充分だった。

全員が輪になってご主君の墓碑を囲むと、内蔵助は、おもむろに立って墓前にぬかずいた。

ふと、はす向かいに座る堀部弥兵衛を見ると、にっこり笑って、なにかしきりに目配せを送ってくる。

（また例の千両役者を演じなされ）

という意味だろう。

苦笑いした内蔵助。胸を張って叫んだ。
「見よ、各々方」
観客わずか四十数名。それも小さな内輪だけの舞台だが、一世一代の名演技で勤めあげてみせよう。
内蔵助は懐から匕首を取り出した。
万一、吉良を討ち損じた時の自害用にと、肌身離さず持ち歩いた秘刀である。
「これなるは、拙者若年のころ、殿より賜わりし宝刀」
内蔵助は、前口上よろしく、匕首の白鞘を天に掲げ、さっと払った。
と、次の一瞬、天空を一閃した白刃は、三方の上の吉良の首に刃を向けて、その首根っこに寸分の狂いもなく置かれていた。
（腕は、まだなまっていない）
久しぶりに見せる東軍流の居合術であった。
「お見事！　千両役者！」
あちこちから声がかかった。
だが、内蔵助に笑顔はない。いや、笑みを圧し殺していた。
再び、墓前に座った。

次に叫んだ内蔵助の声は、一転、亡君への悲痛な呼びかけに変わっていた。

「殿、殿。ご照覧あれ」

天を仰ぐ内蔵助の眼から一筋の涙が頬を伝った。

「元禄十五年師走十五日、ただ今、臣大石良雄ら四十余名、謹んで亡君の霊に告げ奉る。尊君におかれては、昨年弥生十四日、吉良上野刃傷に及びしも、障りこれありて御本意を遂げ給わず、あまつさえ片落ちの御沙汰を受く。爾後、我等家臣、尊君が無念を想い、臍を噬みて一日三秋。時節を待ちおりしに、漸くにして昨夜半、上野介が館に押し入りて、尊君が遺恨を果たし参り候。よって請い願わん。ここに拙者がふるうヒ首の刃を以て、尊君には、彼の日果たせなかった恨みを癒やし給わんことを。臣良雄らここに謹みて言上仕る」

言い終わると、内蔵助は再び立ち上がり、天に向かって叫んだ。

「いざご覧候らえ」

続いて、左手に、むんずと三方の吉良の首級をわしづかみするや、右手のヒ首で首級の頭を、これでもか、とばかりに三度激しく叩いたのである。

その後、再び香を焚き、二礼して静かに振り返る。

「各々方。我等は、今は亡国の臣でござる。されば、これからの焼香は、昔の位階に

関わりなく進めるべし、と拙者存念致す。よって、此度の最初の焼香の栄誉は、隠れていた吉良の発見者であり、最初の一刃を吉良に振るわれた間十次郎氏とするが至当と存ずる。問氏、いざ前へ」

内蔵助は、遠慮する十次郎の背を押し出すようにして焼香させた。

「次いで、道案内人殿。貴殿のお陰で、我等ここにこられたのじゃ。いざこれにでられませ」

やんやの拍手の中、内蔵助は、堀部弥兵衛の手を取って、肩を組むようにして墓前に導いた。

「次は吉田忠左衛門殿。ただし、目下、大目付殿に出頭されてご不在なれば、拙者代わってご焼香いたす」

後は、列順のままであった。

しかし、焼香半ばで、同志らの歓喜と嗚咽は最高潮に達した。

感激屋の片岡、大高らは、焼香だけでは高ぶる気持ちを抑えることができなかったのであろう。

香が終わっても、なお元の輪に戻ろうとせず、そのまま「殿、殿」と絶叫したまま、主君の墓石にむしゃぶりついていた。後は幼児のような慟哭の洪水となった。

二人の慟哭は、堰を切った水のように、大きなうねりとなって全員を包んだ。
「よかった、よかった」
「これにて本望」
「後は死んでも悔いることなし」
あちこちで、誰彼なく抱きあい、むせび泣き、幾つもの新しい輪となって、その号泣は、内匠頭の霊に届けとばかりに天空に木霊した。
全員の焼香が、なんとか終わりを告げたのは昼過ぎであった。

内蔵助は、自分も目を真っ赤にはらしながら、浪士たちの慟哭と狂喜乱舞の収まるのを待っていた。
（幕府が、この後どう出てくるかだ）
頭にちらつくのはこれだ。どちらにしても、機敏に対応しなければならない。それには、まず腹ごしらえが必要だ。
僧坊で訊ねると、幸い、泉岳寺には百五十人ほどの修行僧がおり、広い衆寮が完備しているという。
それなら、四十人程度の昼食の用意には事欠かないだろう。

内蔵助の依頼が飛ぶと、在住の修行僧は、事情を知って、進んで好意的に動いてくれた。

（助かる。昼食程度の協力なら、寺の罪は軽かろう）

直ちに修行僧の好意に甘えることに決めた。

土屋主税に預けた伏見の酒樽が届いたのは、この頃である。

歓喜の声を上げる浪士たち。

だが、内蔵助は、酒はほんの「献杯程度」にとどめるよう全員に指示し、自らは一滴も口にしなかった。

間もなく幕府の使者がやって来る。いささかでも酒気を帯びて対応した、などと言われたくなかった。

唯一、堀部安兵衛だけが例外だった。この男は、墓前の焼香を済ませた後は、さっさと一人本堂にこもり、亡君の位牌の前に座ったまま、食事にも顔を出さなかった。

どこからせしめたのか、一升徳利を股ぐらに抱き、ぐいぐいと浴びるように酒を呑んでは泣いている。

そんな報告が内蔵助の耳に入った。

それを聞いて、叱りに行こうとする義父の弥兵衛を、内蔵助はそっと押しとどめた。

「まあ、そっとしておいておやりなされ。仲間と一緒に泣きたい者もおれば、殿を偲んで、一人だけで泣きたい者もあろう。のう、親爺殿」

安兵衛を除けば、鎮魂式後の浪士たちは到って陽気だった。

快舟という寺僧が、「生憎、寺のことで酒の肴がありませぬが」と恐縮すると、浪士たちは破顔一笑して叫んだ。

「いやいや肴はある。これ、この通りじゃ」

墓前から持ち帰った吉良の首を、寺の茶壺に入れ替え、血だらけの手で、どんと食台の上に据えた――、という逸話が残っている。

大目付仙石伯耆守から、御目付阿部式部と数人の御徒目付がやってきたのは、この昼食の最中である。

浪士一同が、一転、緊張する中、内蔵助は、黙って一人立つと、方丈の一室へと急いだ。

切腹の覚悟はできている。恐いものはない。

内蔵助は、恭順の意を表するため、最初から下座、それも丸腰で対応した。ところが、意外なことに相手は更に低姿勢で、言葉まで馬鹿丁寧だった。

対面はこんな会話で始まった。

「前赤穂浅野家筆頭家老・大石内蔵助殿とお見受け致すが」

「いかにも、拙者が大石でござる」

「お初にお目にかかる。拙者、阿部式部と申す幕府目付役でござる。以後、お見知りおき願いたい」

「丁重なご挨拶、痛み入ります」

「今日は、役目柄、質したき儀が一、二ござれば、不躾承知で参上いたした。差し支えござるまいか」

「なんのなんの。如何ようなことでも、喜んでお答え申し上げましょう」

（大分風向きが違うな）

と思いながら、内蔵助は、そんなことはおくびにも出さない。

式部は、この後、漸く本題に入った。

「いや、他でもござらぬ。実は貴殿が吉良邸に差し置かれた書付の件じゃが」

「書付？　ああ、あの門前に吊した口上書でござるな」

「さよう。その口上書によれば、貴殿らご一党は、四十七人とあるが」
「確かに。で、それが？」
「こちらには、今何人おられましょうや」
「四十四人でござる。もっとも一人は風邪気味で臥せっておりますが」
点呼でもされたら困る。一瞬の判断で、内蔵助は、安兵衛を風邪引きの病人に仕立てた。
「今朝早く、手前どもに参られたのは吉田、冨森のご両所。ということは、こちらと併せて四十六人。お一人足りませぬがな？」
「ああ、その事でござるか」
内蔵助は、ほっとした。疑惑は安兵衛でもない。毛利小平太でもなかった。それなら話は早い。
「足りぬのは、同志の一人、寺坂なる者でござる。この者は、昨夜、途中から欠落いたしましてな」
「欠落？　怪我でもなされたかな」
「いや、よくわかりませぬが、どうやら脱走したらしゅうござるな」
努めて淡々と述べた。

「ほう、それは異な事。貴殿の厳しきご統率の下で、そのような者が居たとは信じられませぬが……」

皮肉ではない。真摯な目が覗いていた。

「いや、人の心の中までは拙者解せませぬ。操ることもできませぬ。昨夜吉良邸に参るところまでは一緒でござった。だが、どさくさにまぎれて見えなくなりましてな。しかし、寺坂は、もともとは吉田忠左衛門に仕える又者でござった。最初から、同志に入れることすら疑義がござったが、案の定、いざとなって臆病風にでも吹かれたのでござろう。このような者を加えたことは、拙者の短慮でござった。まっこと面目もござらぬ」

内蔵助は、そっと式部の反応を確かめながら平伏した。

忠左衛門との話し合いで寺坂を故郷に帰したと言えば「呼び戻せ」と言われるのではないか。

それより、いっそのこと「逃亡」とした方が、説明に手間がかからないし、むしろ安全と思った。

それに――、我々は、間違いなく、いずれかで切腹を命じられるだろう。一人ぐらい事件の目撃者をこの世に残すことが、事件の「語り部」として必要なのではないか。

これも忠左衛門との暗黙の合意であった。

まさか、小者の寺坂一人に、大袈裟に追っ手まではかけまい。

そんな不安は、式部の次の言葉で霧散した。

「そうでござったか。いや、そのような男なら、特に問題とする積もりはござらぬ」

式部は、あっさりと引いた。単なる員数合わせだ、と言いたいらしい。

内蔵助は、拍子抜けした。

「で、他にはなにか？」

「いや、特にはござらぬ」

式部は、にこにこ笑っている。

「実は貴殿にお目にかかりたいばかりに回り道して参上した次第でござれば、こうしてお話しできて、小職は無上の光栄でござる。ついては、我等はこれより、吉良屋敷の状況吟味に参るが、ご一党には、いずれ幕閣からのご沙汰あるまで、ここ泉岳寺でご休息いただきたい」

外に軍勢を待機させた、体のいい一時監禁かもしれぬ。が、それも仕方あるまい。

「かしこまりました。で、およそのところ、次のご指示はいつごろでござりましょうや。実は、同志の者は、昨夜来、一睡もしておりませぬ。この間、午睡したい者もお

りましょう。お呼び出しの時、ご無礼があってはなりませぬゆえ、念のためお訊ねするのでござるが」

「なるほど。事情は解り申す。が、いつごろかと言われても、そればかりは老中さま方のなされる事。拙者としては、なんともお答えできかねますな。ひょっとして、夜分遅くか、さもなくば明日の早朝か」

式部は、ここでくすりと笑った。

暗に〈老中評議は小田原評定〉だと言いたいらしい。

「解り申した」

今度は内蔵助が、あっさり引き下がる番だった。

「ま、かようなわけでござれば、評定が決まり次第、当方からお知らせ申すでござろう。その節は、愛宕下の仙石邸までご足労願うことになりましょうな。ここからは、一里足らずでござる。道順は、寺の者はよく存じておるでな」

式部は、初めて気の毒そうな顔をしたが、内蔵助には、式部の好意ある言葉が有り難かった。

目付衆が帰ると、入れ替わりのように酬山住持が寺社奉行報告から戻ってきた。以

後夕刻、大目付からの呼び出しがかかるまで、ということで、寺としての正式な粥と般若湯の接待を受けた。この時、四十四人で三斗樽の酒を空にしたという記録がある。が、これはやや誇大であろう。

万一の上杉の襲撃を考え、この後も、内蔵助は一滴も酒を呑まなかった。年少の嗣子主税、そして大石瀬左衛門ら十人ほどの下戸者は、この間、瞬時も警戒の目を緩めなかったろう。そんな人数を差し引けば、一人一升近い量になってしまう。

到底信じがたい飲酒量である。

だが、数字はともかく、酒を豪快に呑みながら、浪士たちは、いまや遅しと、己が運命を待っていたことは確かである。

2

一方、こちら江戸城内――。

赤穂事件への幕閣の対応策の検討は、十五日の総登城の直後、中食抜きで江戸城・奥紅葉之間で開始された。

ここで打ち出された緊急措置は、以下の四点である。措置は決まり次第、順次実行

に移されている。

日頃の幕閣の行動としては異例なほどの速さであった。

第一　吉良邸への検使派遣

目付・阿部式部と杉田五左衛門を発令した。二人は九人の下役とともに直ちに本所松坂町に飛んでいる。式部だけが、泉岳寺に寄り道したのであろう。

この検使の結果、当夜の被害状況が判明した。

吉良側被害：吉良上野介の他、側近の死亡者十五人。同負傷者十三人

赤穂側被害：死亡者なし。軽傷者若干名

赤穂方の（後の）吉良側殺傷報告の方が、幕府の被害者調査よりやや多い。これは戦果を誇るというより、過大な吉良方の応戦を申し立てて、自分たちの苦難と正義を強調したいという赤穂側の心情から出たことであろう。俗説が多数の上杉援軍の存在を匂わせるのも、その後の赤穂浪士のお預け中の自慢話を、一枚摺の書き手がさらに膨らませて宣伝したせいである。

ましてや、吉良邸が頑強に補強され、まるで鉄壁の砦だったなどというのは、噴飯物の巷談である。

なお、検分の終わった後、検使二人は吉良の嗣子義周の訊問を行い、「吉良義周陳弁録」を作成している。

これによれば、義周は、

「薙刀で戦い、二、三合渡り合ったが、右額に傷を受け、出血多量のため、目が開けなくなり、やむなく奥に退いた。が、その場で昏倒してしまった」

と陳弁したという。

赤穂側の義周の相手は不明である。従って、この義周の陳述には傍証がない。だが、傷は、たしかに額の右、右手上膊に二箇所あり、かなりの出血があったことと検案書は認めている。

文官である義周としては、これでも精一杯抵抗した方であろう。しかし、幕府の大方の意見は、義周の戦い半ばの脱落を「やむなし」とせず「卑怯」と見た。

義周にとっては気の毒という他はない。

第二　米沢上杉家への公儀示達

上杉家の縁者である高家畠山下総守義寧を派遣し、「上杉家は、たとえ父の仇といえども、一兵たりとも繰り出すこと、まかりならぬ」旨を早々に示達した。病床の綱憲にとって、これは昨夜、父の救援に行かれなかった無念の上塗りの屈辱であったろう。

第三　江戸市中の警備強化

町奉行を通じて、自身番の警備の強化を示達。神社仏閣ならびに大名は「屋根に遠見の見張りを立て、夜間は門毎に高張提灯を掲げること」が指示された。赤穂事件に便乗した市中の連鎖騒乱を恐れての措置であった。

第四　赤穂浪士の処置

幕閣の意見は、当初、赤穂浪士の暴挙に怒っていた将軍綱吉が『浅野内匠家来口上』を読んだ後、一転、同情的になったことを重く見た。

慎重論が支配的であった。

「珍しい忠義の者共のことでござれば、一時、大名に御預けの上、充分な詮議を行い、その上で処分あってしかるべし」

そんな、日和見の結論から、次の応急処置が決まった。

その一
大石以下を諸家にお預けとする。大石以下を即刻、大目付仙石の役宅に召して、この決議を伝達すべし。

その二
お預け先は、細川越中守（熊本）、水野監物（岡崎）、毛利甲斐守（長府）、松平隠岐守（松山）の四家とする。

以上の赤穂浪士の処置は、早々に決まったが、受け入れる四家の受け入れ許諾（請書）を徴するのに、夕刻暗くなるまで手間どっている。

この間――陽が西に沈むすこし前――の泉岳寺でのこと。ちょっとした事件がある。

一人の修行僧が、たそがれ時の間隙を縫うように、内蔵助に結び文を届けてきた。

内蔵助が開くと、

「ぼぜんにて、おめもじを」

と、美しい女手（仮名文字）が現れた。

内蔵助は、瞬時に、それが瑤泉院からの使者と悟った。

瑤泉院には、討入り直前に、お預かりした資金の使途明細をお届けしたが、その後、連絡がとれずに気になっていたところであった。

そっと、酒宴中の同志に気付かれぬよう、方丈を抜け出すと、内蔵助は浅野家墓前へと急いだ。

果たして、暮れなずむ墓前に待っていたのは、紫縮緬を角裁ちした被り物で顔を隠した女性。年のころは三十過ぎの年増であった。

内蔵助が、近づいて深々と一礼すると、女の方から先に声をかけた。

「主人の言付けにて、ご無礼を承知でお呼び出し申し上げました。お許しくだされ」

女は、まず、鈴のような声で、丁寧に詫びた。

「一向に。して、御台さまは如何お過ごしで」と内蔵助。

つくづく酒を慎んでいてよかったと思った。でなければ、ここで恥を掻くところだった。

女は続けた。

「主人は、お陰さまにてご息災にございます。そして、まず申しまするに、わらわは、お預けの身。他出もかない申さず、代参にて失礼仕りますとのこと。次いで、私め

には、大石さまに、かくお伝えするよう、申し渡されました」

「謹んで承りましょう」

「主人は申しました。此度、よくぞ事を成就して下された。大きな声では申せぬが、これに優る喜びはございませぬと。そして、皆様の、これまでのご辛苦に心からお礼申し上げます、とのご伝言でございます」

「まことでござるか」

敬愛する瑤泉院の言葉に、内蔵助は、目頭が熱くなった。

かろうじてこらえながら言った。

「勿体なきお言葉。今日、事を成し遂げられしは、ひとえに亡き殿に見守られしお陰、神仏のお力添えあればこそでござる。我等、顧みるに、みな微力者ばかりでござった。それゆえ、復讐に時がかかり過ぎました。お礼とお詫びを申し上げたきは、こちらの方でございます。このご報告を御台さまに、直接お目通りの上申し上げられませぬは、この内蔵助、かえすがえすも口惜しいと、お伝えくだされませ」

嘘ではなかった。今考えれば、十二月五日の討入り決行が十四日に延びたのも亡君のお陰かもしれない。

五日は曇天。月も雪もなかった。

この日決行していたら、到底昨夜のようにうまくは事が運ばなかっただろう。
そんな積もる話を、昨年のあの茶室で、瑤泉院さまと二人きりでお話ししたかったのだが……。
しかし、ここで内蔵助を呼ぶ遠い声が聞こえた。幕府からの使いの呼び出しであろう。
急ぎ戻らねばならない。
「目付からの呼び出しでござる。では、役人に見とがめられませぬように、急ぎ立ち帰りませ。拙者も、これにて失礼仕る。御免！」
振り切るように、きびすを返した内蔵助。本堂に取って返すと、待っていたのは、徒目付石川弥市右衛門、同役市野新八郎、同役松永小八郎と八人の下役であった。
昼間の式部と違い、石川は、幕府の権威を笠に、横柄な態度で内蔵助に告げた。
「大石内蔵助か。謹慎中、どこをうろついていたのじゃ。けしからぬ」
「ご無礼仕った。ちと、厠に籠もって奮闘中でござった。年のせいか、便秘がちでしてな」
さらりと、また咄嗟の嘘が出た。

「ではやむを得ぬ。さて、大石内蔵助以下四十四名。これより打ち揃って速やかに大目付仙石伯耆守愛宕下の役宅に出頭すべし。解ったか」

「へ、へっ」

「ついては、ご上意承りの請書を差し出すように」

「請書、でござるか？」

大目付の上意ならば、それは一方的なものである。上意に請書を差し出すというのも奇妙だ。

だが、相手はあくまで、「つべこべ言わず書いて出せ」と言うばかり。

仕方なく、内蔵助は訊ねた。

「で、なんとお書きすればよろしいので。拙者、田舎者にて、その辺りの作法、心得ませぬが」

と下手に出た。

「俺の言葉どおりじゃ。『大石以下打ち揃って罷り越し候』と書け」

「承知仕りました」

〈泣く子と地頭には勝てぬ〉

とは、こういうことを言うのであろう。一同、四十四人は、ぶつぶつ言いながら同

文の次に血判署名した。

3

この夜、同志が打ち揃って泉岳寺を出たのは宵五つ（午後八時）過ぎである。内蔵助は、徒目付への腹いせに、全員示しあわせて、討入りの時と同じ戦闘衣装を着ることにした。

驚いたのは石川であった。

「やや、何じゃ、その姿格好は。我等に刃向かう気か」

これでは、屈強な武士団に、幕府の役人が連行されているような格好に見えて具合がわるい、とでも思ったのであろう。

だが、内蔵助は、ここでもまた、しゃあしゃあと答えた。

「只今（ただいま）、上杉勢が大挙して屋敷を出た、との諜報（ちょうほう）が入りましてな。ひょっとすると、大目付さまの屋敷に向かう途中で、上杉の兵と一戦交えねばならぬやも知れませぬ。その節は、貴殿にも、応分のご加勢のほど、お願い申し上げまする」

もちろん出任せである。

だが、石川は顔色を変えて「では急がねば」と、先頭に走り去った。以後、あきらかに行進の歩速が早くなった。狼狽したせいである。内蔵助は、堀部弥兵衛と顔を見合わせ、そっと肩をすくめて呟いた。「度し難きは小役人じゃな」

一行の仙石邸到着は戌の下刻（午後九時）である。もちろん途中何事も起きなかった。

仙石伯耆守久尚は二人の目付と下僚下役を従え、今か今かと待機していた。ここで留め置かれていた吉田（忠左衛門）、富森（助右衛門）を加え、総勢四十六名は、直ちに仙石家大広間へと通された。そして思ってもみなかった、以下の四家への「分散お預け措置」を知らされたのである。

細川越中守（外様大守）お預け―大石（内蔵）、吉田（忠）、堀部（弥）ら十七名
松平隠岐守（徳川一門）お預け―大石（主税）、堀部（安）、大高ら十名
毛利甲斐守（外様分家）お預け―小野寺（幸）、前原、間（新六）ら十名
水野監物（譜代）お預け―間瀬（孫）、矢頭、神崎ら九名

大目付の処分命令を聞いた内蔵助。
一瞬、耳を疑った。
だが――、「ご命令、謹んで承りましてございます」と、即座に受諾を表明してみせた。
何故の延命か、理由はわからない。
だからといって、こちらから訊くわけにもいかない。ままよ、どうせマナ板の上に置かれた身である。いっそのこと、鯉になった心境で、静かに待つしかあるまい。
そう思って開き直った。同志たちも同様だった。中には昼からの深酒で、座ったままいびきをかいて、眠っていた剛の者もいた。

浪士たちの冷静さと対照的だったのは、浪士のお預かりを命令された四家の方である。
当初は、どう処遇すべきかに、ひどく迷ったようである。だが、この中で、細川越中守綱利の「家を挙げての歓迎」の決断が一番早かった。恐らく老中に手を回して、将軍が『浅野内匠家来口上』に、いたく同情的であった、という内情を知った上のこ

とであろう。

まず領主命令で、十七人分の新しい高級衣服が運び込まれ、内蔵助たちは、討入り当時の汗くさい着衣を脱がされた。

着替えが済むと、次に浪士受け取りの総責任者となった江戸家老三宅藤兵衛が、丁重に挨拶に参上。

そして、待つほどもなく、あっと驚く大部隊と乗物が到着した。

動員された武士の数は八百七十人。細川家江戸在住の武士は、ほとんど総出に近い。

この大部隊が細川家の白金屋敷への浪士の移送の警護に当たったのである。もちろん、仮想敵は上杉家である。途中で、浪士を奪取でもされれば、家の面目にかかわると思ったのであろう。

浪士の乗物も異常だった。

十七人は、これまで乗ったこともない大名駕籠に乗せられた。

（もしや夢を見ているのではあるまいか）と、若い磯貝、矢田、大石（瀬）らは思ったに違いない。

行列は、浪士の駕籠一挺ごとに、

細川家の定紋を付けた高張提灯二張

次に箱提灯二張
次に騎馬に乗った上士二人
そして浪士の乗る駕籠
この左右に徒歩の士と足軽十人
が従った。

他の三家もこれに倣った。
各々が、預かり数に見合う駕籠を浪士たちに提供し、数百人規模の護衛兵が囲んで守った。
この夜の護衛兵は、四家総数千六百人との記録がある。
しかし、引き取った後の浪士の扱いは、細川家と他の三家では雲泥の差があった。
細川家の場合は、この夜、下屋敷の表門から丁重に浪士の駕籠を請じ入れ、越中守も上屋敷からやってきて、直々玄関で迎えるという念の入れようだった。
すでに時刻は、十五日の夜中過ぎであったが、浪士の前に、直ちに黒塗りの膳に二汁五菜の本膳料理が運ばれた。
食事が終わると早速の湯浴び。

湯浴びの後は、更に新しい小袖と寝具が用意されていた。

そして浪士の居室は二間続きの「上の間」に内蔵助以下堀部弥兵衛、吉田忠左衛門ら九名。

二間続きの「下の間」に奥田（孫）、潮田、近松ら八名が割り当てられた。

松山以下の三家は、こういうわけにはいかなかった。特に徳川一門の伊予松平家に収容された大石主税、堀部安兵衛、大高源五、木村岡右衛門（四十五歳）らは、とんだ貧乏くじを引かされた。

屋敷入りには、裏門の傍小門を通らされ、到着後は、「明衣」という、物忌みの時に着る着物を着せられ、狭い小屋同然の部屋に押し込められた。浪士たちには、追いかけるように切腹命令が届くと思ったのであろう。

毛利家の扱いも似たり寄ったりであった。

この二家が、浪士への姿勢と処遇を改め、細川家の扱いに倣うのは、これから二十日も後の、正月五日からである。

岡崎水野家の場合は、もう少し早かった。六日後の二十一日、水野監物忠之自ら浪士九人と接見し、「忠義なる若者たちよ」と、ねぎらいの言葉を掛けてから、処遇が、

がらりと変わった。

いずれにせよ、四家の赤穂浪士への対応には一貫性がなかったということである。それというのも、各家の姿勢が、将軍綱吉の顔色を窺うだけの日和見だったからに他ならない。

4

師走十六日。

細川家は、この日から一段と赤穂浪士の歓待に力を入れている。

まず接待役堀内伝右衛門の他に、家老坂崎忠左衛門と使番二名、留守居役三名、側用人六名、小姓四名、大目付、組脇各一名、合計十九名の「大接伴団」が任命され、これに専属の薬師（医者）まで加えた。

浪士の夜具は殿様用と同じ最高級品。寝間着、小袖は、これも高級品を各人二揃えずつ。足袋は小鉤付の上物を二足宛て給した。

昼間の読書には、書籍の取り寄せは自由。書見ばかりか囲碁、将棋も勝手。必要な

ら、接伴団が、いつでもお相手した。
もっとも、赤穂事件を報じる町の「一枚摺（いちまいずり）」は、内容が物議を醸（かも）すことを恐れて目に触れさせなかった。

食事は特に豪勢だった。
毎食二汁五菜、昼と三時には茶菓子がでた。夜は「薬酒」の名目で酒を好きなだけふるまった。
美食家の内蔵助でも少々うんざりするほどの飽食に、最初に悲鳴を上げたのは堀部、吉田、原といった老人たちであった。
「なんとか堀内殿にお願いして減らしていただけぬか」
菜の数と量が多すぎて困るというのである。
当時の武士は、病気でもない限り、食物の食べ残しは礼儀作法として許されなかったから、厚遇は嬉（うれ）しいが、これでは腹が張ってしょうがない。
せめて、汁椀（しるわん）は一つ、それに、ごはんは玄米、これに小さなイワシ一匹と漬物少々。
その位で老人の我等は充分というわけである。
内蔵助は、そのままを接待役の堀内に伝えた。

「勘考致すでござろう」と、堀内は愛想よく答えたが、その後も一向に変化がない。再度申し入れると堀内は済まなそうな顔で言った。

「二汁五菜は、殿の強いご意向でござれば、菜の数は減らせませぬ。量目をいくらか減らしますれば、それにてご容赦ねがいたい」

ところが、その量目も目立つほどには減らなかったのである。いつ何時、殿様の「電撃視察」がないとも限らない。「そなたら、なにをケチるか」と怒鳴られたら接待役を罷免される。

殿様の目に付くほどの量目を減らすわけにもいかなかったのである。

そんな〈笑えぬ喜劇〉の中――。

内蔵助は、日がな一日、部屋でごろごろと無為の時を過ごした。

元々寒がりだったせいもある。

昼間は炬燵に入ったまま。思い出したように、ちびちびと酒を呑み、後は、うたた寝ばかりして暮らした。

夜分、火気を断たれた後は、瑤泉院さまから戴いた帛紗頭巾を頭から被って、早々と寝布団にもぐって震えていた。

吉良への復讐が終わった途端に、燃え尽きたように身体の張りを失った。けじめもなくなり、「昼行灯」の復活となった。

同志が、この間、せっせと家族や子供たちに手紙を書く中で、内蔵助が書いた手紙は、わずかに次の一通に過ぎない。それも、相手は瑤泉院の用人落合与左衛門。あくまで義理の手紙である。

一筆啓上申し上げます。

まずもって瑤泉院さまにはますますご機嫌よくあらせられますこと、恐悦に存じます。あなた様も、いよいよご無事にお勤めのことと拝察いたします。

この間の書状にて、去る冬お約束申しました帳面、書付など一箱、お送りいたしましたが、きっとご覧下さったことと存じます。おついでの節、よろしく（瑤泉院さまに）お取りなしをお願い申し上げます。

その節、同志の者どもの書付を認め申しましたが、その後両人（注＝毛利、寺坂を指す）が立ち退きました。元来軽率の徒ではありましたが、今に至ってこうした仕儀となったのは、不届至極に存じます。

私どもは、かねての所存の通り、亡君のお憤りを静め申すべく、また代々の重恩

に対したてまつるため、同志申し合わせて上野介殿へ打込み申しました。江戸に滞留中、昼夜心を尽くしてきましたところ、武運に適い、思いのほかよろしき首尾となりまして、右の通りとなりました。ついに、つつがなく本望を遂げることができたと、大変喜んでおります。

吉良の屋敷に差し置いて参りました口上書（の写し）一通、認め申しました。私どもの死後、ご沙汰があるだろうと思いますが、この書状に同封しておきます。これによって人数もおわかりになると思います。

（中略）

もはやあなた様のご意見を伺う機会もなく、お名残多いことに存じます。書状はご覧ののち、火中になさって下さい。

恐惶謹言

師走十九日　　大石内蔵助

落合与左衛門様

もう一通、京の薬師寺井玄渓にも二十四日に手紙を出したが、これは原、小野寺（十）との連署で、実際は署名だけである。

この他は本も読まず、囲碁、将棋にも手を触れなかった。
（もはや俺は用なし人間よ）
時折、部屋の連子窓から外を覗いては、自嘲し、ため息をついた。
わずかに残った好奇心は、あの討入りの時から続く疑問、
「なぜ吉良邸に上杉の兵が一兵もいなかったのか」
それともう一つ。
毛利小平太が、なぜ討入り前日になって突然消えたのか。これも心の片隅にひっかかる疑惑だった。
しかし、それ以外は全く関心が湧かないのである。

そんな内蔵助の物憂い様子を心配したのであろう。細川家接待役・堀内伝右衛門が一計を案じた。
閲覧が禁止されている町中の「一枚摺」を秘かに取り寄せては内蔵助だけに見せてくれた。
それによって、屋敷の外の世界では、大衆が、寄ると触ると、赤穂浪士の壮挙を絶賛していることが判った。その中には、

「浪士一党は、いずれ四家から助命嘆願がでる。これを容れて、幕府は浪士を四家にお遣わしになる」

「いや、近々諸大名に再配分し、そのまま永の御預けになる」

「いやいや、さにあらず。一旦は流罪の罰を受けさせる。が、三、四年のちに、いずれ特赦で許される時期を見計らって釈放されよう」

予測される特赦は、綱吉の母桂昌院。今年七十六歳だから、いつ、その死があってもおかしくない。その時が最大の機会である云々。

そんな、訳知りの、しかし綱吉にとっては、実にけしからぬ噂にピリピリした町奉行が「赤穂浪人がことにつき、噂話まかりならぬ」との厳達を出した等々。

こんな耳よりな話で、内蔵助を慰めようとしたのである。

だが内蔵助は、「御厚志忝なし」と口で言うだけで、その後も一枚摺を手に取ろうともしなかった。

（他家に行って、またぞろあの退屈な宮仕えなど――、二度としたくはないわい。早く決着を付けてくれ）

そんな気持ちだった。

5

十二月二十三日。

幕府側に新たな動きがあった。

かねて、幕閣から赤穂事件に関する意見具申を求められていた評定衆十四名（寺社奉行三、大目付四、町奉行三、勘定奉行四）の連名の答申書が提出されたのである。

以下の答申（箇条書きに要約）は、この日、老中列座の下で手交されたものである。

第一　吉良義周は討入り当夜、自らを処断すべきだったが、それをしなかった。よって切腹が相当と考えます。

第二　その他吉良家家来の内、当日赤穂浪士に立ち合わなかった者は打ち首が当然と考えます。その節、多少なりとも働き、手負いとなった者は親類お預け。小者、仲間の類は追放に処すべきものと考えます。

第三　内匠頭家来は、内匠頭の志を継ぎ、命を捨て吉良上野介宅に押し込み上野介を討ち取ったこと、まことにあっぱれな忠義であります。

さらに、次のような注目すべき意見まで付け足している。

幕府の定める御条目の、文武・忠孝に励み、礼儀を正しくせよとの趣旨に適合すると考えます。

かつまた、多数が申し合わせて武防具を着用・持参して吉良邸に侵入したわけですが、それを躊躇（ちゅうちょ）しては目的を遂げることはできなかったためで、この方法は合法と思います。

御条目では徒党を組み団結を約することは禁止されております。しかし、内匠頭の家来の場合、徒党の事実があったとしても、それは昨年内匠頭が切腹申し付けられ、城と領地を召し上げられた時、すこし思うところもあったやに思われるので、御条目の禁止には抵触（ていしょく）しないと思います。

この度のやり方は、一堂に集結せねば本意を遂げることができぬことで、やむを得ず大勢申し合わせたことであり、徒党とは言えないと思います。

若手役人の意見は、吉良側に極めて過酷。赤穂側に異常に寛大であった。しかし、これが当時の江戸界隈の世論であった。

江戸の住民は、四十七士を「武士の鑑」と絶賛し、浪士の行動を、「我々江戸中の手柄」だと、自分のことのように喜んだのである。

このような江戸町民の無責任な噂とは別に、刃傷の現場を知る幕府下僚たちが、突如内匠頭の「存念」という名の亡霊を復活させたことは、幕閣を酷く慌てさせた。

老中筆頭・阿部豊後守もその一人であった。

6

「明朝辰の下刻（午前九時）、内々にて面談を得たく。豊後」

そんな伝言を柳沢吉保が自邸で受け取ったのは、二十三日の夜遅くのことであった。

相手は豊後こと老中筆頭・阿部豊後守正武（武蔵国忍城主。十万石）。延宝九年（天和元

年＝一六八一）から二十年以上に亘って老中を務める苦労人である。

時刻を見計らって城中「三之間」の自室を出た吉保は、余裕を持って指定された「時計之間」に臨んだ。

豊後守は齢五十四歳。吉保より九歳年上である。特にこれといった才はないが、人当たりがよく腰が低い。

吉保が「時計之間」に顔を出した時は、すでに先に来て待っていた。

「これは、これは、遅れて申し訳ござらぬ」

吉保は恐縮した。

「なんの、拙者の方が、すこし早すぎただけでござるよ。急なこととて、ご多忙のところをご足労かけて、お詫び申し上げるはこちらの方でござる。ささ、いざこれへ」

指さされたのは、時計之間に置かれている南蛮渡りの丸机。そして、その横に、向き合うように椅子が二脚置かれている。

吉保は思わず苦笑いした。

理由がある。この机と椅子の配置は、吉保が豊後守と密談する時だけに使う特別な形として工夫したものであった。爾来、どちらの呼びかけの時も、この形を踏襲した。

この形だと、席の上下が曖昧になる。「御側用人」と「筆頭老中」とは、どちらが

役席として上位か。

そんなことでお互いに気を使わなくて済むからである。

「時計之間」詰めの茶坊主も、心得たもので、丸机の上に薄茶と干菓子を置くと、無言で去った。

二人だけになると、豊後守は、やおら懐から厚めな書類を取り出して、机の上に並べた。

「評定衆の例の意見書でござるな。漸く出ましたか」

赤穂浪士の最終処置をどうするかについて、上さまからは、早々に意見を出すようにと、老中に御下問が出ている。その度に、老中は「目下若手の意見を徴しておりますれば」と答えて、一日延ばしにしてきた。

「さよう。昨日のこと、漸くに提出されました。これで困っておる」

「そんな難儀物でござったか。では老中方へのよきご意見にはならぬではござりませぬか」

吉保は笑いをこらえ言った。

「まあそんなところで。そこでお力を貸していただきたく参った次第でござるよ」

「では、一読させて下され」

日頃は側用人の自分を「煙たい目」で見るくせに、難問にぶつかると、なにかと相談に乗ってくれと言ってくる虫のいいところがある。

だが、吉保は我慢して読んだ。

第一、第二の「吉良の嗣子と部下に対する処置」については、異論がなかった。豊後守を悩ます問題が三つ目の答申である「内匠頭家来の処置」にあることは、すぐ解った。

吉良側には、切腹、打ち首、さらに追放まで、具体的な処置が書いてあるのに、赤穂側には、回りくどい妙な論旨を並べるだけで、具体的処置への言及がない。

しかし、その前に、吉保には、この若手の所論で質さねばならないところがあると思った。当然老中方は、この点の議論をした筈だ。

「まず、評定衆の所論で、阿部さまにお聞きしたき点が一点ござるが」

吉保は、じっと豊後守の顔を見据えて言った。

彫りの深い端正な顔だが、最近は、さざ波のような小皺が深い彫りに押し寄せて、彫りを一層たるませ、年齢以上に老け込ませて見える。

「さて、なんでござろう」

豊後守は、とぼけたように聞き返した。

「この意見書は、最後の所に、昨年内匠頭に切腹を命じた折、〈すこし思うところもあったやに思われるので〉とありますが、これは如何なる意味でござろうや」

「どれどれ、どこでござるな」

豊後守は、ここで慌てて懐を探った。日頃、神君家康公と同じ型の「べっこう縁の眼鏡」を自慢して離さない男である。

それが、書類の吟味という大事な時に、眼鏡を探すのは、即答を避けようとする見え見えの逃げであろう。

とぼけているのか、知っていて触れたくないところがあるのだ。

こんな男を相手に議論するのは御免だ。吉保は、ここで決めつけた。

「では、拙者から口頭で申す。よろしゅうございますな」

「承りましょう」

観念したらしい。意外と神妙な顔で豊後守は答えた。

「昨年春のことゆえ、豊後守殿もご記憶でござろう。当時、確かに内匠頭は、刃傷沙汰の取り調べの過程で、なにやら吉良殿に対して存念あるいは遺恨のようなものをお

持ちのようだった。だが、拙者が、その内容を明らかにせよ、と目付衆を通じて命じたにもかかわらず、内匠頭は、内容を明かさぬまま切腹なされた。よって、それは今日も解らず仕舞いでござる。以上の点、よろしゅうございますな」

「承知仕った」

豊後守は渋い表情で答えた。

「なれば、この所論は、その解らない〈存念〉なるものを前面に押し立てて、赤穂衆の徒党は、幕府御条目に反するものではないと言っているように読めますな。お気づきでしたかな。ほれここでござるよ」

吉保は、意見書をめくり、その箇所を指さした。

「どれどれ」

豊後守は、ようやく出した眼鏡で、ちらりと吉保の指した箇所を眺めた。ただそれだけ、表情に変化はない。

狸親爺（たぬきおやじ）めと思った。

「如何（いかが）か。おかしくはござらぬか」

吉保は迫った。

「そうご指摘を受ければそのようでござるな」

「これは、あたかも、有名茶人の箱書きがあれば、中の器も見せずに、茶器を買えというに似てはおりませぬかな」

我ながら、上手い喩えがひょいと浮かんだものだと思った。

そこを何故若手と議論せぬ、と吉保は言いたかった。だが、そこまで言ってしまっては、老中をコケにすることになる。

「では、どうすればよろしかろう」

豊後守は、眼鏡をはずして大事そうに仕舞った。急に喉がかすれてしまったのか、だみ声に聞こえた。

「さればでござるよ。そこを、ま一度、若手と議論されて、この所論を書き直させるか。それができぬなら、老中方としては、この若手の意見を無視するしかございませぬな」

「とは申せ、老中のみでは、はかばかしい結論は……」

「期しがたいと仰せか」

「いや、そうまでは申さぬが」

豊後守は、やや、むっとした顔になった。

ここで、怒らせてはいけない。

吉保は、声を和らげて言った。

「ご老中方が、どうしてもお困りなら、拙者、配下の諮問団の学者筋から、この件に関して、改めて意見を徴し、老中方に提出することも、やぶさかではござらぬ。しかし、それではあまりに差し出がましいと思うて遠慮しておりましたが」

「で、どのようなご意見となりましょうや」

「さて、そればかりは、これからのことでござれば、なんとも解りませぬな。それに学者は、なかなか気むずかしゅうて拙者ごとき素人の言うことは聞きませぬゆえ、どうなるか」

吉保は、はぐらかした。

が、すでに家臣の荻生徂徠からは意見書が上がっていた。これを出す時を待っていただけである。

「しかし、方向ぐらいは解らぬと」

豊後守は、不安そうに食い下がった。

吉保はさらりと、これをかわした。

「それは言うまでもございませぬ。義は義なり、法は法なり。しかし、それが両立せぬ時は、義を以て法を犯してはなりませぬ。義は私であり、法は公でござる。この使

い分けが法の番人である我等の辛い勤めでござる」
「わかり申した。では、よしなに意見書の提出をお願いいたしましょう」
「それは、老中さま方の総意と理解してよろしゅうござるか」
豊後守の個人的な参考意見ではない。もっと重いものとして受け取ってもらわねばならない。
「もちろんでござる。老中筆頭として、老中を代表し、公にお願いするものでござる」
「心得ました。早速に部下に命じますれば、年内には提出できましょうほどに、しばらくお待ちくだされ」
豊後守が、いそいそと帰る背中を見送りながら吉保は「うまくいった」とほくそ笑んだ。
赤穂浪士は、吉良上野介という「古い朝廷交渉人」を消してくれた恩人である。だが恩は恩。これ以上生かしておいては、内匠頭の「存念」という亡霊が、いつ幕朝間に浮かんでくるかも判らない。
（泣いて馬謖を斬らねばならぬ）
吉保の心はすでに決まっていた。

7

江戸は赤穂浪士の処遇問題で沸騰した。

若手役人たちの浪士宥恕（助けること）論に強力な援護者が現れたのである。室鳩巣。この他にも浪士の復讐事件当時から、林鳳岡（儒学者、大学頭）、伊藤東涯（儒者伊藤仁斎の嗣子）ら赤穂浪士に対する同情論は多かったが、その多くは口頭意見や浪士を讃える詩文に過ぎなかった。

ちなみに、東涯作の長詩『義士行』の出だしは次のようである。

一片の義気蓋壊（天と地）の間
白虹日を貫き（天が人の誠意に感動した時、白い虹を出すという故事）気神の如し
碧血（忠誠心のあらわれ）千年磨して弥々明らかなり
誰か識る而今目撃の真（を）

美辞を連ねるだけで内容がない。

これに対して、鳩巣が、初めて浪士を「義人」と呼び、『赤穂義人録』という書を書き始めると宣言したのである。

もっとも、この完成は元禄十六年十月。すでに浪士処分の決着はついていたが、この題名の通り、浪士の行動を素朴に義挙と褒めちぎるものであった。

しかし、吉保が満を持して放った部下の意見書。それは荻生徂徠こと荻生惣右衛門の次の一文であった。

重要な箇所なので、敢えて原文を生かして、ここに掲げておく。

義は己を潔くするの道にして、法は天下の規矩（のっとるべき法則）なり。

礼を以て心を制し、義を以て事を制す。

今四十六士其の主の為に讐（仇）を報ずるは、是れ侍たる者の恥を知るなり。

（このことは）己を潔くする道にして、其の事は義なりと雖も、其の党（集団）に限ることなれば、畢竟（つまるところ）は私の論なり。

其のゆゑんのものは、元是長矩殿中を憚らず、其の罪に処せられしを、又候吉良氏を以て仇を為し、公儀の免許（お許し）もなきに騒動を企つる事、法において許さ

ざる所なり。

今四十六士の罪を決せしめ、侍の礼を以て切腹に処せらるるものならば、上杉家の願ひも空しからずして、彼らが忠義を軽んぜざるの道理、尤も公論と云ふべし。

もし私論を以て公論を害せば、此以後天下の法は立つべからず。

荻生惣右衛門

前面に「法治主義」を打ち出した画期的な主張で、「義は私事に過ぎない」と、ばっさり切り捨てている。

義は、たとえ如何に勇ましく、また美しく見えても、そもそもが、個人の、あるいは一部の集団の、情の世界のことであり、これをもって法の判断をゆがめてはならない、という法絶対論の展開であった。

従って、そもそも浅野内匠頭の殿中の行動は、江戸城中に定める法において許されざることであり、罰せられて当然であった。これを逆恨みし、私怨を果たした部下も――私事としての美学の有無は別として――法においては許されるべきことではない。

よって、その行動は、武士ということで最大譲歩しても「切腹」までであるという結論になる。

翻って、上杉家が、法を守り私闘を遠慮したのは、法の命ずるところであり道理に適うものであった。

卑怯でも臆病でもない。赤穂浪士を切腹させることで、上杉家の納得も得られるであろう。

この明快な論旨の前にすべての論客は屈した。

注目していいのは、「浪士同情論」の論客・林大学頭は、将軍綱吉が引き立てた儒学者であり、今も湯島聖堂の堂主である。これに対して荻生惣右衛門は、吉保の家来、幕府にとっては、一介の「又者」に過ぎない。

にもかかわらず、幕府は、この又者の論理に屈したという事実である。

最初の浪士有罪への潮流は、十二月二十二日、すでに現れていた。幕府が浪士全員に「親類書」の提出を求めたのである。

これは不法行為で逮捕した者を罪人と断定する時、その累の及ぶ親子、兄弟、従兄弟、親戚関係の範囲を定めるもので、間接的に浪士の有罪を推測させることになる。

ただ、この段階では、「念のため」の書類提出だったであろう。

それが二十三日の評定衆の意見書提出でぐらついた。そして更に翌二十四日の吉保

側の反論で、またまた再逆転したのである。

8

幕閣の間で、自分たちの事件について、そんな大揺れの議論が行われていることは、細川家預かりの内蔵助ら一行は露知らない。

しかし、知ったとしても、何の心の動揺もなかったであろう。

十二月二十二日。

接待役・堀内伝右衛門が、幕府命令で「親類書」の提出を求められたことを恐る恐る告げた時、十七人の同志は、お互いに頷き合い、むしろ、ほっとした表情を見せたのである。

真っ先に吉田忠左衛門が言ってのけた。

「やれやれ、これで、拙者の皺腹も切腹できる程度の太めで、無事終わりそうじゃな」

これで一座の緊張が解けた。

「全くだ。これ以上長引いたら狸腹になるところじゃったで」
と、堀部弥兵衛が受け、こちらは腹までさすって笑ってみせた。
内蔵助は、そこまでは他人事のように無表情だった。
これを見た二人、
「それにしても、大石殿は、我等と一緒に、あれだけ食しても太らぬとは不思議じゃ。なんぞ秘策があったのでござろうや」
と、文句をつけた。
内蔵助は苦笑しながら告白した。
「実はな、拙者、適当な間隔で下剤を使っては腹のものを出し続けておりましたのじゃ」
「なんと！」
老人二人は、
「そういう手があったのか。それを早く教えてくだされればよかったものを。なんと大石殿のいけずなことよ」
頬を膨らませてわざとむくれてみせ、そして三人、顔を見合わせて大笑した。

そんな和気藹々の「親類書」提出の受諾であった。
だが、実際書き出すと、数ある親類となれば名前が中々浮かばない。
「はてな、あの子息は、なんという名前であったか、弱ったな、弱ったぞ」
の大合唱となった。

そんな混乱のうちに年が改まった。
その頃、内蔵助に一人の来訪者があった。京・近衛家の用人進藤筑後守である。
「おお、これはこれは、珍客の到来じゃ」
内蔵助は小躍りした。あれこれ訊ねたいことが山ほどある。
細川家に頼み込むと、近衛家の用人ということで、二つ返事で黒書院の特別室を用意してくれた。
特注の酒肴を前に、二人は久方ぶりの再会を喜びあった。
宴半ばにくると「時に……」と、筑後守は盃をおき、急に真顔になった。
「大石殿は、山科の頃貴殿の家にいた可留というおなごのこと、覚えておいでか」
「忘れはせぬ」
ほろ苦い思い出である。

「その女が、子をなしたことは」
「それも風の便りに聞いた」
誰にも言わぬが、東下りに連れてきた子飼いの仲間の一人に、可留に渡すようにと、十両の金子を預けて帰国させている。
「では、そのおなごが、女忍びだったことは」
「薄々は感じておった。が、忍びの女なら子をなさぬ筈とも思うたが」
「確かに。女忍びは、遊女以上に、その点は用心深い。なにやら妊らぬ術も持っているやに聞いたこともあるが」
「それがどうして拙者の子をなしたのであろうな」
「解らぬか」
「解らぬ」
「大石殿に惚れたからよ。そのため忍びの女としての禁制を犯したのじゃな」
「そうか」
「そうかはなかろう。この艶福者め」
「そう責めるな」
「ではもう一つ訊ねる。可留はどこぞの女忍びだったか、存じてか」

「さて、それが一向に解らぬままじゃった」
「上杉よ」
「やはりそうか」
「可留を連れてきた小山源五右衛門殿から、可留の身の上相談のお鉢が拙者に回ってきてな。三人の話の中で、可留が告白した。そして、驚いたことに可留の妹、これも女忍びじゃが、こちらは本所松坂町の吉良邸で侍女をしていたのだ」
「ほう」内蔵助は呆気にとられ、言葉が続かない。
「まだ驚くのは早いぞ」
筑後守は、にやりと笑った。
「実はな。その妹が浪士の一人に惚れてな」
「誰じゃ」
「毛利小平太という名だと聞いた」
「な、なんだと！」
さらに衝撃だった。
「そして、二人は手に手を取って逐電したらしいな。なんでも吉良上野殿は昨年の夏過ぎから、屋敷の者をすべて三河出身の者だけに固めたそうな。その調べが進んで、

事件の直前に身元の嘘がばれた。そこで手に手を取ってということになったらしいのじゃ」

「そうか。それでやっと呑み込めた」

「毛利としては、その侍女を籠絡し、諜報の道具にしてきたのかもしれぬ。しかし、途中から本気になってしまったようじゃな。よほどの相性だったのであろう」

「ということは、やはり小平太は二股諜者だったのか」

「知ってか」

「小平太は、討入り前日に消えたのじゃ。二股諜者でなければ考えられぬことと思っていたのでな」

「だが、安心されよ。二股のように見せかけて、毛利はあくまで浅野側のために働いた。肉を切らせて骨を切ったのじゃな」

「というと？」

「吉良側に偽の諜報を与え続けた。襲撃に参加する赤穂浪士の数は、せいぜいが十人程度。それで困っていると、女を通じて伝えた」

「ほう」

「なぜ集まらぬか。それには貴殿が絡んでいる。大石は放蕩に身を持ち崩し、部下は

大石に愛想を尽かしてちりぢりになってしまった。この諜報には姉の可留も絡んでおる。貴殿は山科に籠もって討入り計画書を書いたそうじゃが」

「確かに」

「その反古紙に、貴殿は、人が足りぬ、人が足りぬ、部下が皆逃げてしまって困っておると再三こぼしていたそうじゃな。貴殿のことだ、わざと書いて見せたのであろうが」

「まあ、そんなところじゃ。諜者ということは判っておったでな」

「それに乗せられたのじゃ、可留は。ということで、この諜報戦の殊勲は毛利小平太と大石殿の二人ということになりそうじゃな。いやはや、お見事であったな」

「いや、身を捨てて偽諜報をまき散らした小平太の殊勲よ。拙者はあくまで脇役。それに拙者が遊女と遊んだのは敵を欺くためではない。己れの好色よ、業よ」

内蔵助は自嘲した。

「しかし、結果は殊勲じゃ。運のいい男よな、そなたは」

「運か。そうかもしれぬ。なにやら面はゆいがな。で、小平太はその後どうしておるのかな」

「それは口が裂けても言えぬと可留は申す。拙者もこれ以上は追及せぬこととした」

「そうか、では拙者もそうしよう」
「そうそう、もう一つ伝えたいことがある」
「言ってくれ」
「こちらの方が父親としての貴殿にとって大事かもしれぬ」
「父親？　というと、主税がことか」
「そうじゃ。そなた島原の夕顔を通して、主税殿をまことの男にしてやってくれと頼んだそうじゃな」
「ああ、あれか」
「あれか、ではない。夕顔は真面目にそれを受け止めた。同輩を頼み、嫌がる主税殿を招き寄せて、立派にお役目を果たした。苦労したらしいぞ。京を出る前に夕顔に、そう是非伝言を、と頼まれた」
「いやがったか、主税は」
内蔵助は苦笑した。
子は父と反対の性格になるらしい。
くそまじめな父と祖父の元で俺は好色になった。その好色な父を嫌って主税は、女嫌いになったのか。

「そう聞いた。そうした手練手管には上手い筈じゃがな。遊女は」
「そういう事情に通じているということは、筑後守殿は今も島原通いされておるということか」
「まあ、そんなところよ。しかし、大石殿に、妙な里心が起きてもいかぬ。話はここまでにしようぞ」
「そうか。主税が女嫌いだったことだけが意外だったが、まあいい。これで、細川邸にとどめられて以来心にわだかまっていたことがすべて消え申した。よき冥土への土産になったわい。では、達者で暮らしてくだされ。そして冥土には、できるだけゆっくり参ることじゃな」
「心得た。名残惜しいがこれで」

9

二月に入り、幕議の模様が細川綱利を通じて伝わるようになった。これ以上隠しておけなくなったのであろう。
二月二日。

切腹間近と知った内蔵助は、最後の心残りとなった細井広沢への礼と報告の手紙を認めた。

ここで初めて、討入り当日、吉良邸に上杉の援軍がいなかった事実を明らかにしている。

進藤筑後守から得た諜報で、すべてが納得できたのである。手紙の中の俳句に託した内蔵助の自嘲の心境が特に興味深い。

――拝啓、まず旧冬は御厚志にあずかりました。お蔭で同志揃って吉良邸に討入り、手向かう家来は切り捨て、吉良殿を討って本意を得ました。御首は泉岳寺に持参し、亡君の墓前に供えて、昨年春以来の鬱憤を晴らすことができ喜んでおります。

――その節、上杉からの援軍はなく、用意していった半弓その他の武器は役立たずでした。あまりのおかしさに一句、〈覚悟した程にはぬれぬ時雨かな〉と詠みました。

（中略）

――我々十七人は細川侯屋敷にあって、日々ご馳走ずくめで有り難き幸せにございます。近いうちに罪状も発表されることと、ひたすら待っております。武運に叶ったことでもあり、今は本望この上なしと思っております。

（以下略）

如月（二月）二日

大石内蔵助（花押）

細井次郎太夫様

そして二月四日。

最後の日が来た。幕府から荒木十左衛門が上使として派遣され、内蔵助に切腹を申し渡したのである。

内蔵助は答えた。

「如何ようの重科にも処せらるべきところ、よく切腹仰せ付けられ有り難き仕合わせに存じまする」

このさわやかな返事を聞いた十左衛門は、思わず上段から駆け下りて、内蔵助の耳元で小声で囁いた。

「これは拙者一存にて話しおく。吉良左兵衛（義周）は、この度の仕方不届きにつき、領地御召し上げの上、今日、諏訪安芸守へ永の御預けと相成った」

こちらもお家断絶ということだ。

この大石最後の日に、遅ればせながら幕府は吉良家の処分をしたのであった。これで浅野、吉良両家の処分は全く均等。片落ちでなくなったのである。

内蔵助は、

「さても本懐の至りにござる」

と礼を述べ、他の十六人にも、この旨を耳打ちした。

この後、細川家からは接待係の宮村団之進、長瀬助之進が進み出て、主君が助命運動を続けたが、残念ながらその嘆願は受け入れられなかった旨を告げた。

内蔵助はにっこり笑って、

「ご主君のお気持ちだけで充分でござる。それより旧年来の手厚い御取り扱い、深く御礼申し上げる。なにとぞ御前に宜しくお伝えくだされ」

と述べた。

それでも接待係としては、なにか物足りなかったのであろう。

最後に重ねて「御遺言を」と訊ねてきた。

内蔵助は苦笑して答えている。

「拙者の養子に大西坊覚運と申す者が城州（山城国）八幡におります。この者に快く死についた旨を聞かせられたい。次男の許へ通ずるよう御伝言を――」

ただこれだけであった。

他の同志のように、特段の辞世も、気の利いた言葉も残さなかった。

討入り後、終わりの始まりとなった退屈な人生に終止符が打てる。

それだけで充分だったのである。

同日七つ（午後四時）。

内蔵助以下十七人の切腹は細川邸の下屋敷大書院前の広庭で、粛々と執行された。

他の三家（松平隠岐守、毛利甲斐守、水野監物）の邸に分散預かりとなっていた総員二十九人も同時並行で刑が執行された。

終章　民に知らしむべからず　元禄十六年如月

「無事終わったか」
「終わりましてございます」
「切腹の場所はいずれであったか？」
「殿のお見立て通り、細川家下屋敷は大書院の前庭でございました。大石は、最後まで屋内での切腹に同意しなかったようで……」
「さもあろう」
柳沢吉保は、ぽつんとそれだけ言うと、手許の茶碗を取った。
対する男は堀田将監。
柳沢常盤橋屋敷の茶室でのことである。

「そなたも一服せい」
相手の将監にも勧めながら、吉保は茶を口に含んだ。
（幕臣としては、大石の心情に共感するわけにはいかない――）
だが、それでは心が痛む。
茶が苦かった。
急いで、菓子皿の羊羹を一切れ、口に放り込むと、ようやく苦みが消えた。
「大石の切腹の時、越中殿はどうしておられたかな」
気を紛らそうとした好奇心が、ふと、そう言わせた。
「越中守さまは、大書院の真ん中に襖を立てて、一人籠もられ、そっと庭の切腹の光景をのぞき見されていたようで――」
将監の放った忍びの侍女からの報告であろうか。
「直視に耐えなかったか、あるいは一人涙したか」
吉保は、くっくっと小さく笑った。

細川越中守は、浅野家家老大石内蔵助を〈お預かり〉することになった昨年十二月、

「無上の光栄に存じます」
と舞い上がり、同部屋はおろか他の末座の大名たちの所まで出掛けて行っては触れ歩いた。
以後、浪士たちの助命嘆願に奔走し、「大石殿を細川家に召し抱える場合、禄高は如何ほどがよろしかろうか」などと先走った相談を持ち込んで、老中連中を顰蹙させた。
意に反して、切腹と決まった後は、さすがに一時気落ちしたらしい。
が、それでも思い直したのか、今度は、大石の切腹する部屋は「末代までも記念に保存する所存」と公言してきた男である。
それが庭先での切腹の執行となったのは、将監の言うとおり、大石の抵抗に違いなかろう。
主君浅野内匠頭が理不尽に庭先で切腹させられたのに、自分たち家臣が、どうして、おめおめと室内で切腹できよう。
大石なら、幕府への〈面当て〉にそう考えるに違いない。
（まだ、一昨年の田村邸の庭先での切腹事件が祟っているのだ）
吉保は、腹立たしさに、軽く舌打ちした。

だが、将監は、呑んだ茶が苦くなかったらしい。そのまま屈託なく呟いた。
「これで事件は一件落着。我等の仕事も終わりでございますな」
「いやいや」
吉保は、強く頭を振った。
「そんなことはない」
「と申されると、ここから、なにかございましょうか」
「例の《神君の密書》の件もある」
「ああ、あれは――」
将監は頭を掻いた。
その後、進展がないのは、この態度で明白だった。
「別件だからと言って放置されては困る。上さまは公務繁多の折りだが、いつ何時、この件について、余にご下問が飛ぶやもしれぬでな」
「聞くだけで身が縮みまする」
将監は大袈裟に肩を震わせた。
「余は身を縮めるだけでは済まぬ身じゃ。それに、余自身、此度の吉良の事件と広島

城から消えた密書は、どこかで結びついていると信じている。なぜか解るか」
「いえ」
将監は、ばつが悪そうに目をそらした。
「教えてとらせようか」
「是非に」
将監は慌てて平伏した。
「まずは己れの身に起きた事件として考えてみることだな。ある日、お預かりしている城の小天守から幕府の命運を左右するような恐ろしい書面が、ひょんなことで転げ出たとしようか。だが、我等には到底幕府を転覆させる力はない。また、そんな大それた気もない。かといって〈恐れながら、かくかくの書面が城中某所から出て参りましたので献上いたします〉と幕府に差し出せるかどうか」
「難しゅうございますな」
「なぜそう思う」
「それでは、昔、広島城を捜索した大目付さまやその配下、あるいは特命捜査を命じられた伊賀の服部一族の面目が、まる潰れとなりまする」
「そうだ、面目まる潰れよ。となれば、それも出来まい。また、そんな書面の存在を

知っただけでも、下手すれば口封じの難にあう恐れがでる。となると、そちならどうする」

吉保は、にやりと笑った。

「拙者なら隠しますな」

「そうだろう。余も隠すな。問題は、その隠し場所だ。思案に余れば、誰か信頼の置ける者に相談するが、そなたはどうだ」

「同じでござる」

「では、浅野本家の場合、その相談相手は誰か」

「さて、拙者には雲の上のことゆえそこまでは察しかねますが」

「逃げるか。では代わって余が言う。時期的に見て、英明をもって鳴る浅野長直以外には、相談相手は考えられまい。つまり、此度の事件の張本人は、長矩（ながのり）の祖父じゃ。こうして《神君の密書》は、赤穂（あこう）浅野家と結びつくと余は考える。浅野本家は、密書そのものの処置を赤穂浅野に押しつけたに違いない」

「なるほど。ということは、殿は、この件の調べとしては、先々代の殿長直さまの過去とその周辺を洗えと仰（おっしゃ）るわけですな」

「そうだ。長直の親しかった知人、僧侶（そうりょ）、茶人、あるいはその当時目を掛けていた出

入りの商人まで。そこに焦点を絞って、もう一度洗い直してみることだ。案外な手がかりが摑めるかもしれぬぞ」

「承知仕りました。では早速に」

将監は立ち上がりかけた。

「待て待て。慌てるでない。今は赤穂事件の処置が先じゃ」

「しかし、なにか赤穂事件に関して、拙者の仕事が残っておりましょうや」

「残っているどころではない。ここからが、余とそちの仕事の始まりじゃ。〈終わりの始まり〉というべきだな」

「ほう、終わりの始まり。面白うござりますな」

将監は、座り直した。

とはいうものの、納得している顔ではない。

無理もなかった。

この二年あまり、将監は赤穂事件にかかり切りだった。大石の切腹で憑きものが落ちたように拍子抜けしたのだろう。

だが、それは許さない。

「将監。明日からは、町の一枚摺はすべて注意深く目を通せ。そして気のついたとこ

ろは、余に切り抜いて見せよ。恐らく、今日の大石らの切腹で、一段と町民の話柄（わへい）（話の種）に弾みがつくだろう。だが、これを放置しておくと、この事件は幕府と朝廷との間に、なにか妙な〈しこり〉があったせいではと、勘ぐる者が出てこよう」

「大いにありえますな。事実――」

「しこりがあったではないか、と言いたいのか」

吉保は、きっと将監を睨（にら）んだ。

「恐れながら」

将監は身を縮めて、わざとらしく平伏した。吉保の言うことに抵抗したい時の将監の癖である。

「そなたらしゅうもないことを言うでないぞ」

吉保は、わざと厳しい口調でたしなめた後、一転、しんみりと言い聞かせた。

「上に立つ者はな、将監」

「はい」

「こと天下のためとあれば、たとえカラスでも、白サギと言わねばならぬこともある」

「面白いたとえでございますが、それは、いかなる天下事でございましょうか」

「またとぼけおって――、そこまで余に言わせる気か」
吉保は苦笑混じりに皮肉った。
だが、将監は、またも、さらりと逃げた。
「差し出がましゅうはございますが、後学のためにお教え戴きたく存じまする。なにしろ手前、浅学の身でござれば」
不敵な笑いで誤魔化す。
「都合のいい浅学じゃの。耳学問では、余より数段上の癖に、よう言うわい。だが、そなたには、今後とも納得ずくで、もう一働きしてもらわねばならぬ。やむを得ぬ。余の本心を語ろう。もちろん他言無用ぞ」
「心得ております」
「実はな、此度の赤穂事件がことで拙者の元を去った細井広沢から教えられたことなのだが――」
吉保は、注意深く言葉を選びながら語り始めた。
「あれは一昨年春。浅野内匠頭が刃傷沙汰を起こす直前のことだったと記憶する。余は、密かに長崎に派していた広沢の帰りを待って、一夕、駒籠の六義館に誘い、天下の成り行きにつき教えを乞うた。この時、広沢は切々と余に説いたものだ。『この国

が、今のまま南蛮の文明の取り入れを怠っていれば、我等は彼ら紅毛人に遥かに遅れをとり、いずれは取り返しのつかぬことになりますぞ』と」

この時の長崎探訪で、広沢はオランダ人に案内され、来訪中の大船の内部とその備える大筒（大砲）、そして、その火薬の威力を聞かされたのである。

「相手の船長は、村夫子然とした広沢を、外面だけで軽く見たのであろう。あるいは、つい自国の自慢をしたかったのかもしれぬ。洗いざらい大船の性能や大筒の威力について、喋ったようだ。ところが、広沢は、知ってのとおり、肩書をどう付けたらよいかに苦労するほどの才人だ。武芸百般から鉄炮、火術、測量に到るまで多芸多才。一を聞けば十、いや、それ以上を知る男だ。広沢は言った。『紅毛人は、今でこそわが国の金欲しさに、ぺこぺこしているが、そのうちに大挙大船を仕立てて、我が国を威嚇するようになるに違いありませぬ』とな」

ところが、日本では、寛永十二年（一六三五）に改定した『武家諸法度』の十七条「五百石以上之船停止之事」にがんじがらめに縛られ、今もって大船の建造は禁じられたままである。大筒や火薬の製造もご法度になっていた。

軍縮という名の「西国外様大名抑圧」のためであった。

「しかし、『そんな内輪同士の疑心暗鬼に、うつつをぬかしていてよろしいのでござろうか。この日本は、南蛮の進んでいる方向と全く逆ではござるまいか』と、広沢は嘆いたものだ。そなたも、忍びの術に南蛮わたりの火薬や薬草を使う身であろう。この話、容易に頷けような」

「解りまする。紅毛人の悪知恵は、心底から恐ろしゅうござりまする」

将監は、真剣な面持ちで答えた。

ちなみに、広沢も吉保も、いや日本人は当時誰一人知らなかったことだが、十六世紀半ばのヨーロッパ諸国は、英国が国の歳出の九〇パーセントを、フランスが七五パーセントを、そしてロシアは八五パーセントを軍事費に充て、軍備の充実に狂奔していた。

その相互の角逐は留まるところを知らず、お互いの戦いは、地上戦から海上へ。やがて地中海、大西洋、カリブ海からインド洋へと進んでいる真っ最中であった。

幸い、アフリカ大陸が南方に突出していたため、それを越えて、インド、中国、そして日本に到る海路の克服に手間がかかった。

そのお陰で、日本は平和ボケを満喫していた。

だが、それも時間の問題なのだ。

「広沢は悲憤慷慨して言ったものだ。『今のこの国の平和は、一時の凪に過ぎませぬ』と。では、どうすればいいのか。そこで先ほどの天下論が出てくるのだ」

「どうぞ、その先までお教え下さいませ。もちろん他言いたしませぬゆえ」

「そうか。では続けよう。これも広沢の受け売りだが、この国は、まずは早急に挙国一致体制を取る必要がある。そのためには、つまらぬ内輪争いをやめねばならぬと言うた」

「内輪争いと申されると？」

「二つある。第一に外様と譜代の対立。第二に朝廷と幕府の対立だ。第一の外様との融和策は、譜代との扱いの差をなくすことで、ある程度、綱吉公はこれを果たされてきた。これからは第二の朝廷との融和策が肝心になる。余も、朝廷との関係修復には、かねてから広沢の献策を受けて、及ばずながら努めてきた積もりじゃ。が、まだまだ道半ばだ。そこに起きたのが此度の赤穂事件じゃ。それゆえ、この背後にある幕朝間の種々の争いを、民一般にあからさまにしては、これまでの努力が水泡に帰する。余がカラスを白サギと呼べという比喩はここにある」

「なるほど。物事には表も裏もあると言われるわけでございますな」

「いや」
吉保はきっぱりと言った。
「こと政事に関する限りはな、将監、表はない。あるのは裏ばかりじゃ。花菖蒲の葉と同じよ」
「花菖蒲の葉は表がないので？」
「どうやら将監、こればかりは真の浅学のようじゃな」
「恐れいります」
将監は平伏した。今度は、まともに恐縮したようだ。
吉保は、すこし語気を和らげた。
「今年の皐月の頃は、そなたも余裕があろう。一度、余の六義館を訪れてみるがよい」
「はて、なにか特別な花菖蒲がございましょうか？」
「特別の花菖蒲ではない。ごく普通のものだが、その葉をよく見るがよい。葉は茎を抱くように生えていて、表側は一切見えぬ。いや見せぬのじゃ。余が徳川の表の顔を見せぬように努めるに似てな」
苦笑まじりに言いながら、ふと思った。

（近衛さまも、朝廷の花菖蒲ではないのか）と。

将監は、しばらく考え込んでいたが、ようやく口を開いた。

「殿のお考えが、やっと見えてまいりました」

「そうか。それはよかった。ではもう一つ付け足そう。実はな、昨夜のことだが、すでに余は、上さまに固く約束した。『この赤穂事件は、すべてを吉良と浅野の私的争いごととして処理いたしたく存じます。されば、以後、公方さまとしては、事件について一切ご放念願わしゅう存じまする』とな。そして上さまのご内諾を得た」

「そうでございましたか。では、拙者も、殿のご意向にそって、工夫いたさねばなりませぬな」

「そうしてくれるか」

「喜んで」

将監には、これ以上言わなかったが、上さまは昨夜、一昨年春の浅野内匠頭の処断について、ご自身の到らなかった点を反省し、一時は「浪士宥恕論」に傾きかけたのであった。

助命の仲介に、「東叡山におわす公弁法親王さまを、お願いせよ」とまで言われた。だが、吉保は抵抗した。

荻生惣右衛門の「法治主義」を楯に、必死で大石の断罪、そして切腹論を説いたのである。

（大石を生かしておけば、やがて浅野内匠頭の怒りの真相が、大石周辺から漏れる。それが幕朝間のしこりを再発させることにつながる）

吉保は、これを恐れた。

吉保は、綱吉の説得に努める一方、公弁法親王には昨夜中に手を打った。此度の大石の討入りに当たって、浪士の武防具の輸送に、「法親王の行列」と称する一行が一枚嚙んでいた、という将監から得た諜報を、わざと流した。

これで助命の仲介への公弁法親王側の動きは、ぴたりと止まる筈だ。

その代わり、この赤穂事件を、浅野と吉良の間の、ごく詰まらない「私事のいざこざ」にとどめる。

（この国の町衆や農民たちに葵〔幕府〕の襖の内や、菊〔朝廷〕の御紋の御簾の内を絶対にみせてはならぬ。事件は、すべて町衆好みの地下話（下々の話）にせねばならぬ）

これが吉保の不退転の決意であった。

「解りました。では、拙者も万難を排して、この事件を二人の〈詰まらぬ争い事〉に閉じこめてご覧にいれましょう」

将監は、きっぱりと言い切った。

「頼んだぞ」

「その代わり、吉良には少々泣いてもらいますが、よろしゅうございますな」

「構わぬ。大義、罪を滅すじゃ」

吉保は、意識して笑い顔を作って見せた。

「例えば、こういう町衆好みの手がございますが。少々お耳を」

将監は、吉保の元ににじり寄って一言、二言囁き、

「如何で」

と、上目遣いに見た。

「面白いと言いたいが、最初の話はちと年齢からして無理ではないか」

吉保は、こみ上げる笑いを我慢しながら言った。

将監の〈作り話〉は、吉良が浅野の妻に年甲斐もなく懸想し、それを知った内匠頭

が怒り心頭に発し――、というものだったのだが。

「吉良が、ちと年寄り過ぎておりますかな」

将監は頭を掻いた。

「吉良は、そなたのように男として絶倫ではなさそうじゃでな。それに、妻の富子とは、仲がよかったというではないか。すこし無理かと思うな。しかし、次の賄欲しさに浅野に、なにやかやと意地悪したというのが面白かろう。あやつは妻の実家の上杉家に大借金がある。その線でいったらどうか」

「心得ました。それに吉良も浅野も死人。死人に口なしでござれば、たとえどのような作り話を流布されても反論はできませぬで助かります」

「そなたもなかなか悪人じゃな」

「いえいえ、殿ほどではございませぬ」

「余ほどの悪人ではないと申すのか。よう言うわ。わははは」

久しぶりに、腹の底から突き上げるような笑いとなった。

「では、以後、赤穂事件を物語や芝居にしたい輩には、この線で物を書かせましょう。いや、拙者の筋からさらに仕向けてみましょう」

「そうしてくれ。すこしでも幕朝間の禁忌に触れそうな話は徹底して弾圧せよ。どう

せ筆は一本、箸は二本。最初から筆は箸に勝てぬのだ。食うためなら、平然と筆を枉げて物を書く下世話の文屋は、掃いて捨てるほどいる。そなたのいう線で芝居の筋書きを書かせる金なら、いくら使っても構わぬ」

「心得ました」

「そうじゃ、忘れるところだった。その書かせる物語ではな――」

「はい、なにか他にご注文が？」

「ある。主君への忠、親への孝、妻子への愛、朋友への義。これを守るための浪人たちの艱難辛苦は、いくら誇張しても構わぬ」

「心得ました」

「町衆というものはな、そういう、〈お安い涙〉が大好きなのだ。殊に大石の忠誠は、最大限に褒めてくれ。讃えてやってくれ。忠臣内蔵助、忠臣内蔵助、忠臣蔵じゃ、語呂もよいわな。わはははは」

これが、六義館の花菖蒲の葉に過ぎぬ吉保の、せめてもの罪滅ぼし――。

そこまで言いかけて吉保は、そっと口を閉じた。

この日、吉保は、赤穂事件を自分の日記『楽只堂年録』に、つぎのように認めた。

（二月）四日

一　故浅野内匠頭長矩の家臣の吉良上野介義央を討たる輩に残らず切腹を　仰付らる

わずか三行。

あっさり赤穂の同志を「輩」の一語でくくり去り、首魁の大石の名をあげることもなく、感想の一つすらも加えることはなかったのである。

（完）

あとがき

諜報宣伝とか輿論操作の存在を知ったのは、戦時中、勤労動員先の中央気象台でのことである。

夜勤中、軍人の見回りを恐れながら、こわごわ聞いた短波放送が始まりだった。

「こちらボイス・オブ・アメリカ。これから親愛なる日本の皆様に小唄勝太郎の『佐渡おけさ』を、お送りします」

流暢な日本語と、明るい民謡や歌謡曲の合間に、日本の戦局が日に日に悪化しているニュースが巧みに織り込まれていた。

が、十四歳の軍国少年たちは、小さく叫んだものだ。

「なにが親愛なる、だ！」

ちなみに、当時、筆者が通っていた早稲田中学は、一九四二年四月十八日の白昼、アメリカの最初の東京空襲を受けた学校である。この時、上級生の一人は、不発焼夷

弾を直接肩に受けて即死した。低空を飛来したアメリカ航空兵は犬でも追うように笑い興じながら焼夷弾をばらまいたらしい。

六十歳を過ぎて作家修行に入った時、ふと、少年時代に聞いた、このアメリカの対日宣伝放送を思い出して調べたことがある。

この放送のキャップは、ザカリアス大佐といい、一九二〇年代に駐日大使館で語学将校を務めた男だった。自ら日本語で出演したというから、記憶にあった声は、ザカリアス本人ということらしい。

この男が、戦後書いた回顧録（『日本との秘密戦』新岡武訳・日刊労働通信社）に次のようなエピソードがある。

彼は、一九四五年八月十五日の日本の降伏を、アメリカの自宅のラジオで妻と共に聞いた。戦争終結を喜ぶ様子のない夫に対して、妻は、「あなたは得意がっていないのね」とからかった。

これに、大佐は次のように答えたという。

「得意だ。しかし、我々の本当の仕事は今から始まるのだ」

これを「どこかで読んだ言葉だ」と思って下さる方は、この小説をしっかりと読破

して下さった愛読者でございます（笑）。お礼申し上げます。

ザカリアスは、この回顧録で、終戦の翌日、「日本人の精神を効果的に、心理的に再教育するという広汎な計画にとりかかった」と記している。

「ウォー・ギルト・インフォメーション・プログラム（戦争の罪を日本に教え込む計画）」は、こうして立案された。

それは、敢えていえば、十七世紀に始まった欧米の長い長い「アジア侵略の歴史」を空っとぼけて、最後の日本の侵略主義だけに「すべての罪をなすりつける」アメリカのご都合主義の産物であった。

一九四五年十二月九日、日曜日の午後八時三十分。

ＮＨＫラジオ第一から、ベートーベンの第五交響曲『運命』の、ダダダダーンという有名な主題が流れると、続いて『真相はかうだ』という日本告発番組が、こうして始まったのである。

そして、一方では、アメリカは、スポーツ、スクリーン、セックスの、いわゆる『３Ｓ政策』で日本国民を徹底してスポイルした。

日本は、このザカリアスの占領政策に、ものの見事にはまった。

今もこの影響は続いているのではないか。

愛国心スポーツだけの寒さかな

これが現代日本の奇妙な現実である。

こうした「変転する社会」を、長く生きた者として歴史を考える時、どうしても、すべての事件は二重、三重に見えてくる。

しかし、別に目が悪いからではあるまい。

処女作となった『信長の棺』（日本経済新聞社／文春文庫）を始めとする《本能寺三部作》の謎解きも、この二重、三重の複眼で眺めたことから始まっている。

敢えていえば知性か。別に威張っていうわけではない。

この場合、知性（インテリジェンス）とは、佐藤優さんの言葉を借りれば、ラテン語のレゴー（読むの意）とインテル（〜の間にの意）を合成して作った言葉で、「行間を読む」「文字と文字との間の隠された意味を読む」ということだそうだから（佐藤優著『野蛮人のテーブルマナー』講談社）。

この『謎手本忠臣蔵』も、そんな複眼思考で書かれた。

実際、書いてみると、忠臣蔵ほど不思議な、そして厄介な事件はなかった。忠臣蔵をタイトルとしてＡＮＤ検索すると二六七もの文献があり、忠臣蔵ウオッチャーは古今東西千人を超えている。

しかし、事件から三百年以上たった今日も、浅野内匠頭が、なにを怒っていたのか、納得のいく説明は、どの文献にもない。

その中では、吉良上野介が金銭に汚かった、それを内匠頭が怒ったという説が（大衆受けして）有力である。しかし、当時の五万石の大殿様が、朝廷の饗応指導料の多寡にまで一々口を挟むことはあり得ない。また、仮に口を挟んだとしても、そこはそれ、江戸在府家老が、適当に処理すれば足りることである。

浅野の在府家老が無能で、内匠頭に言われるままに、指導料をケチったという理由も、もっともらしく追加されている。

しかし、これは大石以外の家老が、後の討入りに参加しなかったことからくる「坊主憎けりゃ袈裟まで憎い」の類であろう。

当時の在府家老は、無能ではとても勤まらなかった。また、仲間同士が、一緒にな

って吉原に繰り出すほど親しく、酸いも甘いも知り尽くしているような連中だから、ただの堅物ということもあり得ないことである。

それに、彼らは、大名同士の横の連携が密であり、あらゆるケースの（幕府関係者への）礼金相場は決まっていたと思われる。

吉良上野介の側も、地元では名君だし、治世のほどもなかなかのものである。決して意地汚い老人ではない。

また、当時は、殿様の勅使饗応の礼法は、秘かにマニュアル化されていたと思われる。したがって、浅野内匠頭が、（吉良の意地悪で）着てきた式服が違っていたなどというのも、下世話向きの噴飯物の作り話であろう。第一、勅使下向は、毎年の行事であり、何を着ていくかなど、吉良に言われなくても茶坊主、女中でも知っていることではないか。

となると、「なにが内匠頭をそうさせたのか」が、改めて問われなくてはならないことになる。

なんの因果か、筆者はこういう一見不可能と思われる謎解きへの挑戦が好きである。今回も、その例に漏れない。

その結果が、これまでの忠臣蔵では、全く陰の存在でしかなかった柳沢吉保をクロ

ーズアップさせることになった。

そこから浅野内匠頭の刃傷の原因について、当時の朝幕間の懸案事項であった「ある難題」からの大胆な推理が可能となり、謎解きへの道が開けた。

これに伴って、将軍綱吉も柳沢も、この作品では百八十度、これまでの悪い評価が変わっていることに注目して欲しい。

二人の弁護のための「貨幣論」や「暦」の勉強も、読者のご批判に耐えるように、懸命にしたつもりである。

最後に、『謎手本忠臣蔵』という題名は『仮名手本忠臣蔵』の語呂合わせと「謎のお手本」という二つの意味を兼ねていることを申し添えておこう。仮名＝四十七の連想が水面下に没してしまうことになったが、この点はご理解いただきたい。

最後の最後になったが、新潮社のスタッフの皆さん、特に担当の田中久子さん、岡田葉二朗氏、矢彦孝彦氏には、この考証の難しい作品に、よく最後までお付き合いいただいた。

厚くお礼申し上げて、擱筆する次第である。

平成二十年晩秋
伊豆熱川の書斎にて

加藤　廣

文庫版によせて——作者は歌舞伎の『忠臣蔵』をどうみているか——

歴史作家になるまでは「作家さんというのは虚実の狭間で遊ぶ結構な身分」のように思っていた。だが、なってみると、どうして、どうして、そんな気楽な商売ではなかった。

むしろ、虚実の狭間をのたうち回り、悪戦苦闘する孤独な旅人であった。

なぜなら、自分で紡ぐ「虚」はともかくとして、片足を突っ込む歴史の「実」なるものにも「真実」という実もあれば、噂だけを書いた「記実」もあり、も一つ、最初から後世の読者を意識して、ダマそう、真実を隠そうとして書かれた「偽実」が多いからである。

これにダマされて、信長や秀吉に、当時、ありもしなかった遠メガネ（望遠鏡）で眺めさせたり（望遠鏡は十七世紀初頭——「関ヶ原の合戦」以降のオランダの発明品）、間宮林蔵の小説に白菜を登場させたり（白菜は明治以降の到来物）するのは、ただの「嘘飯もの」である。だが、最近のＴＶや映画などでは、わざと史実にそむいて「面白ければいいだろう」という開き直りまで出てくる始末。

『源氏物語』の現代語訳に、ベッドシーンをいれることなども、ＡＤＦ（アラ・ダブル・フォー、八十歳）超えの作家には、どうしてもうなずけないところである。

だが、これは日本だけのことではないらしい。最近来日したヨーロッパの有名バレエ団が上演した『白鳥の湖』では、王子と姫の他に王子に別の愛人（貴族の人妻）がいて、物語が、この三角関係のもつれ話になっているそうである。バレエ好きの子供を連れてきた両親やバレエの先生たちは、このストーリーを子供たちに、どう説明したものかと、さぞ困ったことだろうと同情する。

ことほどさように、現代は、「なんでもありー」の時代になってしまった。自己規制がない。「秘すれば花」などという能の世界のイマジネーションを楽しむ感覚も感動もすっ飛んでしまったようである。

映画『男はつらいよ』の寅さんだったら、きっと、あの、お得意の台詞で、こういうだろう。

「それを言っちゃあ、おしめえよ」

その点、伝統を尊重し、役者の血統を守る歌舞伎の世界はいい。

安心して「虚の世界」に浸り、堪能できる。

歌舞伎で一番好きなのは、『勧進帳』である。十一代目市川団十郎から現在の松本

幸四郎丈まで、何度、弁慶の所作の見事さを楽しませていただいたことか。もっとも、筋そのものは、日本の水軍の勉強をすれば解るが、義経は弁慶らと畿内から水軍船で奥州に逃げたというのが真相のようである。しかし、それでは『勧進帳』にならない。やはり義経は、「安宅の関」を通らなければいけない。そして富樫と会わなければいけないのである。

「虚」の方が「実」より感動的で美しいのだ。

忠臣蔵もそうだろう。赤穂浪士の復讐事件が起きたのは、元禄十五年（一七〇二）十二月十四日。その翌年の二月には、いち早く、江戸堺町の中村座で『曙曾我夜討』が上演され、この曾我兄弟に仮託して、赤穂事件が取り上げられた。

だが、この真相を語る芝居は、三日で幕府の禁止を食った。

それでは――というので、事件から四年目の宝永三年（一七〇六）五月、大坂の竹本座に『兼好法師物見車』が現れた。これは上・中二段もので、太平記の中の高師直が、塩冶（塩谷）判官高貞の妻に懸想し、邪魔な塩冶を殺してしまうという浄瑠璃である。この一ヶ月後、さらに、この下段に当たる『碁盤太平記』が登場する。ここに塩冶の部下の大星由良之助、その子力弥など、以後、三百年に亘って我々の耳になじむ名前が出てくる。大星は山科に隠居し、同志とともに師直に対する復讐の機会を窺

い、見事復讐に成功するという筋である。

上演場所を、江戸よりはるかに取締りの緩かった大坂（当時武士は五百人？ぐらいしかいなかったらしい）とし、時代を太平記の頃に置き換え、さらに、復讐の場所も江戸でなく鎌倉にしている。

この二重、三重の防波堤を巡らせた脚本によって、幕府は全く手も足も出せないようになった。こうして、この演題は、次第に、おおっぴらになり、二年後の正月（この年は浅野長矩の七回忌である）には、朝廷のお膝元である京都の亀屋粂之丞座で『福引閏正月』が上演されている。この中にも塩冶判官が登場する。この後は、京坂の歌舞伎芝居では「残らず義士仇討ちを演ずる」ようになった。

では事件の真相はどうだったのだろう。私は、冒頭の「虚実の狭間」をのたうち回るようにして調べた。そして『謎手本忠臣蔵』に書いたように、当時の将軍綱吉の母への従一位授与を巡る朝廷と徳川幕府との対立と抗争に、その原因を見いだした。幕府という「虎の威」を借りた強引な吉良の交渉態度。これを知った浅野長矩の、いわずもがなの口出し。これを「田舎大名の知ったことか」と吉良が罵ることから、思いもかけぬ悲劇の幕があく、という歴史推理小説である。なお、この小説では、最大のハイライトである討入りの場面は、あっけない。吉良上野をバックアップしたという

上杉家は、一兵も援軍を送っていない。

これは作者の勝手な作り話ではない。討入り後に大石が書いた細井広沢への次の手紙（実在する）が実証する。

その節、上杉からの援軍はなく、用意していった半弓
その他の武器は役立たずでした。
あまりのおかしさに一句、
　覚悟した程にはぬれぬ時雨（しぐれ）かな
と詠（よ）みました。

しかし、だからと言って三百年続いた『仮名手本忠臣蔵』の価値は損じるものではない。真相を知らないで書いたのではなく、知った上で、「虚の世界」を延々と積み上げることで、敗者大星由良之助以下の忠義の美学は、不動の重みをもって確立しているからである。

歌舞伎の場合は、この「虚の世界」の美しさを、それこそ、こちらも虚心になって堪能すればいいのである。

（平成22年12月歌舞伎公演、『国立劇場』所載）

参考文献

【人物】

塚本学著『徳川綱吉』（吉川弘文館）

福留真紀著『徳川将軍側近の研究』（校倉書房）

森田義一著『柳沢吉保』（新人物往来社）

宮川葉子著『柳沢家の古典学（上）』（新典社）

中島文雄編『柳澤吉保公参禅録』（永慶寺）

佐佐木杜太郎著『細井廣澤の生涯』（満願寺刊）

堀勇雄著『山鹿素行』（吉川弘文館）

村井淳志著『勘定奉行荻原重秀の生涯』（集英社）

西内雅著『渋川春海の研究』（錦正社）

中島康夫著『大石内蔵助の生涯』（三五館）

哭考一著『眞説 元禄忠臣蔵』（東京図書出版会）

赤穂義士顕彰会編・佐佐木杜太郎改訂増補『増訂 赤穂義士事典 大石神社蔵』（新人物往来社）

桂木寛子現代語訳『四十七士の手紙』（小学館テレビ文庫）

中江克己著『忠臣蔵の収支決算』（ＰＨＰ文庫）
松島栄一著『忠臣蔵』（岩波新書）
徳富蘇峰著『近世日本国民史 赤穂義士』（講談社学術文庫）
福本日南著『元禄快挙録（上・中・下）』（岩波文庫）
野口武彦著『忠臣蔵』（ちくま新書）
赤穂市総務部市史編さん室編『忠臣蔵 第三巻』
日本史籍協会編『川路聖謨文書 八』（東京大学出版会）
金井圓校注『土芥寇讎記』（江戸史料叢書・人物往来社）

【社会制度】

松平太郎他著『江戸時代制度の研究』（柏書房）
石井紫郎校注『日本思想大系27 近世武家思想』（岩波書店）
高柳金芳校注『史料徳川夫人伝』（新人物往来社）
永島今四郎他編『定本 江戸城大奥』（新人物往来社）
稲垣史生著『時代考証事典』（新人物往来社）
岡田芳朗著『日本の暦』（新人物往来社）
大石学著『元禄時代と赤穂事件』（角川選書）

板倉聖宣著『生類憐みの令』（仮説社）
三浦正幸著『城のつくり方図典』（小学館）
中山良昭著『日本百名城』（朝日文庫）

【風俗その他】

百瀬明治他著『絵で見る江戸の女たち』（柏書房）
渡辺信一郎著『江戸の閨房術』（新潮選書）
藤澤衛彦編『女愛経』（日本風俗研究会）
森末義彰他編『風俗辞典』（東京堂出版）
藤原千恵子編『図説 浮世絵に見る江戸の一日』（河出書房新社）
牧秀彦著『剣豪 その流派と名刀』（光文社新書）
竹内実他著『日本史を海から洗う』（南風社）
国立天文台編『理科年表』（丸善）
ヒノキ新薬編『エプタ』特集「塩いのちの記憶」（ヒノキ新薬）

解説

雨宮由希夫

日本人の国民的ロマン「忠臣蔵」については『仮名手本忠臣蔵』以来、多くの作品が描かれてきたし、今後も書き継がれることだろう。オーソドックスに事件の経緯を追ったもの、吉良義央側から描いたもの、不忠臣に焦点を当てたものなど内容はさまざまで、夥しい「忠臣蔵」があり描きつくされてきた感のある中で、作家が、さらに一作品「私自身の忠臣蔵」を書き加えようとするのは、かなりの勇気と決心を要するものであろう。

周知のごとく、元禄赤穂事件は元禄十四年（一七〇一）三月十四日の、赤穂藩主・浅野内匠頭長矩の高家筆頭・吉良上野介義央に対する刃傷事件と、元禄十五年（一七〇二）十二月十四日の、大石内蔵助良雄ら旧浅野家家臣四十七士による吉良邸討入りの二つの事件からなる。第一の事件で浅野が吉良をしとめていれば、第二の事件はおこらなかった。浅野内匠頭の犯行が未遂に終わったということから、第二の事件が惹き

起こされた。第一の事件の原因が曖昧でも、それが何なのだといわんばかりに第二の事件へと流れ込んでいくことにこの事件の特異性があらわれている。「刃傷の原因」、「討入りの目的」、はたまた「大石がいつから討入りを考えたのか」は主たる争点であり、これらを組み合わせれば、〝さまざまなる忠臣蔵〟が可能となろう。

元禄赤穂事件ほど不可解な事件はない。事件は突然に起き、その上、斬りつけた当事者が「この間の遺恨」を語らないまま、切腹させられてしまったため、事件の発端となる肝心かなめのことが謎に包まれている。判明しているのは、浅野が吉良に対し耐えがたいほどの遺恨を抱いていたということだけで、解明すべき真実は幕府による原因究明に曖昧な点があったことが要因で、葬り去られた歴史の深い闇の中にある。

浅野内匠頭がなぜ刃傷に及んだかについては古来、内匠頭の短慮説、精神障害説、乱心説や吉良の賄賂強要説、怨恨説等がある。塩を巡る浅野と吉良の確執が原因とする塩田説は事件の原因解明に経済的な要因が加わったもので、赤穂浪士事件の真因とみなされ一世を風靡した。南條範夫の『元禄太平記』（日本放送出版協会　昭和五十年）は塩田説を採用している。

しかしながら、いずれの説を採るにせよ、御家断絶身は切腹という重さに釣り合う

だけの説得性のある原因は見つかっていない。

「忠臣蔵」という最も凡庸、かつ最も普遍的な題材を選ぶにあたり、『仮名手本忠臣蔵』の向こうを張って、あえて「謎手本」の名を冠し、「仮名手本」に挑んだ作家加藤廣の気概が初々しい。

「加藤版忠臣蔵」の新視点とは、本書の主人公に大石内蔵助と柳沢吉保の二人を配し、それぞれに刃傷事件の真相にせまらせることである。

従来の柳沢吉保像は、もとより吉良義央を贔屓する悪役の面が強いが、本作では、刃傷事件の処理に当たって指揮をとりつつ、刃傷沙汰の真相を知りたい柳沢吉保はまず浅野の発した「この間の遺恨覚えたるか」の遺恨とは何かに着目し、原因究明にのりだす、としている。

公式に残された浅野の言葉は、「この段兼ねて知らせ申すべく候へども、今日やむ事を得ず候ゆえ、知らせ申さず候、不審に存ずべく候よし」という「遺言」と、「風さそふ花よりもなほ我はまた　春の名残をいかにとかせん」の辞世の句のみである。

「《春の名残》に掛けた殿の心残りとはなにか！　それも、幕府から受けたであろう訊問の際には、決して口に出してはならないなにか。ということは、幕府の御政道に関するものではないのか」と主君の遺言と遺詠を読んだ内蔵助は、吉良との間に、

〈なにかがあった〉ことを知り、幕政に絡んだ論争の有無までを考えるに至る。

刃傷事件の背後には、非常に大きな力が働いていた。その力は背後にある一切の事実を封殺していた。忠臣蔵はこの秘密の上に成立していたと、作家はストーリー展開している。

その秘密とは「桂一計画」すなわち桂昌院の従一位昇階のことであった。

綱吉は卑しい侍女から這い上がってきた、母親桂昌院のために、武家の女性としては前代未聞の高い位である従一位を要求していた。官職の授与は朝廷の〈歴史ある権威の象徴〉であるが、権力への階段を上り続ける柳沢にとって、桂昌院の従一位昇階は絶対達成しなければならない命題であり、綱吉との内密の約束であった。機会あれば、勅使院使の機嫌を取り持って桂昌院への従一位昇階を取り付けようとしていた綱吉は、刃傷事件が「桂一計画」遂行にあだなすものと見なし激怒。それが将軍の直裁による即日切腹という結果になった。

「桂昌院の従一位授与を巡る朝幕間の紛争に、浅野内匠頭が何らかの理由で幕府の横暴に口出しして、桂一計画の先鋒を務めた吉良に咎められた。そこから言い争いになり、内匠頭は吉良屋敷で武士の面目に関わる恥をかかされた。——とすれば、確証はないが話は通じる。内蔵助は、ようやくたどり着いた真相に感慨を覚えた」との展開

は十分説得性のあるものであろう。

鳴海風の『和算忠臣蔵』（小学館　平成十三年）のように、桂昌院の従一位昇階問題が刃傷事件に係わりがあるとした作品はこれまでにもあったが、本作のように、朝廷と幕府の関係がこれほどまでに明々白々と強調された「忠臣蔵」はない。

朝廷と幕府の関係について、特記しておかねばならないことがある。一つは「神君の密書」という作家の創作のことである。

〈徳川幕府成立にまつわる屈辱の伝説〉である「神君の密書」は、関ケ原の戦いで、まともに戦えば到底勝ち目のないことを知っていた家康が、下野・小山の陣で、秀吉子飼の猛将・福島正則を、東軍（家康側）の見方にひきつけるため、正則に与えた密書である。朝廷も関与した密書そのものは福島家の居城である安芸・広島城に秘蔵された。広島城の無許可修築の廉で正則が除封された後、密書は浅野宗家に継がれ、やがて、密書そのものの処置は支藩の赤穂浅野長直（長矩の祖父）に押し付けられた。「神君の密書」が残っていれば、朝廷は、幕府との力関係が逆転できたかも知れない、とする。

ついで、勤皇家たる浅野家のことである。

東山天皇は浅野家が四十年前に京都御所再建に尽くしてくれた忠誠を忘れず、また、

時の関白・近衛基熙と大石の両家は遠い親族関係にあった。内蔵助の四代前の大石良信の妻は、関白近衛前久の娘（志茂）ということ。このように記すと、読者は『信長の棺』にはじまる作家の〈本能寺三部作〉との連続性を思い起こすであろう。近衛前久は信長・秀吉の同時代人であり、作家の描く秀吉は勤皇家であった。作家の作品は、日本史を天皇と武家政権の二重構造から問いただすという視座で一貫している。

元禄赤穂事件は、元禄期という時代相を如実に反映した事件である。「元禄という時代に起こった事件であったからこそ、あれほど世間の注目をあつめたのであり、また喧伝され、虚構化されて後の世まで伝承された」（尾崎秀樹『考証　赤穂浪士』秋田書店　昭和四十九年）。

関ケ原の戦いからほぼ百年、戦国の風は既に遠のき、元禄文化が花開いた。しかしその陰で時代は大きな「峠」にさしかかりつつあった。「忠臣蔵」の経緯を「貨幣経済」という怪物が世の仕組みをゆるがせはじめた変動の時代の中で捉え、独自の視点で描いた作品に堺屋太一の『峠の群像』（日本放送出版協会　昭和五十六年）がある。

泰平の気風の下、消費的な面も強まり、生活は華美に流れ、荻原重秀による貨幣の改鋳などもあってインフレが進んでいた。元禄末期には災害・飢饉などが多く起こり、将軍専制の傾向を更に強くした五代将軍綱吉の放縦にながれていた政治と生活や太平

の世では信じがたいほどの出世をした側用人柳沢吉保の栄達とは逆に、人心は重く沈んだ。そのような時代に綱吉の主導によって進められた苛烈な浅野家処分に異議を唱えるべく、主君の仇を報じ、士道を立てるという赤穂浪士の存在は一種の時代批判と受け止められ歓迎された。

本作において、人物配置で特筆すべきは大石内蔵助と肩を並べるほどの役柄・役割として、柳沢吉保を配したことであろう。

将軍への情報経路を一手に握る御側御用人で、権勢並びなき柳沢の存在を際立たせた作品には、昭和五十年のＮＨＫ大河ドラマ「元禄太平記」の原作である南條範夫の『元禄太平記』がある。この作品で、南條は忠臣蔵事件の黒幕は柳沢であるとする柳沢フィクサー説を唱えている。これに対し、森村誠一の『忠臣蔵』（朝日新聞社、昭和六十一年）は「忠臣蔵事件に際しては記録上吉保の影は薄い。おそらく片隅の小藩の浪人群の復讐など歯牙にもかけなかったのであろう」としている。これらの作品にくらべると、本作のユニークさは柳沢の人物造形にあると知れる。

討入りを画して蠢く赤穂浪士を幕府は見てみぬふりをしていたという巷説があるが、本作では、大石はじめ赤穂浪士の行動も会話も、黒鍬組頭領の堀田将監を通じて、幕府側用人の柳沢吉保にはすべて手に取るように伝わっていた。また、討入り前には、

大石の身を守れと柳沢は堀田将監に厳命している。

さらに、赤穂浪士の追及から「桂一計画」内定が影響を受けるかもしれないことを柳沢は恐れ、桂昌院に従一位の昇叙の正式通達が元禄十五年三月中旬の朝使下向にもたらされれば、あとはどうなってもかまわないと思っていた、とする。

吉保にとっての赤穂浪士は吉良義央という「古い朝廷交渉人」を消してくれた恩人であるが、討入り後の大石を生かしておけば、やがて浅野内匠頭の怒りの真相が大石周辺から漏れ、朝幕間のしこりを再発させることに繋がるとして、断罪論を綱吉に献策している。

極めつきは柳沢の情報管理である。〈江戸庶民の誰もが退屈しきっていて、みな、面白いことに飢えていた〉。世論は刃傷事件を喧嘩とみなし、浅野側のすべてが同情の対象になった。今で言う「世論」という援軍を味方につけることを大石もそして吉保も考えていた。世間の賞賛を浴びた赤穂浪士の討入りだが、浅野に対して世間の同情が集まるような結果に導いたのは吉保であった。その上、吉保は浪士切腹後の政治的課題をきちんと視野に収めて世論を操作している。

大石内蔵助の心理面の推移の描写も読みごたえ十分である。

大石の像を描くに、個人の資質なのか、たまたま神輿に乗せられただけなのかの二

方法がある。内蔵助の肚はいつ決まったのか。はじめから復讐の意思があったのか、周囲から突き上げられて、やむを得ず決意したのかの二方法でもある。

浅野家断絶から討入りまでの一年九ヶ月の間において、最後まで同盟に残った四十七人は決して一枚岩ではなかった。内部に反目や相互不信があった。

大石が浪士操縦で最も注意した人物は堀部安兵衛であった。大石は安兵衛を「あばれ馬」と呼び、「内なる敵」とみなしていたと作家は書いている。安兵衛は主君の仇討ちを強く主張し、慎重に構える大石らをせきたて、時に腰抜けとさえ罵倒した急進派「江戸三人衆」の代表である。大石と安兵衛二人の手紙は『堀部武庸筆記』に残っているが、堀部の手紙攻勢を作家は物語の展開上うまく活用している。

通説では、大石は城地明け渡しのうえ、内匠頭の弟、浅野大学によるお家再興を歎願し、それが容れられなければ上野介を討ち取って主君の無念を晴らすということで藩論をまとめたが、大学のお預け決定お家再興が絶望となったとき、仇討ちを決意したとされるが、はたして、それは真実であろうか。

歴史学者の児玉幸多は「大石は、はじめから吉良義央を討つよりほかないと考えていたのではなかろうか。浅野家の再興などは口実に過ぎなかったのではないか」（『日本の歴史 16 元禄時代』中央公論社 昭和四十一年）としているが、加藤も、大石は浅

野家の再興など信じていない、信じていなかった、とみて物語っている。

作家加藤廣は『信長の棺』で鮮烈デビューし、歴史的な大事件の真実探求に焦点を当てるという手法で、矢継ぎ早にインパクトのある作品を世に問うてきた。

加藤作品の独創性の根源をなすものは、それまで常識あるいは通説とされている歴史事象を疑い、真実を追究するという独特の歴史観である。本作もまたその絶妙な歴史推理の手法で、謎解きの面白さを通じて真相に迫る作家の真骨頂が十分に発揮された作品といえる。刃傷事件をはじめとする「忠臣蔵」の謎を解明するという知的興奮を、小説としての面白さをそこなわずに、これほどまでに堪能させてくれる作品はなかった。

（平成二十三年十月、文芸評論家）

この作品は平成二十年十月新潮社より刊行され、文庫化にあたり、加筆修正をし、上・中・下、三冊に分冊した。

加藤　廣　著

空白の桶狭間

桶狭間の戦いはなかった。裏で取り交わされたある密約と若き日の秀吉の暗躍。埋もれた真実をあぶりだす、驚天動地の歴史ミステリ。

芥川龍之介著

羅生門・鼻

王朝の説話物語にあらわれる人間の心理に、近代的解釈を試みることによって己れのテーマを生かそうとした〝王朝もの〟第一集。

芥川龍之介著

地獄変・偸盗（ちゅうとう）

地獄変の屏風を描くため一人娘を火にかけて芸術の犠牲にし、自らは縊死する異常な天才絵師の物語「地獄変」など〝王朝もの〟第二集。

芥川龍之介著

蜘蛛（くも）の糸・杜子春（としし）

地獄におちた男がやっとつかんだ一条の救いの糸をエゴイズムのために失ってしまう「蜘蛛の糸」、平凡な幸福を讃えた「杜子春」等10編。

芥川龍之介著

奉教人の死

殉教者の心情や、東西の異質な文化の接触と融和に関心を抱いた著者が、近代日本文学に新しい分野を開拓した〝切支丹もの〟の作品集。

芥川龍之介著

戯作三昧・一塊（いっかい）の土

江戸末期に、市井にあって芸術至上主義を貫いた滝沢馬琴に、自己の思想や問題を託した「戯作三昧」、他に「枯野抄」等全13編を収録。

諸田玲子著

誰そ彼れ心中

仕掛けられた罠、思いもかけない恋の道行き。謎が謎を呼ぶサスペンスフルな展開、万感胸に迫る新感覚時代ミステリー。文庫初登場！

諸田玲子著

お鳥見女房

幕府の密偵お鳥見役の留守宅を切り盛りする女房・珠世。そのやわらかな笑顔と大家族の情愛にこころ安らぐ、人気シリーズ第一作。

諸田玲子著

蛍の行方 お鳥見女房

お鳥見一家の哀歓を四季の移ろいとともに描く連作短編。珠世の情愛と機転に、心がじんわり熱くなる清爽人情話、シリーズ第二弾。

諸田玲子著

鷹姫さま お鳥見女房

嫡男久太郎と鷹好きのわがまま娘との縁談、次女君江の恋。見守る珠世の情愛と才智に心がじんわり温まる、シリーズ文庫化第三弾。

諸田玲子著

灼恋

徳川綱吉の寵愛をうけつつ柳沢吉保に恋い焦がれて三つ巴の関係を生き抜いた染子。志に燃え恋に心解き放つ女と男の元禄歴史絵巻。

諸田玲子著

狐狸の恋 お鳥見女房

久太郎はお鳥見役に任命され縁談も持ち上がる。次男にも想い人が……成長する子らを見守る珠世の笑顔に心和むシリーズ第四弾。

司馬遼太郎著

梟の城

直木賞受賞

信長、秀吉……権力者たちの陰で、凄絶な死闘を展開する二人の忍者の生きざまを通して、かげろうの如き彼らの実像を活写した長編。

司馬遼太郎著

人斬り以蔵

幕末の混乱の中で、劣等感から命ぜられるままに人を斬る男の激情と苦悩を描く表題作ほか変革期に生きた人間像に焦点をあてた7編。

司馬遼太郎著

国盗り物語

（一～四）

貧しい油売りから美濃国主になった斎藤道三、天才的な知略で天下統一を計った織田信長。新時代を拓く先鋒となった英雄たちの生涯。

司馬遼太郎著

燃えよ剣

（上・下）

組織作りの異才によって、新選組を最強の集団へ作りあげてゆく〝バラガキのトシ〟――剣に生き剣に死んだ新選組副長土方歳三の生涯。

司馬遼太郎著

新史太閤記

（上・下）

日本史上、最もたくみに人の心を捉えた〝人蕩し〟の天才、豊臣秀吉の生涯を、冷徹な史眼と新鮮な感覚で描く最も現代的な太閤記。

司馬遼太郎著

関ケ原

（上・中・下）

古今最大の戦闘となった天下分け目の決戦の過程を描いて、家康・三成の権謀の渦中で命運を賭した戦国諸雄の人間像を浮彫りにする。

松本清張著

小説日本芸譚

千利休、運慶、光悦――。日本美術史に燦然と輝く芸術家十人が煩悩に翻弄される姿――人間の業の深さを描く異色の歴史短編集。

松本清張著

黒地の絵

傑作短編集(二)

朝鮮戦争のさなか、米軍黒人兵の集団脱走事件が起きた基地小倉を舞台に、妻を犯された男のすさまじい復讐を描く表題作など9編。

松本清張著

西郷札

傑作短編集(三)

西南戦争の際に、薩軍が発行した軍票をもとに一攫千金を夢みる男の破滅を描く処女作の「西郷札」など、異色時代小説12編を収める。

松本清張著

佐渡流人行

傑作短編集(四)

逃れるすべのない絶海の孤島佐渡を描く「佐渡流人行」、下級役人の哀しい運命を辿る「甲府在番」など、歴史に材を取った力作11編。

松本清張著

張込み

傑作短編集(五)

平凡な主婦の秘められた過去を、殺人犯を張込み中の刑事の眼でとらえて、推理小説界に新風を吹きこんだ表題作など8編を収める。

松本清張著

駅路

傑作短編集(六)

これまでの平凡な人生から解放されたい……。停年後を愛人と送るために失踪した男の悲しい結末を描く表題作など、10編の推理小説集。

宮城谷昌光著

晏子（一～四）

大小多数の国が乱立した中国春秋期。卓越した智謀と比類なき徳望で斉の存亡の危機を救った晏子父子の波瀾の生涯を描く歴史雄編。

宮城谷昌光著

玉人

女あり、玉のごとし――運命的な出会いをした男と女の烈しい恋の喜びと別離の嘆きを幻想的に描く表題作など、中国古代恋物語六篇。

宮城谷昌光著

史記の風景

中国歴史小説屈指の名手が、『史記』に溢れる人間の英知を探り、高名な成句、熟語のルーツをたどりながら、斬新な解釈を提示する。

宮城谷昌光著

楽毅（一～四）

策謀渦巻く古代中国の戦国時代。名将・楽毅の生涯を通して「人がみごとに生きるとはどういうことか」を描いた傑作巨編！

宮城谷昌光著

香乱記（一～四）

殺戮と虐殺の項羽、裏切りと豹変の劉邦。秦の始皇帝没後の惑乱の中で、一人信義を貫いた英傑田横の生涯を描く著者会心の歴史雄編。

宮城谷昌光著

風は山河より（一～六）

すべてはこの男の決断から始まった。後の徳川泰平の世へと繋がる英傑たちの活躍を描く歴史巨編。中国歴史小説の巨匠初の戦国日本。

山本周五郎著

青べか物語

うらぶれた漁師町浦粕に住みついた〝私〟の眼を通して、独特の狡猾さ、愉快さ、質朴さをもつ住人たちの生活ぶりを巧みな筆で捉える。

山本周五郎著

柳橋物語・むかしも今も

幼い一途な恋を信じたおせんを襲う悲しい運命の「柳橋物語」。愚直なる男が愚直を貫き通したがゆえに幸福をつかむ「むかしも今も」。

山本周五郎著

五瓣の椿

自分が不義の子と知ったおしのは、淫蕩な母と相手の男たちを次々と殺す。息絶えた五人の男たちのそばには赤い椿の花びらが……。

山本周五郎著

赤ひげ診療譚

小石川養生所の〝赤ひげ〟と呼ばれる医師と、見習い医師との魂のふれ合いを中心に、貧しさと病苦の中でも逞しい江戸庶民の姿を描く。

山本周五郎著

大炊介始末（おおいのすけ）

自分の出生の秘密を知った大炊介が、狂態を装って父に憎まれようとする姿を描く「大炊介始末」のほか、「よじょう」等、全10編を収録。

山本周五郎著

小説日本婦道記

厳しい武家の定めの中で、夫や子のために生き抜いた日本の女たち——その強靱さ、凛とした美しさや哀しみが溢れる感動的な作品集。

新潮文庫最新刊

畠中恵著
ころころろ
大変だ、若だんなが今度は失明だって!? 手がかりはどうやらある神様が握っているらしい。長崎屋を次々と災難が襲う急展開の第八弾。

佐々木譲著
暴雪圏
会社員、殺人犯、不倫主婦、ジゴロ、家出少女。猛威を振るう暴風雪が人々の運命を変えた。川久保篤巡査部長、ふたたび登場。

沼田まほかる著
アミダサマ
冥界に旅立つ者をこの世に引き留める少女、ミハル。この幼子が周囲の人間を狂わせる。ホラーサスペンス大賞受賞作家が放つ傑作。

加藤廣著
謎手本忠臣蔵
（上・中・下）
なぜその朝、勅使の登城は早められたのか？朝廷との確執、失われた密書の存在――。国民文学の論争に終止符をうつ、忠臣蔵決定版。

井上荒野著
雉猫心中
雉猫に導かれるようにして男女は出会った。飢えたように互いを貪り、官能の虜となった二人の行き着く先は？ 破滅的な恋愛長編。

阿川佐和子・井上荒野
大島真寿美・島本理生
乃南アサ・村山由佳
森絵都著
最後の恋 プレミアム
―つまり、自分史上最高の恋。―
これで、最後。そう切に願っても、恋の行く末は選べない。7人の作家が「最高の恋」の終わりとその先を描く、極上のアンソロジー。

新潮文庫最新刊

谷川俊太郎著

トロムソコラージュ
鮎川信夫賞受賞

ノルウェーのトロムソで即興的に書かれた表題作、あの世への旅のユーモラスなルポ「臨死船」など、時空を超える長編物語詩6編。

安東みきえ著

頭のうちどころが悪かった熊の話

動物たちの世間話に生き物世界の不条理を知る。ユーモラスでスパイシーな寓話集。イラスト14点も収録。ベストセラー、待望の文庫化。

湯川　豊著

須賀敦子を読む
読売文学賞受賞

イタリアを愛し、書物を愛し、人を愛し、惜しまれて逝った作家・須賀敦子。主著を精読し、その人生と魂の足跡に迫る本格的評伝。

平松洋子著

夜中にジャムを煮る

つくること食べることの幸福が満ちる場所。それが台所。笑顔あふれる台所から、食材と道具への尽きぬ愛情をつづったエッセイ集。

池谷裕二著

受験脳の作り方
―脳科学で考える効率的学習法―

脳は、記憶を忘れるようにできている。そのしくみを正しく理解して、受験に克とう！――気鋭の脳研究者が考える、最強学習法。

黒川伊保子著

運がいいと言われる人の脳科学

幸運を手にした人は、自らの役割を「責務」ではなく「好きだから」と答える――脳と感性の研究者が説く、運がいい人生の極意。

新潮文庫最新刊

渡辺康幸著

復活から常勝へ
―早稲田大学駅伝チームの〈自ら育つ力〉―

伝統校が「箱根」で2年連続シード落ち――青年監督は、いかにして低迷を脱し、強いワセダを取り戻したのか。再生と成長の物語。

星野道夫著

星野道夫ダイアリー

アラスカの原野を旅し、オーロラの光を追い求め、古老の話に耳を傾けた星野道夫。その写真と文章をちりばめた『書き込み日記帳』。

T・クランシー
G・ブラックウッド
田村源二訳

デッド・オア・アライヴ
（1・2）

極秘部隊により9・11テロの黒幕を追え！軍事謀略小説の最高峰、ジャック・ライアン・シリーズが空前のスケールで堂々の復活。

J・フジーリ
村上春樹訳

ペット・サウンズ

恋愛への憧れと挫折、抑圧的な父親との確執……。ビーチ・ボーイズの最高傑作に隠された、天才ブライアン・ウィルソンの苦悩。

G・D・ロバーツ
田口俊樹訳

シャンタラム
（上・中・下）

重警備刑務所を脱獄し、ボンベイに潜伏した男の数奇な体験。バックパッカーとセレブが崇めた現代の『千夜一夜物語』、遂に邦訳！

P・オースター
柴田元幸訳

幻影の書

妻と子を喪った男の元に届いた死者からの手紙。伝説の映画監督が生きている？　その探索行の果てとは――。著者の新たなる代表作。

謎手本忠臣蔵（下）

新潮文庫　　か－48－5



平成二十三年十二月　一　日　発　行

著　者　加藤廣

発行者　佐藤隆信

発行所　株式会社　新潮社

郵便番号　一六二―八七一一
東京都新宿区矢来町七一
電話　編集部（〇三）三二六六―五四四〇
読者係（〇三）三二六六―五一一一
http://www.shinchosha.co.jp

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・大日本印刷株式会社　製本・加藤製本株式会社

© Hiroshi Katô 2008　Printed in Japan

ISBN978-4-10-133055-6 C0193





定価：本体550円（税別）

ついに明らかになった刃傷事件の真相。赤穂藩、幕府、朝廷を巻き込んだ情報戦争は最終局面へ。運命の討入り当日、四十七士の面々と亡き主君のために奔走した大石内蔵助の胸に去来したものとは——。そして桂一計画を実現させた柳沢吉保が見たものとは——。「忠臣蔵三百年の謎」を解き明かし、日本史上、もっとも有名な物語を全く新しい解釈で描きなおした一大巨編、堂々完結。

ISBN978-4-10-133055-6

C0193 ¥550E